斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14

島根県出雲市

古志本郷遺跡Ⅳ
放れ山横穴墓群
只谷間府
上沢Ⅲ遺跡（分析編）

2002年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
島根県教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14

島根県出雲市

古志本郷遺跡Ⅳ
放れ山横穴墓群
只谷間府
上沢Ⅲ遺跡（分析編）

２００２年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所

島　根　県　教　育　委　員　会

序

国土交通省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分に留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成3年度から島根県教育委員会のご協力のもとに調査を行っています。古志地区周辺には数多くの遺跡が知られていますが、今回の調査箇所においても古墳時代の溝や横穴墓が見つかり、古くから人々の生活が営まれていたことが分かりました。また、塩冶地区における間府の調査によって、先人の技術の高さや努力のあとを目の当たりにすることができました。

当事務所といたしましては、今後とも島根県教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財を記録し保存するための調査を円滑に進めてまいりたいと考えており、本報告書が埋蔵文化財に対するより一層の関心とご理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導、ご協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

国土交通省中国地方整備局
出雲工事事務所
所長　船　橋　昇　治

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受け、平成3年度以来、斐伊川放水路建設予定地内での遺跡の発掘調査を行っています。本書は平成8から13年度にかけて発掘を実施した遺跡のうち、古志本郷遺跡、放れ山横穴墓群、只谷間府、上沢Ⅲ遺跡について、その発掘調査をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲市周辺地域は、島根県内でも有数の遺跡集中地域であり、数多くの歴史的文化遺産が眠っているところです。古志本郷遺跡の調査では、古墳時代初頭の溝を確認することができ、溝の用途や当時の景観について検討する上で貴重な資料を提示したことになりました。

放れ山横穴墓群の調査では、神戸川左岸における古墳時代終末の墓制の一様相を確認することができました。

只谷間府の調査では、江戸時代の人々が水を求めるために用いた技術の高さやその中に隠された努力や苦心のあとを感じることができました。

また、上沢Ⅲ遺跡の報告では、古代から中世における鍛冶や鋳造に関連する遺物の分析を行いました。

これらの成果は、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料となるものです。

本書が地域の埋蔵文化財に対する理解や歴史学習に活用されることを期待いたします。

なお、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては、地元の皆様、国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所をはじめ関係の皆様から、多くの御協力を得ましたことに対して心からお礼申し上げます。

平成14年3月

島根県教育委員会
教育長　山　﨑　悠　雄

例　　言

1　本書は建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）が平成8～13年度に実施した、斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　発掘調査を行った遺跡と地番は以下のとおりである。

古志本郷遺跡　　出雲市古志町954ほか（平成13年度調査）
放れ山横穴墓群　出雲市古志町（平成8年度調査）
只谷間府　　出雲市上塩冶町2316ほか（平成9年度調査）
上沢Ⅲ遺跡　　出雲市上塩冶町（平成10年度調査、平成12年度報告書刊行。今回は分析編のみ）

3　挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標Ｘ軸の方向を指す。

4　現地調査及び報告書の作成に当たって下記の方々から御指導、御助言、御支援いただいた。
（敬称略：五十音順）
《古志本郷遺跡》梅木謙一　白石　聡　濵田竜彦　米田美江子
《只谷間府》林　正久

5　本報告書の写真のうち、写真図版1は国際航業株式会社が、只谷間府坑内の写真は井上治夫氏が撮影し、それ以外は各担当者が撮影した。なお、写真図版1は国際航業株式会社にＨ区、Ｉ区の写真との合成も依頼した。

6　本報告書の第1図は国土地理院発行の1/25,000図の「稗原」（平成9年）、「出雲今市」「大社」（平成10年）、「神西湖」（平成12年）を使用した。

7　本報告書の執筆は各担当者が行い目次に記した。編集は文化財課及び埋蔵文化財調査センター職員の協力と各担当者の指示を受けて中川　寧が行った。

8　本報告書では出土した遺物の中の代表的なものに限って掲載したが、非掲載遺物は埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）に収蔵している。調査の写真やスライドとともに、広範な利用を期待する。

凡　　例

1　本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。
（１）遺構図　1/40・1/100・1/200
（２）遺物実測図　土器・土製品：1/3・1/4　金属器：1/2　木製品：1/3・1/4

2　遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りにし、それ以外の土器は白抜きであらわした。

3　本文、挿図及び写真図版の遺物番号は一致する。

4　本報告において遺構は以下の略称を用いた　ＳＤ：溝　ＳＸ：不明遺構　Ｐ：ピット

本文目次

第１章　調査に至る経緯（中川　寧）…… 1
第２章　調査組織（中川　寧）…… 2
第３章　位置と環境（中川　寧）…… 3
第４章　調査の結果…… 7
（Ⅰ）古志本郷遺跡（中川　寧）…… 7
1　調査の経過　7
2　土層　12
3　遺構　12
4　遺物　17
5　調査のまとめ　22
（Ⅱ）放れ山横穴墓群（平石　充）…… 29
（Ⅲ）只谷間府（宮澤明久）…… 33
1　調査の経緯と経過　33
2　遺構　36
3　文献資料　39
4　まとめ　39
（Ⅳ）上沢Ⅲ遺跡出土鋳造・鍛冶関連遺物の金属学的調査
（九州テクノリサーチ･TACセンター　大澤正己･鈴木瑞穂）…41
1　いきさつ　41
2　調査方法　41
3　調査結果　42
4　まとめ　48

挿図目次

第１図　古志本郷遺跡・放れ山横穴墓群・只谷間府、上沢Ⅲ遺跡と周辺の遺跡　4

《古志本郷遺跡》
第２図　古志本郷遺跡と周辺の遺跡の調査区配置図（1）　8
第３図　調査区配置図（2）　9
第４図　調査区全体図　10
第５図　南壁断面図　11
第６図　土層概念図　13
第７図　西壁・北壁・SD01断面図　14
第８図　SD01・SD02平面図　16
第９図　SD02土器出土状況図（平面・断面）　17
第10図　時期不明の遺構　17
第11図　遺物実測図（1）　18
第12図　遺物実測図（2）　19
第13図　遺物実測図（3）　20
第14図　古志本郷遺跡と周辺の遺跡における、弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝　23

《放れ山横穴墓群》
第15図　放れ山横穴墓群と調査前の周辺地形　29
第16図　放れ山横穴墓群1号横穴墓実測図および出土遺物実測図　31

《只谷間府》
第17図　只谷間府と周辺の地形　34
第18図　平面図・縦断面図　35
第19図　平面図・横断面図　37

表目次

《古志本郷遺跡》
表1　古志本郷遺跡・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡と周辺の遺跡　5
表2　古志本郷遺跡の調査地点と調査結果　7
表3　南壁・西壁の土層　13
表4－1　出土遺物観察表（土器・土製品）　26
2　出土遺物観察表（木製品）　27
表5　古志本郷遺跡遺物数量表　28

《上沢Ⅲ遺跡・分析編》
Table.1　供試材の履歴と調査項目　50
Table.2　供試材の組成　51
Table.3　出土遺物の調査結果のまとめ　52

写真図版目次

《古志本郷遺跡》
写真図版 1　調査区空撮写真
2－1　SD02出土古式土師器
2　青磁
3　木製の容器
4－1　調査前風景
2　西壁
5－1　南壁（東側）
2　南壁（中央）
6－1　南壁（西側）
2　北壁
7－1　SD01・SD02検出（西から）
2　SD02土器検出（東から）
8－1　SD02完掘（北西から）
2　完掘（西から）
9　古式土師器（1）
10　古式土師器（2）・土製品・土師器（1）・中世土師器（1）
11　弥生土器（1）・古式土師器（3）・須恵器（1）
12　古式土師器（4）・土師器（2）・中世土師器（2）
13　弥生土器（2）・古式土師器（5）
14　須恵器（2）・中世陶器・中世土師器（3）・木製品（1）
15　木製品（2）
16　木製品（3）
17　木製品（4）

《放れ山横穴墓群》
18－1　調査前風景
2　表土剥ぎ取り状況
3　土層堆積状況
19－1　遺物出土状況
2　完掘状況（1）
3　完掘状況（2）
20－1　玄室壁の工具痕
2　出土遺物

《只谷間府》
21－1　10m付近（下流から）
2　70m付近（上流から）
22－1　明かり取り穴（75m付近、上流から）
2　94m付近（下流から）
23－1　150m付近（下流から）
2　180m付近（下流から）
24－1　湾曲状況（200m付近、下流から）
2　段違いの天井（245m付近、下流から）
25－1　コンクリート天井（269m付近、下流から）
2　290m付近（下流から）

《上沢Ⅲ遺跡・分析編》
Photo.1　溶解炉炉壁・ガラス質滓の顕微鏡組織
Photo.2　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織
Photo.3　鍛冶滓（含鉄）の顕微鏡組織
Photo.4　精錬滓（含鉄）・粒状滓の顕微鏡組織
Photo.5　粒状滓の顕微鏡組織
Photo.6　鍛造剥片の顕微鏡組織
Photo.7　鍛造剥片・羽口の顕微鏡組織
Photo.8　滓部鉱物相の反射電子像と定量分析値

第１章　調査に至る経緯

斐伊川の治水事業は大正11年より直轄施工として改修が行われてきたが、昭和に入って相次ぐ洪水に悩まされ、とりわけ昭和47年の豪雨では斐伊川・神戸川の両河川は破堤寸前に陥り、また、宍道湖の増水により松江市をはじめとする約70km²が1週間以上にわたって浸水するという被害を受けた。このため、斐伊川・神戸川の抜本的な治水計画を樹立するため、両水系を一体化した高水処理計画が立てられた。

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市塩冶町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより神戸川下流域は、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量をあわせた計画水流量を持つ斐伊川放水路として、必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ。この計画は、斐伊川流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、建設省（現国土交通省）が同51年に確定したものである。ルートは同54年に最終決定された。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年3月に「斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめて報告した。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所（現国土交通省中国地方整備局）から委託を受けて、上塩冶町を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら、一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに、昭和55年3月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課及び島根県教育庁文化課の三者で協議が進められ、平成3年1月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定し、平成3年4月より発掘調査事業を開始した。なお、現地調査は平成13年12月をもって完全に終了した。

今回報告する遺跡のうち、放れ山横穴墓群は平成8年度、只谷間府は平成9年度、上沢Ⅲ遺跡は平成10年度、古志本郷遺跡は平成13年度に調査を行った。

第２章　調査組織

調査主体　島根県教育委員会

[平成８年度]（放れ山横穴墓群調査）

［事務局］

教育庁文化財課長	勝部　昭
埋蔵文化財調査センター長	宍道正年
課長補佐	森山洋光
課長補佐	古﨑蔵治
調査第１係主幹	宮澤明久

［調査員］

調査第１係	
文化財保護主事	今岡一三
同主事	平石　充

[平成９年度]（只谷間府調査）

［事務局］

教育庁文化財課長	勝部　昭
埋蔵文化財調査センター長	宍道正年
課長補佐	島地徳郎
課長補佐	古﨑蔵治

［調査員］

調査第１係主幹	宮澤明久
同(兼)文化財保護主事	安部清志
同調査補助員	柴崎香織

[平成10年度]（上沢Ⅲ遺跡調査）

［事務局］

教育庁文化財課長	勝部　昭
埋蔵文化財調査センター長	宍道正年
課長補佐	秋山　実
課長補佐	松本岩雄

［調査員］

調査第２係主幹	内田律雄
同(兼)文化財保護主事	高塚久司
同調査補助員	黒谷達典
同調査補助員	野津　清

[平成13年度]（古志本郷遺跡調査・報告書作成）

［事務局］

埋蔵文化財調査センター所長	宍道正年
総務課長	内田　融
調査第２課長	川原和人
総務係主幹	今岡　宏（～平成13年11月30日）
調査第５係主幹	内田律雄
調査第６係長	萩　雅人

［調査員］

調査第２課主事	中川　寧
同(兼)文化財保護主事	石倉康民
同調査補助員	阿部智子

発掘作業員の雇用などの現地での発掘作業については、島根県教育委員会から(社)中国建設弘済会へ委託して実施した。担当者は以下の通りである。

社団法人中国建設弘済会島根県支部　技術員　中村弘己　小村敏行

下記の方々に室内整理作業員として従事していただいた。

天津文子、池田智恵、来海順子、陶山佳代、矢内敏江

第３章　位置と環境

縄文時代

出雲平野における旧石器時代の遺跡は現在まで発見されていない。

縄文時代の遺跡として、弥山南麓にある縄文時代早期末の菱根遺跡や浜山の砂丘下にある上長浜貝塚がある。また、**三田谷Ⅲ遺跡**(52)からは船元Ⅳ式や里木Ⅱ式など中期の土器が出土している。**三田谷Ⅰ遺跡**(50)からは後期の福田K2式に併行する土器群や四元式、晩期の八日市新保式や岩田第四類などが大量に出土している。また、後期の三瓶山の噴火に伴う火山泥流によって埋没した丸木舟が出土し、地質学的検討が行われている。

弥生時代

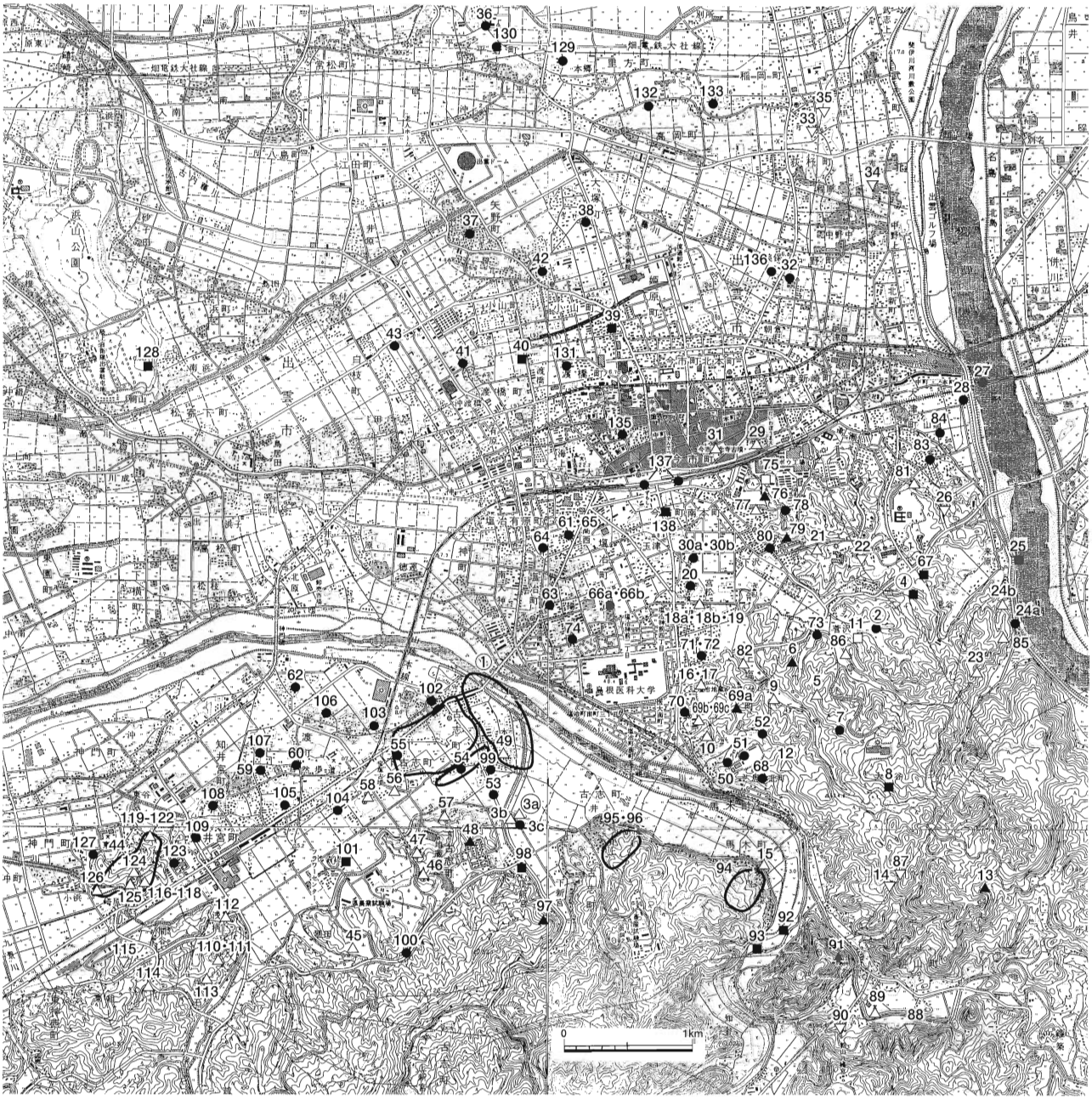
前期の遺跡は縄文時代晩期から継続する遺跡が多く、丘陵縁辺部よりも背後に小河川を伴う谷を控えた低地に位置する例が多い。この低地に位置することが前期の遺跡の特徴である。東北部九州からの搬入品と考えられる大型の壺が出土するなど、晩期から継続して遺物が見られる**三田谷Ⅰ遺跡**、住居と考えられる火処から突帯文系土器が出土した**蔵小路西遺跡**(40)などがある。出雲東部では前期末～中期前葉に丘陵斜面へ遺跡が進出することが認められるが、出雲平野ではそのような例が認められるかどうかは不明である。中期前葉の遺跡は**蔵小路西遺跡**、**三田谷Ⅰ遺跡**、**矢野遺跡**(37)、**浅柄遺跡**(134)などであるが前期ほど多くはない。

中期中葉以降斐伊川や神戸川沿いの微高地上に集落が分布するようになる。**天神遺跡**(64)や**下古志遺跡**(55)、**田畑遺跡**(54)は環濠の可能性のある大溝を持つ大規模な遺跡である。他には絵画土器の出土した**白枝荒神遺跡**(43)、**知井宮多聞院遺跡**(59)、**海上遺跡**(135) などがある。後期になると**小山遺跡**(42)、**中野美保遺跡**(136)などの新たな遺跡が営まれ、平野全体に集落が広がっていく。また、**姫原西遺跡**(39)では集落同士を結ぶ木橋を検出したほか、旧河道からは容器など多くの木製品が出土した。遺構では**下古志遺跡**の布掘り建物が特筆される。墳墓では**西谷墳墓群**(26)がある。後期後葉になってはじめて出雲平野でも四隅突出型墳丘墓が築かれるようである。このうち西谷2号墓、3号墓、4号墓、9号墓は一辺が30～40mと破格の規模を持つ墳丘墓である。他に**三田谷Ⅰ遺跡**では方形周溝墓が検出されている。

なお、他地域との交流を示す遺物として、分銅形土製品（**古志本郷遺跡**、**下古志遺跡**、**矢野遺跡**、**白枝荒神遺跡**）、須玖式土器（**下古志遺跡D区**）、西部瀬戸内系土器（**白枝荒神遺跡**）、吉備の特殊土器（**西谷墳墓群**、**矢野遺跡**、**白枝荒神遺跡**）などがある。

古墳時代

弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけて**古志本郷遺跡**や**下古志遺跡**、**田畑遺跡**、**天神遺跡**などでは溝が確認されており、溝の中からは大量の土器が出土する。他に**白枝荒神遺跡**や**姫原西遺跡**でも多くの遺物が確認されている。これらの遺跡からは在地の土器に混じって小型器台や中国地方西部で見られる布留甕などいわゆる「畿内形土器」が出土する事が多い。これはタタキ甕や庄内甕が見られる出雲東部や伯耆西部とは様相を大きく異にする。遺物や遺構の数から考えると、出雲平野においてこの時期に一つのピークが存在するようであるが、これらの遺跡は古墳時代前期に見かけ上衰退するようで、古墳時代中期～後期の集落遺跡としては、**斐伊川鉄橋遺跡**(27)や**石土手遺跡**(28)、**三田谷Ⅰ遺跡**、



第1図　古志本郷遺跡・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡と周辺の遺跡（S＝1/50,000）

浅柄遺跡で遺構・遺物が見つかっている程度である。

墓制では西谷で築かれていたような四隅突出型墳丘墓は築かれなくなり、前期末には出雲平野の南北に大寺古墳と山地古墳が出現するが、前期古墳はこの2基だけのようである。中期になると石棺を内部主体とする**池田古墳**(82)や**西谷15、16号墳**(26)が築かれる。後期になると古墳の数は急増する。首長墓は神戸川流域の丘陵地帯に**今市大念寺古墳**(29)、**上塩冶築山古墳**(18a)、**地蔵山古墳**(16)と相次いで築造される。**今市大念寺古墳**は全長92mで全国最大級の家型石棺を有し、その被葬者は出雲西部の最高首長と推定される。終末期になると出雲では横穴墓が出現する。出雲平野ではアーチ形や家形の横穴墓が築かれ、特に妻入家形が中心になる。神戸川右岸の**上塩冶横穴墓群**(5、9、10)は、県内屈指の規模を持つ横穴墓群として知られ、うち２穴からは金糸が出土した。左岸には小規模ではあるが、**妙蓮寺山古墳**(57)、**宝塚古墳**(56)、**放れ山古墳**(3b)などがあり、**地蔵堂横穴墓群**(46)や**神門横穴墓群**(44)など大規模な横穴墓群も形成されている。

No.	遺　跡　名	性 格	No.	遺　跡　名	性 格	No.	遺　跡　名	性 格
1	古志本郷遺跡	集落	47	地蔵堂北横穴墓群	横穴	95	井上古墳	古墳
2	上沢Ⅲ遺跡	散布地	48	浄土寺山城跡	城跡	96	井上横穴墓群	横穴
3 a	放れ山横穴墓群	横穴	49	大梶古墳	古墳	97	栗栖城跡	城跡
3 b	放れ山古墳	古墳	50	三田谷Ⅰ遺跡	集落	98	宇賀池堤跡	堤跡
3 c	放れ山遺跡	散布地	51	三田谷Ⅱ遺跡	散布地	99	思案橋北遺跡	散布地
4	只谷間府	水路跡	52	三田谷Ⅲ遺跡	散布地	100	廻田谷遺跡	散布地
5	上塩冶横穴墓群第７支群	横穴	53	古志遺跡	散布地	101	比布智館跡	館跡
6	大井谷城跡	城跡	54	田畑遺跡	散布地	102	弘法寺参道付近遺跡	散布地
7	大井谷Ⅰ遺跡	散布地	55	下古志遺跡	集落	103	下古志天満宮付近遺跡	散布地
8	大井谷Ⅱ遺跡	寺院跡	56	宝塚古墳	古墳	104	芦渡遺跡	散布地
9	上塩冶横穴墓群第22支群	横穴	57	妙蓮寺山古墳	古墳	105	嘉儀遺跡	散布地
10	上塩冶横穴墓群第33支群	横穴	58	天神原古墳	古墳	106	阿弥陀寺西遺跡	散布地
11	上沢Ⅱ遺跡	石切り場跡	59	知井宮多聞院遺跡	集落跡	107	多聞院北遺跡	散布地
12	光明寺古墳群	古墳	60	東原遺跡	散布地	108	観知寺付近遺跡	散布地
13	唐墨城跡	城跡	61	伝塩冶氏館跡	館跡	109	智伊館跡	館跡
14	大坊古墓	古墓	62	極楽寺付近遺跡	散布地	110	浅柄古墳	古墳
15	小坂古墳	古墳	63	弓原遺跡	散布地	111	浅柄南古墳	古墳
16	地蔵山古墳	古墳	64	天神遺跡	散布地	112	間谷古墳	古墳
17	池田遺跡	散布地	65	高西遺跡	散布地	113	間谷東古墳	古墳
18a	上塩冶築山古墳	古墳	66a	神門寺境内廃寺	寺院跡	114	間谷西古墳	古墳
18b	築山遺跡	集落跡	66b	神門寺付近遺跡	散布地	115	古垣内遺跡	土壙墓
19	塩冶判官館跡	館跡	67	長者原廃寺	寺院跡	116	東谷北横穴墓群	横穴
20	宮松遺跡	散布地	68	光明寺南遺跡	散布地	117	真幸ヶ丘西横穴墓群	横穴
21	下沢古墳	古墳	69a	半分城跡	城跡	118	マチキン坂横穴墓群	横穴
22	菅沢古墓	古墓	69b	半分遺跡	散布地	119	福知寺横穴墓群	横穴
23	権現山横穴墓群	横穴	69c	半分古墳	古墳	120	福知寺裏土壙墓	土壙墓
24a	長廻遺跡	散布地	70	出雲工業西遺跡	散布地	121	山本陽一朗宅裏横穴墓群	横穴
24b	長廻横穴墓群	横穴	71	寿昌寺遺跡	散布地	122	三成範夫宅裏横穴墓群	横穴
25	来原岩樋	水路跡	72	寿昌寺西遺跡	散布地	123	東谷Ⅰ遺跡	散布地
26	西谷墳墓群	墳墓	73	菅沢古墳	古墳	124	梶谷徳次宅裏横穴墓群	横穴
27	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	74	塩冶小学校付近遺跡	散布地	125	小浜山横穴墓群	横穴
28	石土手遺跡	散布地	75	樋野祐平窯跡	窯跡	126	小浜寺山横穴墓群	横穴
29	今市大念寺古墳	古墳	76	平家丸城跡	城跡	127	東谷Ⅱ遺跡	散布地
30a	角田古墳	古墳	77	久徴園横穴墓	横穴	128	馬見烽跡	烽跡
30b	角田遺跡	散布地	78	下沢遺跡	散布地	129	高浜Ⅰ遺跡	散布地
31	塚山古墳	古墳	79	向山城跡	城跡	130	高浜Ⅱ遺跡	散布地
32	太歳遺跡	散布地	80	下沢会館周辺遺跡	散布地	131	渡橋遺跡	散布地
33	荻杼古墓	古墓	81	西谷横穴墓	横穴	132	高岡遺跡	散布地
34	荻杼Ⅰ遺跡	古墓	82	池田古墳	古墳	133	稲岡遺跡	散布地
35	荻杼Ⅱ遺跡	古墓・散布地	83	中山丘陵遺跡	散布地	134	浅柄遺跡	散布地
36	里方八石原遺跡	散布地	84	神田遺跡	散布地	135	海上遺跡	散布地
37	矢野遺跡	貝塚他	85	権現山古墳	古墳	136	中野美保遺跡	集落
38	大塚遺跡	散布地	86	狐廻谷古墳	古墳	137	藤ヶ森遺跡	集落
39	姫原西遺跡	旧河道	87	大坊経塚	経塚	138	藤ヶ森南遺跡	水田跡
40	蔵小路西遺跡	館跡	88	荒神廻遺跡	古墓			
41	渡橋沖遺跡	集落	89	祝廻横穴墓群	横穴			
42	小山遺跡	散布地	90	朝山古墓	古墓			
43	白枝荒神遺跡	集落	91	姉山城跡	城跡			
44	神門横穴墓群	横穴	92	馬木岩樋跡	水路跡			
45	深田谷横穴墓群	横穴	93	大井関遺跡	堰跡			
46	地蔵堂横穴墓群	横穴	94	刈山古墳群	古墳			

（凡例）
●集落・散布地
△古墳・横穴
▽古墓・経塚
▲城跡
□生産遺跡
■その他の遺跡

表1　古志本郷遺跡、放れ山横穴墓群、只谷間府、上沢Ⅲ遺跡と周辺の遺跡

奈良・平安時代

当時の官衙跡との関連が推定される遺跡として、木簡・緑釉陶器・墨書土器等が出土した**三田谷Ⅰ遺跡**、緑釉陶器・墨書土器・大型の掘立柱建物跡が検出された**天神遺跡**などがある。また、**古志本郷遺跡G区**の調査では、総柱建物を含む掘立柱建物、建物群を区画する溝とそれに平行する柵列ととも

に、墨書土器、刻書土器、円面硯、腰帯金具等の遺物が出土している。建物はいずれも大型で柱穴も大きく、柱間が完数尺で設計され規格性を持つなど、全体として官衙的色彩が強く、このうち2棟は配置と規格より郡庁の一部である可能性が高い。古代寺院跡としては**神門寺境内廃寺**(66a)や**長者原廃寺**(67)が存在し、「出雲国風土記」記載の新造院との比定が進められている。古墓としては、出雲平野南側丘陵に石製骨蔵器を備える**菅沢古墓**(22)や**朝山古墓**(90)、石室に石櫃が置かれた**小坂古墳**(15)、1辺75cmの立方体の石櫃が納められた**光明寺3号墓**(12)等があり、火葬の風習がこの地方にも伝わっていたことがわかる。集落遺跡としては、**藤ヶ森南遺跡**(138)で古墳時代末～奈良時代の水田跡が、**高岡遺跡**(132)で平安時代の水田跡が確認されているほか、**角田遺跡**(30b)、**里方八石原遺跡**(36)、**高浜Ⅱ遺跡**(130)、墨書土器やヘラ描き土器が出土した**小山遺跡**などがある。

中世

この時代の遺跡としては、総柱の掘立柱建物が確認された**渡橋沖遺跡**(68)があるほか、**蔵小路西遺跡**からは幅約4mの堀や掘立柱建物跡にともなう12～15世紀の遺物が確認されている。**矢野遺跡**では30m×30m以上の溝で区画された14～15世紀の屋敷地が確認されている。**大井谷Ⅱ遺跡**(８)では瀬戸の燭台が出土したほか、13～15世紀の国産・輸入陶磁器が出土した。般若寺との関連が指摘されている。**三田谷Ⅰ遺跡**では13世紀の堰堤状遺構が確認された。墳墓では**荻杼古墓**(28)には国の重要文化財に指定された青磁碗が副葬されていた。**姫原西遺跡**では数珠や櫛、無文銭を伴う木棺墓が確認された。

戦国時代には下古志町の南部丘陵に古志氏の居城である**浄土寺山城**(48)、**栗栖城**(97)が築かれている。旧山陰道沿いにはその市場町が形成され、古志町の基となっている。他には**伝塩冶氏館跡**(61)、**半分城跡**(69a)、**向山城跡**(79)、**智伊館跡**(109)などがある。

近世

17世紀以降松江藩は財政基盤の拡大を図って農業開発に力を入れ、治水・灌漑事業や新田開発を出雲平野を中心に盛んに行い、高瀬川、差海川、十間川の普請が広く知られている。古志町周辺では十間川の開削は灌漑・新田開発をもたらしただけでなく、それに伴う道の整備や集落の拡大、商工業の発展を促したようで、17世紀前半には現在の本郷、町部の集落が大きく発展した。18世紀中頃には塩冶町・古志町は今市町・大津町の発展によって衰退していく傾向にあったようであるが、石州・備後街道に通じる交通、舟運の要衝であったことから町屋は街道筋に神戸川沿いまで発展していったようである。

(参考文献)

『古志町誌』出雲市古志町誌編纂委員会　1990
『遺跡が語る古代の出雲』出雲市教育委員会　1997
『出雲・隠岐の城館跡』島根県教育委員会　1998
『山陰地方における弥生時代前期の地域相』第3回西伯耆弥生集落検討会　2001

第４章　調査の結果

（Ⅰ）古志本郷遺跡

１．調査の経過

古志本郷遺跡は出雲市古志町に所在する。神戸川と新宮川が合流する付近一帯に広がる集落遺跡で、神戸川左岸の標高約8～10mの自然堤防上及びその後背湿地帯に形成されている。これまでに島根県教育委員会および出雲市教育委員会により昭和62年以降12次にわたって調査が行われており、弥生時代中期～後期の竪穴住居跡、古墳時代前期の溝、奈良時代の役所跡、中世以降の掘立柱建物や井戸が見つかっている。

今回の調査対象地は古志橋の左岸、旧県道多伎江南出雲線の下に位置している。調査面積は上場で約130m²であった。調査地の北西側はＨ区、南東側はＩ区（ともに平成10年度島根県教育委員会調査）である。平成11年度にH区とＩ区の間の県道部分の調査が必要な旨を建設省（現国土交通省）出雲工事事務所と協議を行い、調査の準備が整う平成13年度に調査を行うことを確認した。

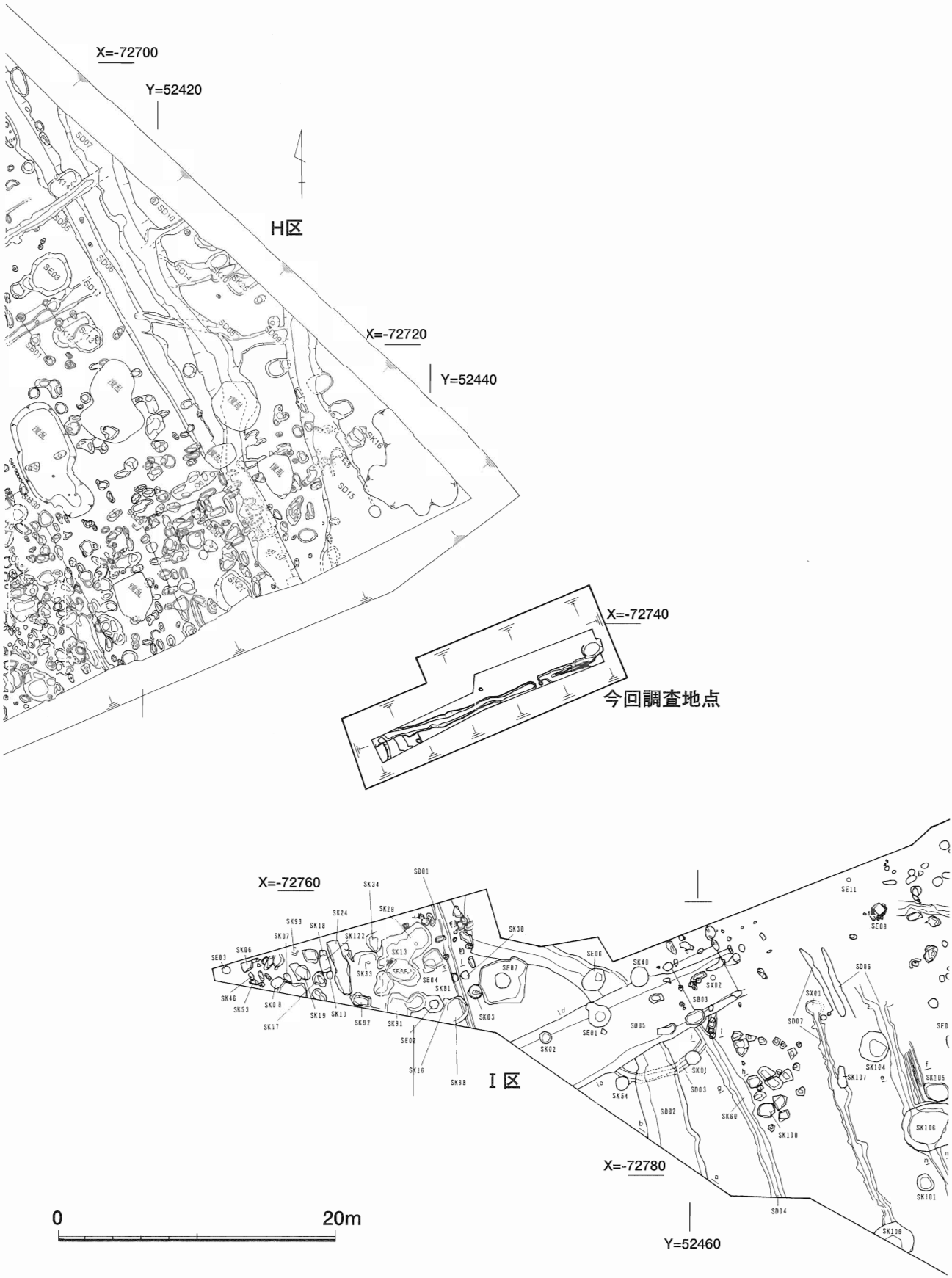
今回の調査は①Ｈ区やＩ区で検出した古墳時代前期の溝の確認、②Ｉ区で確認した奈良～平安時代の遺構の確認、③旧山陰道に関連する近世以前の道路状遺構の確認、を目的とした。

調査区は側溝に幅が規制されたので、アルファベットのLのような形をしている。調査区の中程には、電話線の掘り込みの際に設置したと思われる巨大な石があり、調査の支障となった。調査前の標高は約9mであった。遺構が検出される面が表土から1m以上低いことが予想されたので、約1～1.5mを機械により掘り下げ、それより下は人力で、平成13年10月1日から掘削を開始した。以前使用されていた電話線が地表から約2m下まで埋設されていたほか、江戸時代以降の削平・撹乱が著しく、遺構は古墳時代前期や中世、時期不明の溝とピットを検出したのみであった。包含層の遺物の取り上げは調査区が狭いので東側をA区、西側をB区と二分するにとどめたが溝から出土した遺物や完形に近い遺物はトータルステーションで位置を記録して取り上げた。10月12日に古墳時代前期の溝と土器を

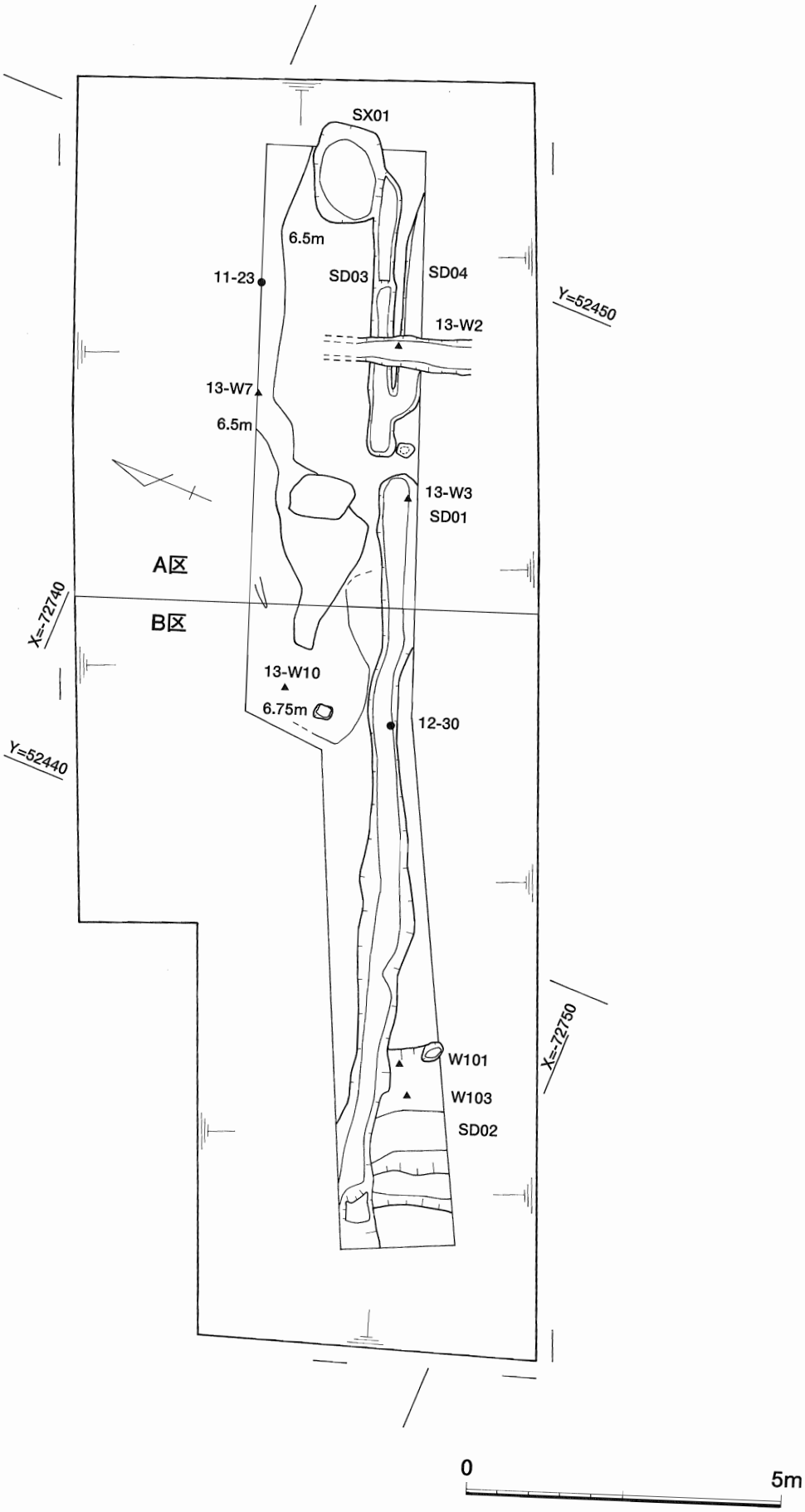
	調査年度	調査地点	調査組織	調査原因	特記事項	文献
１次	昭和62年		出雲市教育委員会	遺跡の範囲確認	６ヶ所のトレンチ	1
２次	平成２年		出雲市教育委員会	古志公民館建設	弥生時代の住居	2
３次	平成５年		出雲市教育委員会	畑地造成		3
４次	平成７年		出雲市教育委員会	土地改良総合事業	古代の遺物出土	5
５次	平成７年	A・B区	島根県教育委員会	斐伊川放水路建設	中世後半～近世の建物・井戸	6
６次	平成７年		出雲市教育委員会	市道本郷新宮線建設	古墳時代の大溝	4
７次	平成８年	A・C区	島根県教育委員会	斐伊川放水路建設	古墳時代の大溝、古代～近世の建物・井戸	6
８次	平成９年	C・D・E区	島根県教育委員会	斐伊川放水路建設	弥生時代の住居、古墳時代の大溝、中世～近世の建物・井戸	6
９次	平成10年	F・G・H・I・J区	島根県教育委員会	斐伊川放水路建設	古墳時代の大溝、奈良時代の郡衙、中世～近世の建物・井戸	7・8・9
10次	平成11年	F・G・H・I・J・K区	島根県教育委員会	斐伊川放水路建設	古墳時代の大溝、奈良時代の郡衙、中世～近世の建物・井戸	7・8・10
11次	平成11年		出雲市教育委員会	範囲確認		
12次	平成12年	K区	島根県教育委員会	斐伊川放水路建設	古墳時代の大溝	11
13次	平成13年		島根県教育委員会	斐伊川放水路建設		本報告書

表2　古志本郷遺跡の調査地点と調査結果

第2図　古志本郷遺跡と周辺の遺跡の調査区配置図(1)（S＝1/5,000）



第3図　調査区配置図(2)（S＝1/400）



第4図　調査区全体図（S＝1/100）　※番号は実測図に一致

第5図　南壁断面図（S＝1/40）

検出し、土層図の作成や遺構の実測などを行い、10月31日に調査を終了した。調査と平行して遺物整理を調査事務所で行い、調査終了後は埋蔵文化財調査センター（松江市打出町）で報告書作成作業を行った。

2．土層（第5～7図）

土層の記録は調査区の東側に接して排土置き場を設置したので調査区の南北および西壁で行った。表土の下の盛り土は0.6～1.0mほど堆積していた。南壁ではピンポールが刺さらないほど硬い面（砂が主体）と泥や軟らかい砂の層が交互に堆積していた。一方北壁では南壁とは異なり、硬く締まった面は検出されなかった。調査区の長辺に平行して廃棄された電話線の掘り込みがあったので、硬質の土層の範囲を確認することはできなかった。

地山は灰白色～灰色の砂層で小礫をわずかに含む。東側は地山が北へ向かって傾斜しており、北側が低くなっている。地山の標高は最も低い部分で約6.5mである。

調査区の西側には古墳時代の溝SD02があり、27～32層がその埋土である。SD02に直交するかたちで中世の溝SD01があり、SD02を切る。調査区の東側では地山に遺構が掘り込まれており、埋土は35～37層（暗褐色土、暗茶褐色土）である。

調査区の東側では地山の直上から、西側ではSD01やSD02があったので溝の直上から、2層や20層といった灰色～灰褐色の極めて硬質の土と3層、12層、16層といった軟らかい砂質土や砂層が、あいだに10層、11層、18層、19層などの砂質土や土を挟んだようなかたちで堆積しているのを確認した。硬質の土はほぼ水平に堆積していた。また、特に西側で顕著であったが、軟らかい砂質土や砂層がその上に堆積している硬質の土によって水平に整地されたようになっていた。硬質の土の上や下には遺構の掘り込みがあるのを断面で確認することができた。

一方北壁では標高7.5mより上の部分では土層を記録することができず、2～8層に分けるにとどまった。6層や7層といった砂質の層の上に植物の茎などを含む5層が堆積していた。

硬質の土が水平に堆積しており、砂層を整地して平坦にしたのちに硬質の土が堆積している部分があることや調査区の南壁でしか見られないことから考えて、この硬質の土は近世以降の生活面、あるいは道路に関係する可能性を持つ。

なお、出雲市内では天神遺跡（7次）D区から0.2～0.3mの厚さで踏み固められた「道状遺構」が検出されている。時期は明治時代以前と推定されている。[註1]

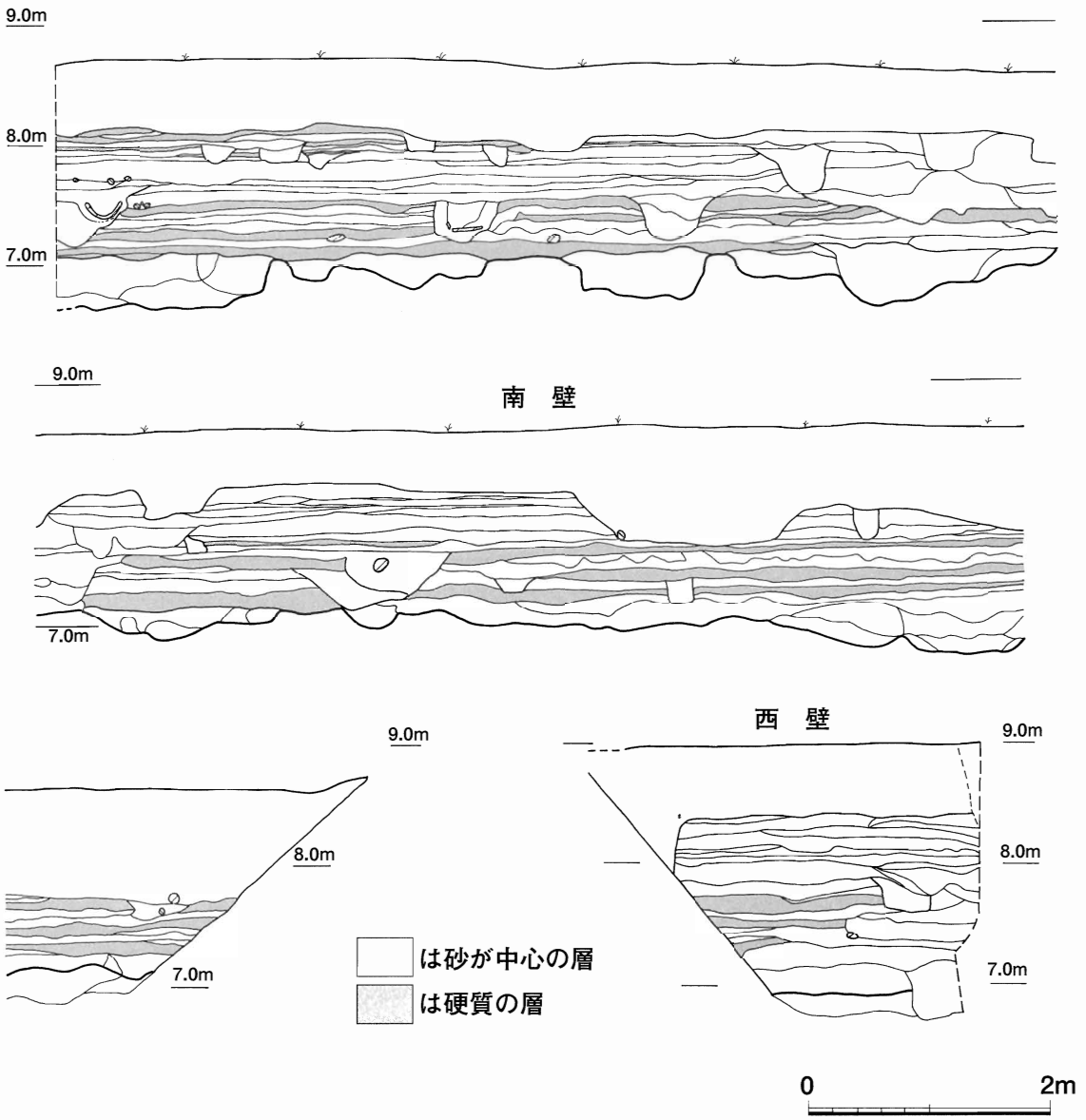
3．遺構

確認できた遺構は溝4条と楕円形の不明遺構1、ピット3箇所である。調査区の東側では調査区の短辺に平行する木樋状の遺構を確認することができたが、近世以降の遺構であると判断したので本報告では遺構名を付けていない。

（1）溝

ＳＤ01（第7、8図）

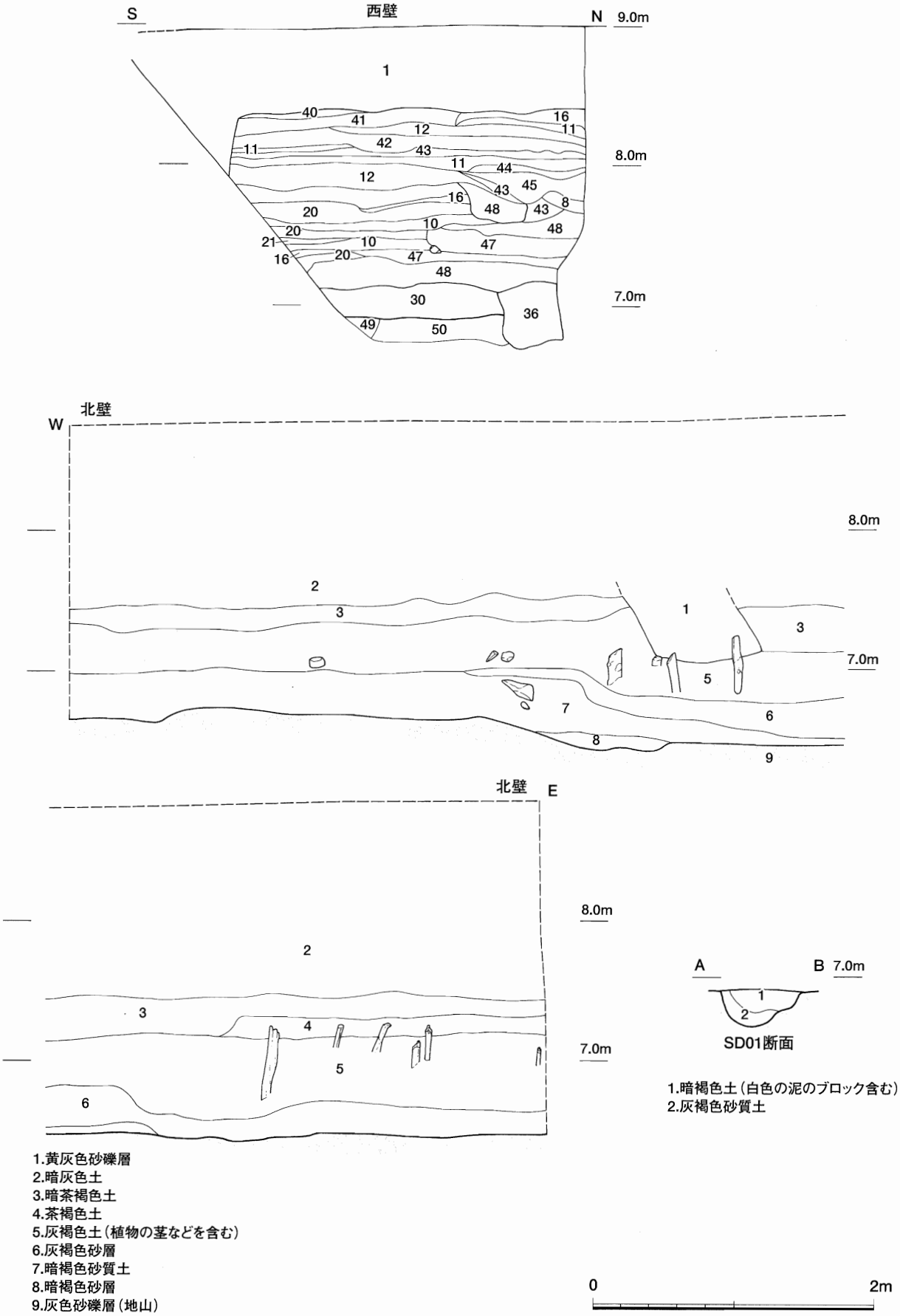
註1　岸　道三編『出雲市駅付近連続立体交差事業地内天神遺跡第7次発掘調査報告書』
出雲市教育委員会　1997



第6図　土層概念図（S＝1/60）

層名	土　　色	特筆事項	18	暗灰色砂質土　小礫混		36	暗褐色土(白色泥混)	遺構の埋土
1	盛土		19	暗灰色砂質土		37	暗茶褐色土	遺構の埋土
2	灰色土層	硬い	20	灰褐色土	硬い(砂質)	38	白色泥層	遺構の埋土
3	灰色砂層	砂層	21	灰色砂質土		39	茶褐色土	
4	灰色砂質土		22	暗褐色土(白色粘土含む)		40	茶褐色砂層	砂層
5	黄褐色砂層　小礫混		23	暗褐色土	遺構の埋土	41	茶褐色砂層　小礫混	砂層
6	暗褐色泥層	泥層	24	暗褐色砂質土	遺構の埋土	42	茶褐色砂質土	
7	黄褐色砂質土　炭混	遺構の埋土	25	暗灰色砂質土	遺構の埋土	43	青灰色土層	
8	暗褐色土		26	暗灰褐色土	遺物包含層？	44	灰色砂礫層	砂層
9	暗褐色砂質土　炭混	遺構の埋土	27	黄褐色砂質土	古墳時代の溝の埋土	45	黄褐色土	
10	暗褐色砂質土		28	灰褐色砂質土	古墳時代の溝の埋土	46	青灰色砂質土	
11	暗褐色土(８より砂質あり)		29	黄灰色砂質土	古墳時代の溝の埋土	47	灰褐色砂質土(砂多い)	
12	灰褐色砂質土　小礫混	砂層	30	暗黄褐色砂質土	古墳時代の溝の埋土	48	暗褐色砂質土(砂多い)	
13	黄褐色砂礫層		31	青灰色砂層　ラミナ発達	古墳時代の溝の埋土	49	暗灰色土	無遺物層
14	灰色砂質土		32	青灰色泥層	古墳時代の溝の埋土	50	暗褐色砂質土	無遺物層
15	黄褐色砂質土		33	灰色砂層	遺構の埋土			
16	黄褐色砂層	砂層	34	灰色泥層	遺構の埋土			
17	暗褐色砂質土　小礫混		35	暗褐色土	遺構の埋土			

表3　南壁・西壁の土層



第7図　西壁・北壁・SD01断面図（S＝1/40）

調査区の長辺に平行する、現存の長さ約13m、幅約0.4～0.8mの溝である。後述するSD02を切る。19層（暗灰色砂質土）や22層（暗褐色土）を掘削しているときには確認できず、調査区の西側で地山を検出した際に確認することができたので、上部は削平されていると考えられる。深さは現存で0.2～0.3mである。平面形はわずかに蛇行する。断面は浅い半円形である。埋土は2層である。埋土の1層（暗褐色土）は南壁の36層と同一であると考えられる。2層は1層がやや薄くなった色であった。

SD01から出土した土器には、SD02から混入したと考えられる弥生後期の土器や古式土師器の他に、写真でしか掲載していないが中世土師器の坏や皿の小片がある（写真図版14）。時期を特定することは困難であるが、鎌倉時代ではないかと考えられる。

SD02（第８、９図）

調査区の西隅で確認した。南壁の26層を掘削中に古式土師器が密集して出土したので、古墳時代初頭の溝を確認したと判断した。上面は20層や26層に削平されている可能性が強い。南壁の31層や32層は実際は地山と区別が付きにくく、土器が出土しなくなったことにくわえて湧水が著しくなったので完掘したと判断した。調査区の長辺にほぼ直交しているので幅しか分からないが、上面で約2.5m、深さは現存で約0.4mである。断面は弧形で、溝の西側のみ二段になっていた。埋土は南壁の27～32層である。28層を切って27層が堆積したように見える。32層以外は砂質である。31層にはラミナが見られたので、水が流れていたと考えられる。調査の際も31、32層は湧水が著しかった。

以上のことから、SD02が掘削されて余り時間がたたないうちに31、32層が堆積し、ある程度溝が埋まった後に再び溝が掘られたのではないかと推測される。

土器は溝の上面に相当する標高7.1～7.2mと溝の中～下位の6.8～7.0mに分かれて出土し、上面と中～下位の土器同士が接合することはなかった。土器の量は上面の方が多かった。中～下位の土器は溝が掘られてからそれほど時間がたたないうちに堆積した土器、溝の上面の土器は溝が埋まった後、もしくは再掘削の段階の土器ではないかと思われる。

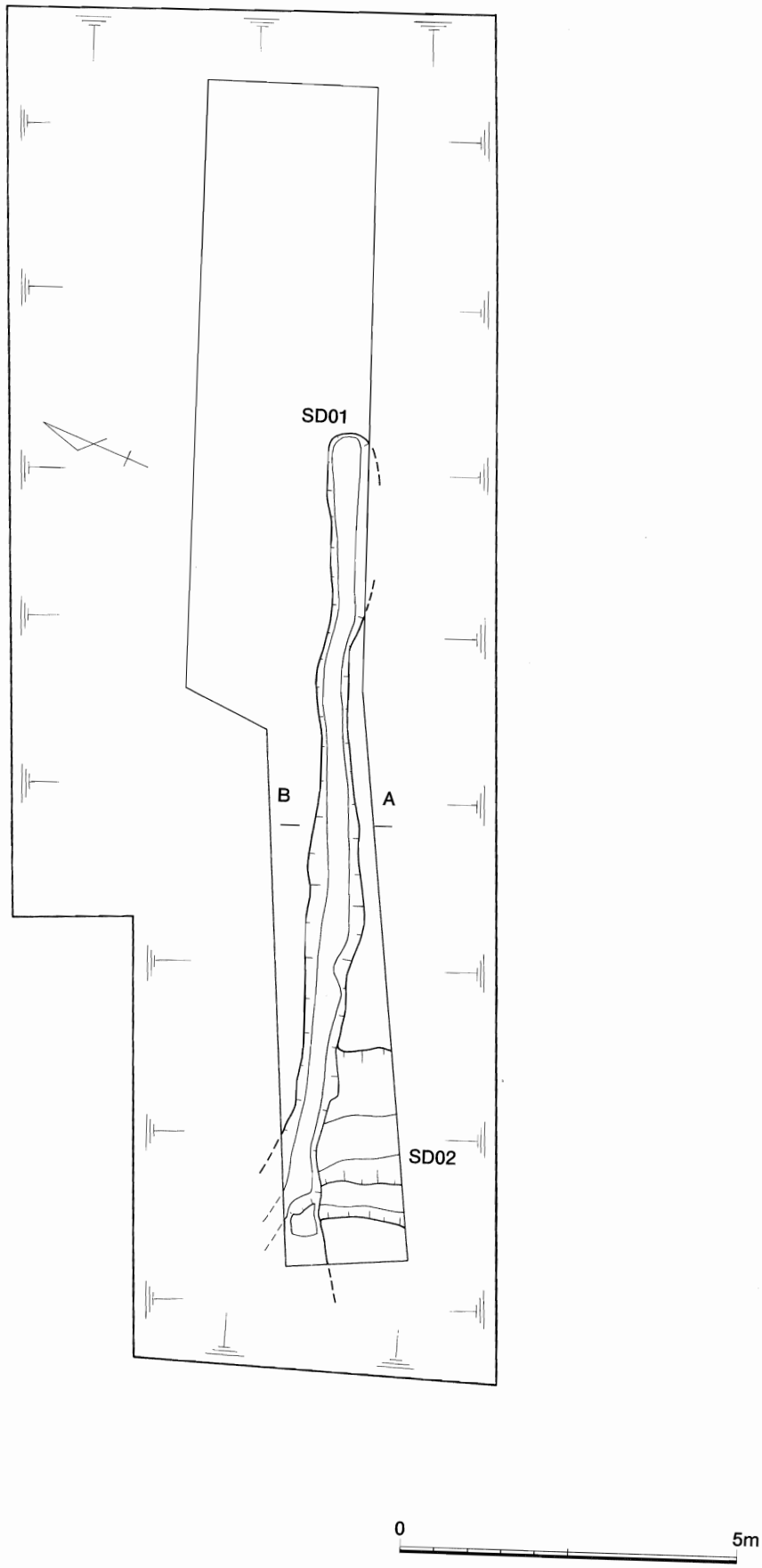
出土した土器は古式土師器が中心である。破片で出土するものが多く、約0.8m離れて接合するものがあった。わずかな部分しか確認できなかったので、器種の偏りがあるかどうかはわからなかった。出土した土器は第11図に掲載しており、古墳時代初頭（草田6～7期：庄内式新相～布留式古相[註1]）と考えられる。

SD03（第10図）

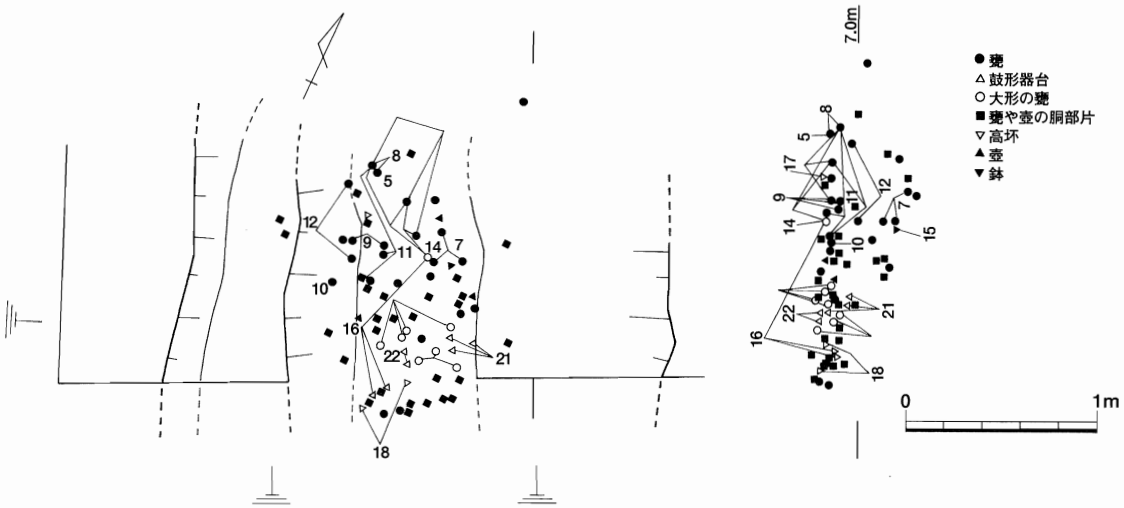
調査区の東側で確認した。調査区の長辺にほぼ並行する。後述するSD04に切られる。南壁の20層を掘削し、地山を検出した段階で確認したので、上面は削平されている可能性が強い。現存の長さ約4.5m、幅約0.3m、深さ約0.2mである。断面は弧形で、埋土は1層で暗褐色泥層である。中程で段になっている部分がある。遺物が出土しなかったので時期は不明である。

SD04（第10図）

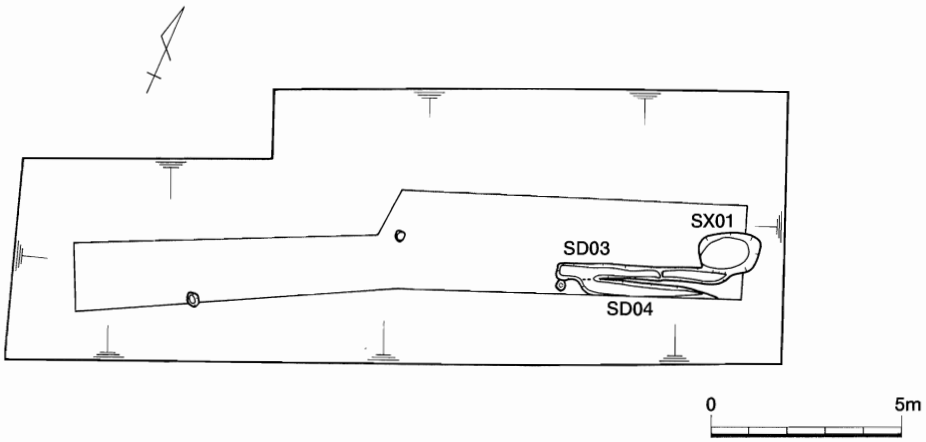
註1　古式土師器の編年観については中川　寧　「出雲平野における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』22　2000　pp.42～60による。本報告書では土器の口縁部に文様（櫛描直線文など）が施されなくなる時期を重視し、「草田5期」から「草田7期」までを「古式土師器」、その時代を「古墳時代初頭」と呼ぶ。



第8図　SD01・SD02平面図（S＝1/100）



第9図　SD02土器出土状況図（平面・断面）（番号は実測図に一致）（S＝1/40）



第10図　時期不明の遺構（S＝1/200）

調査区の東南隅で確認した。SD03を切る。SD03同様に上面は削平されている可能性が強い。現存の深さ約0.2mである。断面は弧形で、埋土は1層で灰褐色土層である。SD01の延長線上に位置するので、関連があるかもしれないが、遺物が出土しなかったので時期は不明である。

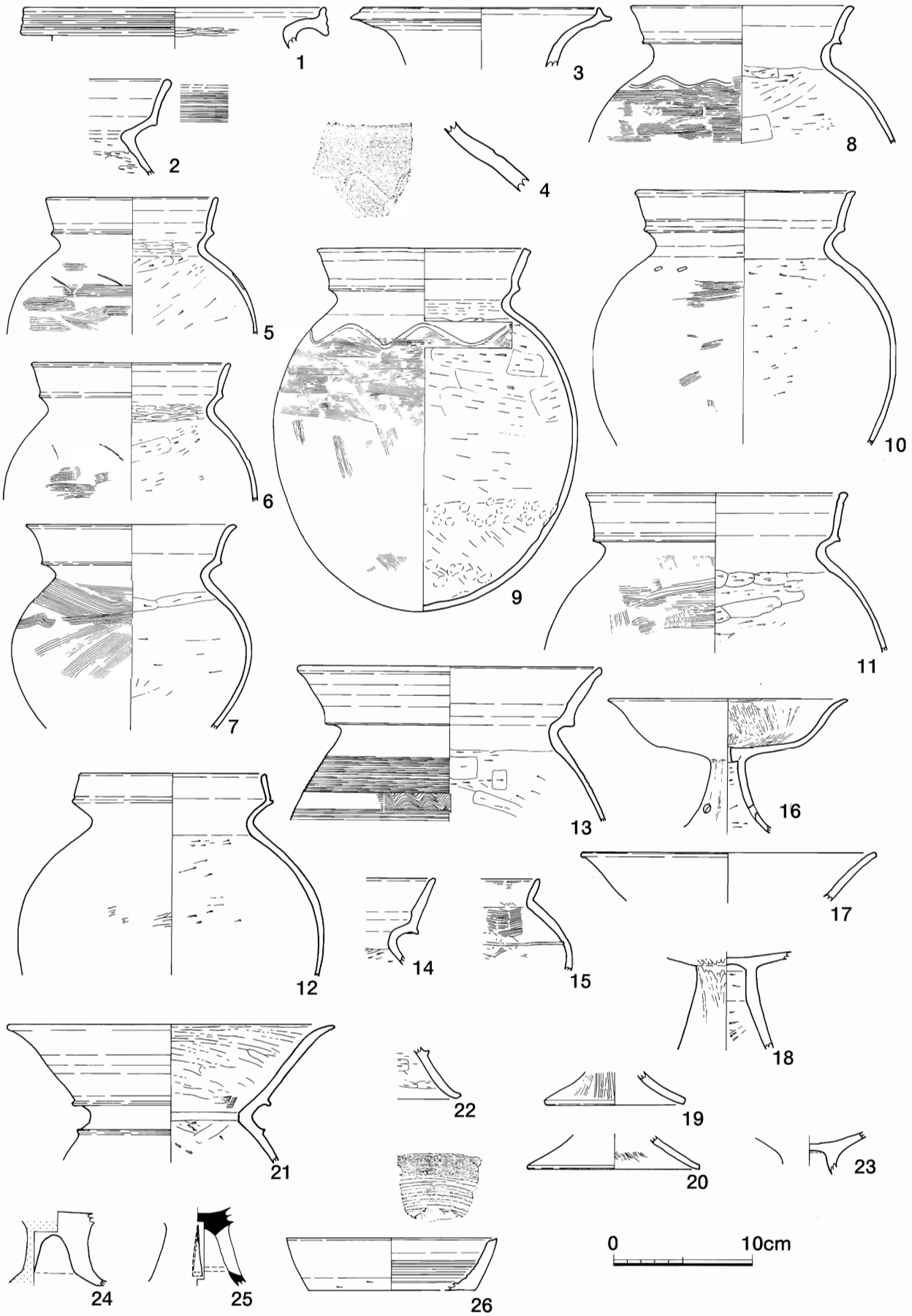
（２）不明遺構

SX01（第10図）

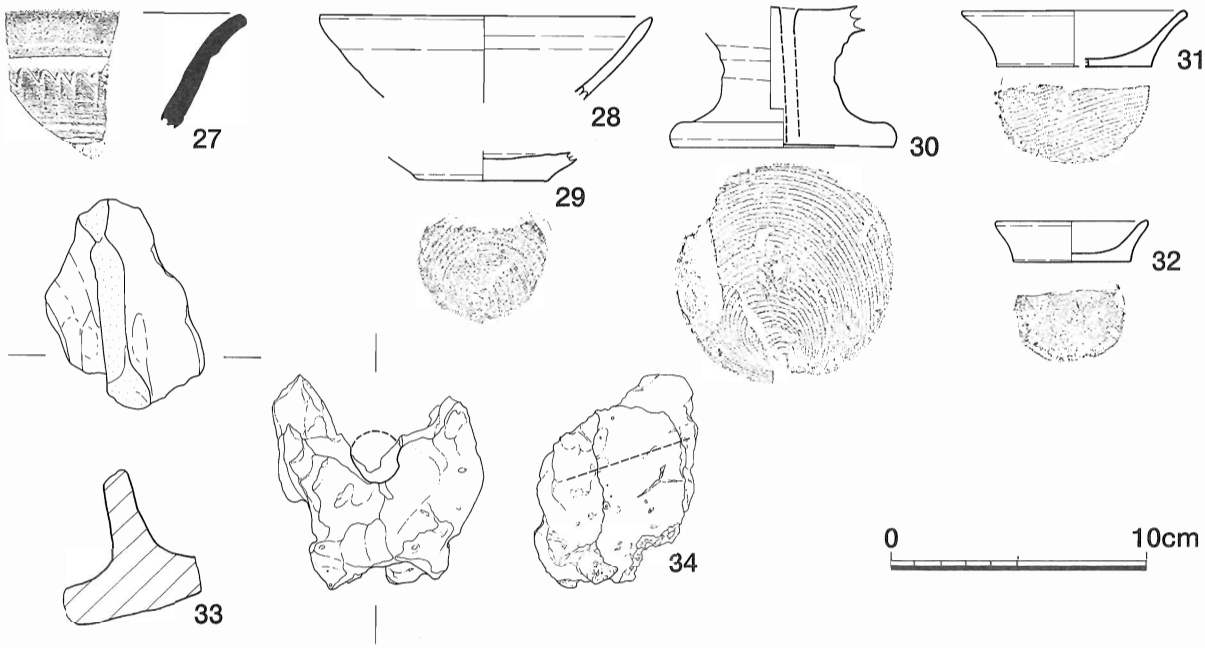
調査区の東隅で確認した。平面形は楕円形である。規模は長辺が1.6m、短辺が1.1m、深さは約0.5mであるが、地山が北へ向かって低くなっており、さらに調査区の東側に排土置き場を設けたために遺構があることを確認するのにてまどったため、上面を掘りすぎた可能性がある。中からは湧水が著しかったが、板材や石組などを確認しなかったので、井戸であると判断できなかった。水の中に手を入れて地山が出るまで掘削したので、底面を掘りすぎている可能性がある。中からは遺物が出土しなかったので、時期は不明である。

４．遺物

今回出土した遺物は土器、土製品（移動式竈、鞴の羽口）、木製品（下駄、容器）である。遺物の量は土器が遺物コンテナ7箱、土製品が2点、木製品が3箱である。



第11図　遺物実測図(1)（S=1/4）



第12図　遺物実測図(2)（S＝1/3）

土器・土製品（第11・12図）

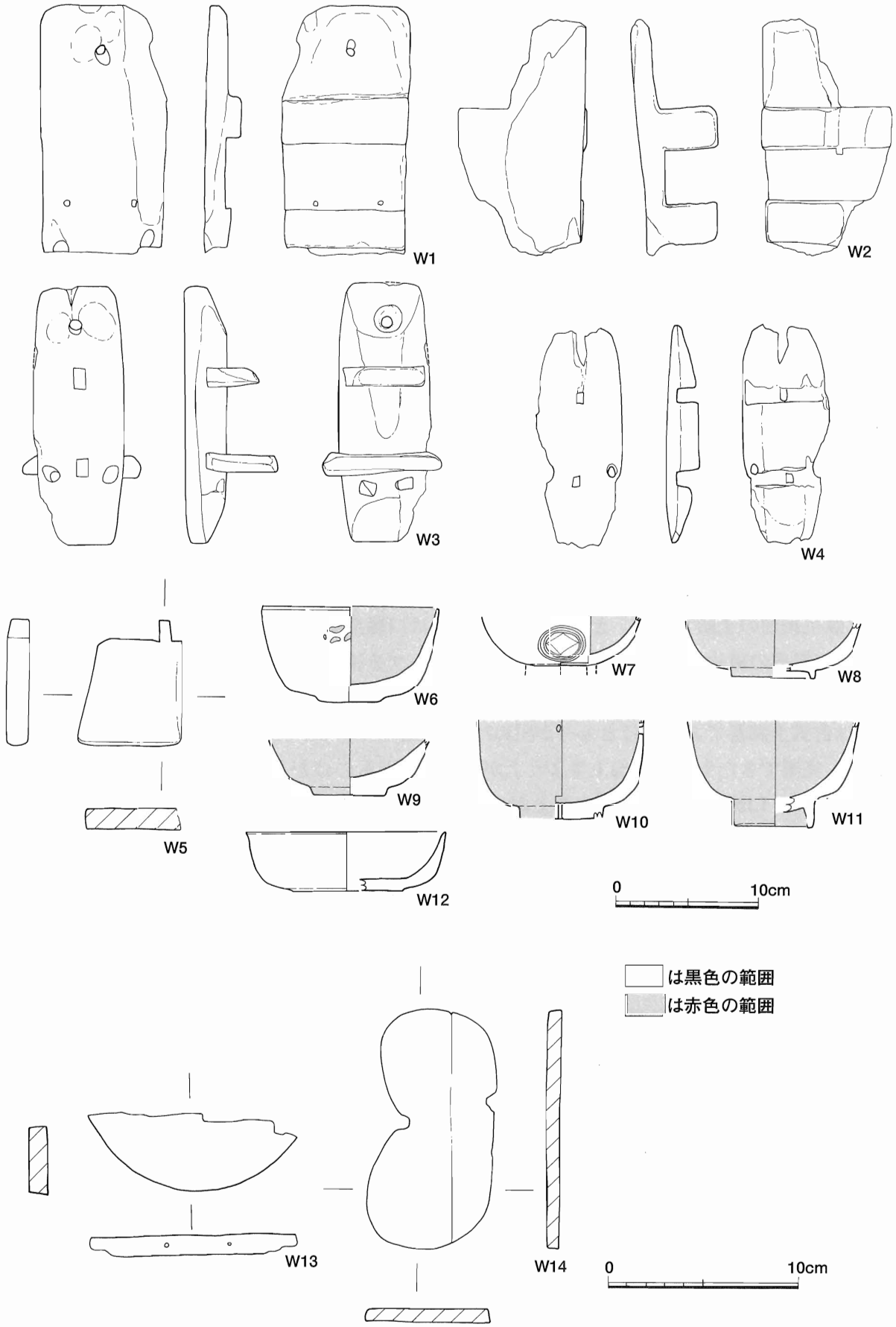
1、2は弥生後期の土器である。ともに甕である。1は口縁部を上方に拡張し、端面に3条の凹線文を施す。2は口縁部の破片である。口縁部はわずかにカーブを描き、端面に貝殻直線文を13条施す。1は出雲隠岐Ⅴ－1様式、2はⅤ－3様式の段階と考えられる。

3～22は古式土師器である。ほとんどがSD02からの出土である。破片がほとんどで形の分かるものは少なく、実測できたものも胴部上半より上が残っていたものばかりである。

3は壺である。口縁部がわずかに立ち上がる。今回の調査では他に3点の壺の口縁部が出土したが、いずれも口縁部はわずかに立ち上がるものであった。4は器壁が厚いので壺の肩部と判断した。ヘラによる波状文を施す。

5～12は甕である。このうち5～7は口縁部の下の稜がつまみ出されたように突出し、口縁端部を丸くおさめるものである。7は5や6と比べて胴部が丸い。口縁端部は横方向に屈曲して上方に面を持つ。5、6は肩部に間隔の広いハケメ列点文、7は幅約2cmの原体を用いて直線文や波状文を施す。8は口縁部がやや厚く、口縁端部は角張る。肩部にはヨコハケの後一周しないヘラ描波状文を施す。9～11は口縁部が厚く端部が肥厚するものである。このうち9は唯一完形の個体である。口縁端部は面を持って外側へ肥厚し、口縁部下の稜の突出は弱い。胴部は卵を立てたような形で丸みを帯びており、胴部最大径は胴部の中程にあり、胴部が長い。底部内面と底から約1/4ほど上位には指頭圧痕が明瞭に残る。底部外面は火を受けて赤変し（写真図版9）、内面には炭化物が付着する。肩部にはヘラ描波状文が肩部の4/5周ほどを巡る。10は磨滅が著しく原体は分からないが、肩部に一周しない列点文を持つ。列点文の他に文様があるように見えるが、磨滅が著しく不明である（写真図版9）。11は9や10に比べてやや大形である。肩部に斜行する直線文を持つ。12は口縁部が短く、内側へ傾く。

13、14は大形の甕である。ともに口縁部が厚いことから4～12の甕とは分けた。13は口縁部が緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。肩部には櫛描波状文と直線文を持つ。14は口縁部が直線的である。他に実測しなかったが口縁端部が屈曲するものがある（写真図版13）。15は口縁が短く「く」字であ



第13図　遺物実測図(3)（W1～W12：S=1/4、W13・W14：S=1/3）

る。内面調整はハケやナデである。鉢と判断した。

16～20は高坏である。このうち16～18は大形の高坏である。16は脚の内面から坏底部へ孔が貫通する。17は口縁部が直線的に開く。高坏の坏部と判断した。18は脚柱部である。16より脚柱部径が太い。19、20は小型の高坏と判断した。ともに脚端部に面を持つ。

21、22は鼓形器台である。21は稜が鋭く突出する。22は小片であるが台部の稜が低い位置に付くので取り上げた。

23は古墳時代中期の高坏である。24は古墳時代末～飛鳥時代の高坏の脚部である。磨滅が著しいが外面には赤彩の痕が残る。25は須恵器の短脚高坏である。三角形透かしを二方向に持つ。大谷分類の短脚高坏A4～5型ではないかと思われる。26は須恵質の鉢で内面には擂目と考えられる凹凸がある。中世後半以降のものかもしれないが時期は不明である。27は須恵器の大甕の口縁部である。波状文を持ち、断面は暗赤褐色である。

28～32は中世土師器である。28、29は坏である。28は口縁端部が尖る。30は柱状高台付皿である。高台の中央に焼成前の穿孔がある。31、32は皿である。ともに底部から直線的に口縁部へ至る。31の底部は静止糸切り、32の底部は糸切り後ナデである。31は中世以降の可能性がある。

33は移動式竈の破片である。34は鞴の羽口である。送風口の直径は復元で約1.5cmである。先端は滓化しているが、滓化した部分とそうでない部分が先端から約2～2.5cmの部分で直線的に分かれており、側面図向かって左が炉の中、右が炉壁の中であると判断した。この部分を垂直においた場合、羽口は約15～20°傾斜していることになる。なお、SD02からは小型の椀のような土製品が出土した。厚手であり、るつぼの可能性がある（写真図版13）。

その他、実測図を掲載してはいないが、弥生土器の胴部や鼓形器台、古代の土師器の甕（写真図版13）、中世の陶器（写真図版14）、青磁（写真図版2）などが出土している。

木製品（第13図）

出土した木製品は下駄、椀や皿、不明木製品がある。いずれも包含層掘削中に出土した。近世以降のものを含む可能性がある。

W1～W5は下駄である。この内W1、W2は一木製の連歯下駄である。平面は長方形で歯部は垂直である。W1は踵側の歯がすり減っている。足の指の痕から右足用と考えられる。W2は大きく破損している。木目が明瞭に残る。W3、W4は差歯下駄である。平面は長方形である。W3は歯部が垂直である。足の指側の歯がすり減っている。足の指の痕から左足用と考えられる。W4は歯部を欠く。W5は歯部であるが、W4と同一の下駄の可能性がある。他に写真のみ掲載したが、一木製連歯下駄1点（写真図版17、W101）、差歯下駄2点（W102、W103）が出土した。

W6～W12は容器の椀や皿である。いずれも赤や黒で内外面を彩色しているが、腐食が著しく、小片で出土したので多くが図上で復元したものである。このうちW6、W9、W10は底部が高台状に立ち上がるものである。そのうちW6は全形が分かるものである。外面は黒の彩色の上に赤の彩色による文様を施し、内面は赤の彩色であるが、大部分がはげ落ちており文様の詳細は不明である。W10は底部と胴部上方に小孔が貫通している。W7は高台が剥離しているが、外面は黒の彩色の上に赤で文様を描く。文様は二重の円の中に菱形を描いている。W8、W11はともに高台を持ち、W11は高台が高い。W12は皿である。内面に赤の彩色がわずかに残る。W13は曲物の底板である。W14は不明木製品である。円を二つ付けたような形をしている。

5．調査のまとめ

今回の調査は面積が約130m²と非常に狭かったうえ、近世以降の撹乱がおよんでいる部分が多かったので、遺構の変遷を面的に追うことはできなかったが、隣接する調査区との関係から以下のようにまとめることができた。

①古墳時代初頭の溝SD02は、第3図からⅠ区のSD02と同一の溝であると考えられる。H区の溝にはSD07とSD15があるが、仮にH区のSD07を今回の溝SD02と同一であるとすると、SD15はSD07より東側に位置するので、今回の調査区でも調査区の中央から東側で溝が確認される可能性が高いと思われるが、実際には溝は1条しか確認できなかった。このことから、H区のSD15と同一であると考えられる。断面が弧形（「凸レンズ状」）で明瞭な底面を作らない点や土器の時期も類似する。よって、（H区）ＳＤ15－（本報告）ＳＤ02－（Ⅰ区）SD02が同一の溝と考えられる。

SD02出土土器のうち、7と15は溝の下位より出土した。一方溝の上面付近から出土した土器には9～11のように、卵を倒したような形の胴部で、口縁端部が肥厚するものを含む。このことだけで断言はできないが、上位の土器と下位の土器とが接合しなかったことから、溝が掘削されてから埋まるまでには時間幅が存在したかもしれない。

②古墳時代中期～平安時代の土器は少なく、F区やI区のように奈良～平安時代の遺構を確認することはできなかった。H区の南側同様に古代の遺構が少ない部分が存在したと考えられる。

③鎌倉時代～室町時代の小規模な溝SD01を確認し、中世土師器や下駄、容器などが出土した。これらの遺物は一部近世に下る可能性もある。H区の調査でも13世紀以降継続的に遺構や遺物が認められるので、古代とは異なり調査区の周辺が再び生活域になったと推測される。調査区の東側（A区）から遺物が多く出土したが、この時代における河道の位置など、生活域の復元が今後の課題である。

④調査区の南壁と西壁に硬質の整地土層を確認した。近世以降の陶磁器が出土したことから近世以降と考えられる。面的な調査ではなかったのでこの硬質の土層の分布範囲は不明であるが、北壁では確認できなかったので、調査区の南側や西側に広がっていると推測される。生活面、または道路に関連すると考えられる[註1]。

なお、実測や写真による掲載は行わなかったが、近世以降の陶磁器がコンテナ6箱出土した。H区やⅠ区の北東側では近世以降の建物や土壙が多く見つかっていることと調和的である。

《特論》古志本郷遺跡における、弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝について

今回の調査で検出した古墳時代初頭の溝SD02は単独で存在するのではなく、これまでの古志本郷遺跡、および隣接する下古志遺跡、田畑遺跡でも同時期の溝が確認されている。これらの溝が掘削された時期は弥生中期から後期前半であるが、何度かの掘削の後に弥生時代後期末～古墳時代初頭（草田6期～7期）の土器が溝の上面から出土する点で共通する。その用途としては排水や灌漑、境界などが想定されている。本論ではこれらの遺跡の溝に着目する。

註1　旧山陰道はかつて現在の古志橋のやや上流側で神戸川を渡り、古志橋付近で西へ角度を変えると想定されているので、今回検出した整地土層は旧山陰道に関連する可能性がある。
「歴史の道調査報告書　山陰道Ⅱ」『島根県歴史の道調査報告書』第2集　島根県教育委員会　1996

第14図　古志本郷遺跡と周辺の遺跡における、弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝（S＝1/5,000）

SD02はH区SD15、Ⅰ区SD02と同一と考えられる。加えて、その南東の延長線上にC区SD16が位置し、時期もほぼ同時期であることから、これらは一連の溝と考えることができる。一方K区でもK区SD07やSD10などといった古墳時代初頭の溝が何条も確認されており、K区の南端でこれらの溝が約100°～110°の角度で西へ屈曲する。これらは溝の断面形は異なるものの幅が2mを越える点で類似する。ここで注目されるのが第1次調査3トレンチである。このトレンチの報告では「落ち込み状遺構1」が確認されており、貝層も見つかっているが、古墳時代初頭（草田6期中心）の土器が大量に出土している。写真図版を見ると、遺構の上面に近いところから土器が出土しているのを確認することができるので、この3トレンチには溝に関連する遺構が存在する可能性が強いと思われる。

これらのH区・Ⅰ区・C区・K区の溝を関係あるものと推定して復元したのが第14図である。長径600m以上、短径約200mの南北に長い楕円形の溝で囲まれたまとまりを復元することができる。これは3トレンチ調査の遺構を溝に関連するものと推測したが、K区の屈曲をより重視すれば、約600m×200mの隅丸長方形の区画を復元することができる。

一方、G区SD41やH区SD58の延長線上に約200m離れてC区SD17、SD18が位置する。溝の底の形態から一連の溝と考えられる。また、第6次調査では西に凸の屈曲を持った溝が確認されているが、この溝に対応するF区やG区の溝は確認されておらず、第11次調査区の南西側に位置するのかもしれない。この第6次調査の大溝の西側である下古志G区には概期の遺構・遺物が少ない部分があるので、大溝を西限とできるのではないかと考えられる。東はC区SD17を東限と想定し、北側はG区の中で溝がなくなっているので、それを北限とすることができる。これらのことから先の区画に隣接した楕円形または不定形の長さ400m以上、幅約150mの範囲を復元することができる。

以上これまでの調査によって二つの大きな区画を想定することができた。これらの区画は北西－南東に伸びる微高地上に位置している可能性がある[註1]。

これとは別に、下古志D区SD05と田畑3区SD04とがそれぞれ延長線上に位置し、さらにその西には下古志A区SD28と下古志1TSD02が北東－南西の方向へ伸びて存在する。これらが同一の溝と仮定すると、上記の区画とは長軸を異にする別の区画が存在する可能性を指摘しておきたい。

さらに、下古志遺跡D区大溝と下古志2T、3T、田畑遺跡2区SD06はいずれも軸が北西－南東にあり、下古志遺跡A区大溝とともに断面形が「W」字形で共通性が高い。この東の延長線上には古志本郷4次調査区が位置しているが、この調査区では概期の遺物・遺構はほとんど見られなかったので、D区大溝－SD06の東側はやや南へ屈曲している可能性も考えられる。また、これら以外にも下古志E区SD13、田畑6区SD08など、現時点では不明な点の多い溝が確認されている。今回想定したそれぞれの区画が、複数の居住域と墓域が隣接し合う「複合的集落」[註2]を意味するのか、それとも「居館」的な性格を持つのかについては、溝から鉄鏃やヤリガンナが出土しているものの、区画の中からは大形の掘立柱建物や布掘りの建物など、規模の傑出する建物がこれまで確認されていないことから、現段階では前者の方に比重を置いて考えたいが、これらの区画の当否を含む遺構や遺跡の動態や山陰の他の遺跡との対比などについて、既存の調査結果の見直しと今後の発掘調査を通して進めていくことが課題と思われる。

註1　古志本郷5・7・8次調査の報告では、弥生時代後期末～古墳時代前期にA区のような川に近い低地にも遺跡が見られること、D・E区の地山の標高がやや高いことが報告されている。　文献6　p.299

註2　若林邦彦「弥生社会複雑化の実像」『銅鐸から描く弥生社会　フォーラム新しい弥生時代像を求めて』一宮市博物館　2001　pp.37～42

【参考文献】

《古志本郷遺跡》
文献 1　川上　稔　『古志地区分布調査報告書』　出雲市教育委員会　1988（第1次）
2　川上　稔・原　俊二　『出雲市埋蔵文化財調査報告』第4集　出雲市教育委員会　1994（第2次）
3　岸　道三　「古志本郷遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告』第5集　出雲市教育委員会　1995（第3次）
4　松山智弘　『市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』
出雲市教育委員会　1998（第6次）
5　岸　道三編　『古志地区土地改良総合事業地内古志本郷遺跡発掘調査報告書』
出雲市教育委員会　1999（第4次）
6　平石　充編　『古志本郷遺跡Ⅰ』　島根県教育委員会　1999（第5・7・8次：A～E区）
7　勝部智明　『古志本郷遺跡Ⅱ』　島根県教育委員会　2001（第9・10次：H・J区）
8　内田律雄　『古志本郷遺跡Ⅲ』　島根県教育委員会　2001（第9・10次：I区）
9　『島根県教育庁文化財課　埋蔵文化財センター年報Ⅶ　平成10年度』島根県教育委員会　1999
（第9次：F・G区）
10　『島根県教育庁埋蔵文化財センター年報Ⅷ　平成11年度』島根県教育委員会　2000
（第10次：F・G・K区）
11　『島根県教育庁埋蔵文化財センター年報Ⅸ　平成12年度』島根県教育委員会　2001（第12次：K区）
《島根県の遺跡》
赤澤秀則　『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5　南講武草田遺跡』　鹿島町教育委員会　1992
三原一将　『田畑遺跡』　出雲市教育委員会　2000
米田美江子・三原一将　『下古志遺跡』　出雲市教育委員会　2001
《論文》
松本岩雄　「出雲・隠岐地域」　正岡睦夫・松本岩雄編　『弥生土器の様式と編年　中国編』　木耳社　1992
大谷晃二　「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11　pp.39～82　1994

挿図番号	遺物番号	写真図版	出土位置	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	残存率(%)	外面の調整	内面の調整	形態の特徴	肩部の文様
11	1	11	ＳＤ01	弥生土器	甕	(21.6)	(3.0)	-	黄橙色10Ｙ R8/1	10	ナデ	ナデ、ヘラミガキ	３条の凹線文	
11	2	11	Ｂ区（ＳＤ02周辺）	弥生土器	甕	-	-	-	浅黄橙色10Ｙ R8/3	-	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	貝殻直線文(13条)	
11	3	11	Ｂ区（ＳＤ02周辺）	古式土師器	壺	(16.8)	(4.4)	-	浅黄橙色7.5Ｙ R8/3	10	ナデ	ナデ	口縁は上方へわずかに立ち上がる	
11	4	11	Ｂ区包含層	古式土師器	壺	-	-	-	にぶい黄橙色10Ｙ R7/2	-	ナデ	ミガキ、ケズリのちミガキかナデ		ヘラ状工具による波状文
11	5	11	ＳＤ02	古式土師器	甕	(12.0)	(9.9)	-	にぶい黄橙色10Ｙ R7/3	35	ナデ	ナデ、ミガキのちナデ、ヘラケズリ	口縁端部は丸くおさめる	ハケメ列点文（間幅広い）
11	6	11	ＳＤ02	古式土師器	甕	(14.3)	(10.0)	-	灰白色2.5Ｙ8/2	15(頸部)	ナデ	ナデ、ミガキのちナデ、ヘラケズリ	全体に磨滅、口縁端部は丸くおさめる	ハケメ列点文（間幅広い）
11	7	11	ＳＤ02最下層	古式土師器	甕	(14.8)	(14.9)	-	浅黄橙色10Ｙ R8/3	25	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	胴部最大径以下は火を受けて変質、炭化物付着	ハケメ直線文、波状文
11	8	10	ＳＤ02	古式土師器	甕	15.4	(10.0)	-	にぶい黄橙色10Ｙ R7/3	50	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	角張る少し膨らむ水平方向につまみ出す	ヘラ描波状文（一周しない）
11	9	9	ＳＤ02	古式土師器	甕	15.2	26.3	胴径21.8	にぶい黄橙色7.5Ｙ R7/4	完形	ナデ、ハケメのちナデ消し	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕	丸底、底部赤変、内面に炭化物付着	ヘラ描波状文（一周しない）
11	10	9	ＳＤ02	古式土師器	甕	15.9	(18.4)	-	灰白色2.5Ｙ8/2	口縁部完存	ナデ、ハケメ	ナデ、ヘラケズリ	全体に磨滅、口縁端部は丸くおさめ若干外方向に膨らむ	雨粒形刺突文？
11	11	11	ＳＤ02	古式土師器	甕	(18.5)	(11.6)	-	灰白色7.5Ｙ R8/2	20	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	口縁端部は面を持って外側に肥厚	ハケメ直線文、波状文
11	12	10	ＳＤ02	古式土師器	甕	(13.0)	(14.6)	-	灰白色10Ｙ R8/2	35	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	全体に磨滅、口縁短い	不明
11	13	12	ＳＤ02	古式土師器	大型甕	(21.4)	(11.1)	-	浅黄橙色7.5Ｙ R8/3	10	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	口縁端部は丸くおさめる	直線文、波状文
11	14	12	ＳＤ02	古式土師器	大型甕	-	-	-	浅黄橙色7.5Ｙ R8/3	-	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	口縁端部は丸くおさめる　平坦で直線的つまみ出したように下を向く	
11	15	12	ＳＤ02最下層	古式土師器	鉢	-	-	-	灰黄色2.5Ｙ R7/2	-	丁寧なナデ	ハケメのちナデ、指頭圧痕、工具痕	口縁端部は丸くおさめる「く」字の短い口縁	
11	16	10	ＳＤ02	古式土師器	高坏	(16.8)	(9.7)	-	にぶい黄橙色10Ｙ R7/3	坏底部完存	ハケ	丁寧なヘラミガキ、ヘラケズリ	脚部３方向に円形透孔あり底から脚に穴(4mm)貫通	
11	17	12	ＳＤ02	古式土師器	高坏？	(20.4)	(3.6)	-	浅黄橙色10Ｙ R8/4	20	磨滅	磨滅		
11	18	12	ＳＤ02	古式土師器	高坏	-	(8.2)	脚柱部径4.4	浅黄橙色7.5Ｙ R8/3	坏底部完存	タテヘラミガキ	坏底部ナデ脚部ケズリ		
11	19	12	ＳＤ02	古式土師器	小型の高坏？	-	(2.4)	(10.0)	橙色5Ｙ R6/8	20(底部)	タテハケメ	ナデ	口縁端部は面をもつ	
11	20	12	ＳＤ02	古式土師器	小型の高坏？	-	(3.0)	-	にぶい黄橙色10Ｙ R7/2	10(底部)	ミガキ、横ナデ	ハケメ、ナデ	口縁端部は面をもつ	
11	21	12	ＳＤ02	古式土師器	鼓形器台	(23.6)	(9.9)	-	にぶい黄橙色7.5Ｙ R7/4	20(受部)	ナデ	ヨコヘラミガキ、ハケ、ナデ、ヘラケズリ	口縁端部は鋭く突出	
11	22	12	ＳＤ02	古式土師器	鼓形器台	-	-	-	浅黄橙色10Ｙ R8/3	-	ナデ（低い位置に付く）	ケズリ、ナデ		
11	23	12	Ａ区包含層	土師器	高坏	-	(3.0)	-	浅黄橙色10Ｙ R8/4	現存部完存	調整不明	脚部ナデ	脚部に赤彩	
11	24	10	Ｂ区包含層	赤彩土師器	高坏	-	(5.3)	脚柱部径4.3	淡橙色5Ｙ R8/3	脚柱部完存	調整不明	調整不明	内外面赤彩　脚部厚みが不均等	
11	25	11	Ａ区包含層	須恵器	短脚高坏	-	(5.7)	-	青灰色5Ｂ6/1	坏底部完存	坏部ナデ脚部回転ナデ	回転ナデ	脚部２方向に三角形の透孔あり	
11	26	11	Ａ区包含層	須恵質	鉢？	(15.0)	3.8	(11.8)	青黒色5Ｂ G2/1	10	ナデ、回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、カキメ		
12	27	11	Ｂ区包含層	須恵器	甕	-	-	-	青黒色5Ｂ G2/1	-	回転ナデ	回転ナデ	波状文	
12	28	12	Ａ区包含層	中世土師器	坏	(13.0)	(3.3)	-	にぶい橙色7.5Ｙ R7/4	10	回転ナデ	回転ナデ	口縁端部は尖る	
12	29	12	Ａ区包含層	中世土師器	坏	-	(1.1)	5.0	橙色7.5Ｙ R7/6	70(底部)	回転ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り	
12	30	10	Ｂ区包含層	中世土師器	柱状高台付皿	-	(5.6)	8.6	浅黄橙色10Ｙ R8/3	脚底部完存	回転ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り　焼成前に穿孔（上径8mm下径4mm）	
12	31	10	Ａ区包含層	中世土師器	皿	(8.4)	2.2	(6.0)	浅黄橙色7.5Ｙ R8/6	30	回転ナデ	回転ナデ	底部静止糸切り	
12	32	10	Ａ区包含層	中世土師器	皿	(5.9)	1.6	(4.6)	淡黄色2.5Ｙ R8/3	45	回転ナデ	回転ナデかスス付着のため不明瞭	底部糸切り後強いナデ	
12	33	10	Ａ区包含層	土製品	移動式竈	-	-	-	浅黄橙色10Ｙ R8/3	-	-	-		
12	34	10	Ａ区包含層	土製品	鞴の羽口	-	-	-	外面黒色7.5Ｙ R 2/1内面橙色5Ｙ R 6/6	-	-	-		

表4-1　出土遺物観察表（土器・土製品）

挿図番号	遺物番号	写真図版	地　区	種　別	口径(cm) 長さ(cm)	器高(cm) 幅 (cm)	底径(cm) 厚さ(cm)	備　考
13	W１	15	Ａ区包含層	一木製の連歯下駄	台長(17.7)	台幅9.0 前歯高1.0	台厚1.4 後歯高0.4	硬質　右1/4とかかとの部分を欠く
13	W２	15	Ａ区包含層	一木製の連歯下駄	台長(16.5)	台幅(9.0) 歯高3.5	台厚1.6	木目が明瞭　遺存状態良 下駄の前後不明
13	W３	16	Ａ区包含層	差歯下駄	台長18.3	台幅6.4 前歯高2.3	台厚2.9 後歯高3.6	指の部分が凹む 台幅より歯幅の方が広い 前歯1.5cm×0.8cm後歯1.3cm×0.8cmのほぞ穴が開けられている
13	W４	16	Ａ区包含層	差歯下駄	台長(15.2)	台幅6.0	台厚2.2	前歯1.0cm×0.5cm後歯0.8cm×0.5cmのほぞ穴が開けられている
13	W５	14	Ａ区包含層	下駄の歯	歯幅(7.3)	歯高8.8 (ほぞを含む)	歯高1.5	Ｗ４の歯か？
13	W６	3	Ａ区包含層	赤塗椀	(12.2)	6.7	(4.0)	残存率20％ 遺存状態不良 外面黒色の上に赤色の文様 内面は大部分が剥げ落ちている
13	W７	3	Ａ区包含層	赤塗椀	-	3.5	-	残存率75％ 高台は剥離 外面は黒色 10ＹＲ1.7/1 内面は赤色10Ｒ5/8
13	W８	3	Ａ区包含層	赤塗椀	-	4.0	(6.0)	現存率15％ 遺存状態不良 内外面赤色だが、色は剥がれている
13	W９	3	Ｂ区包含層	赤塗椀	-	4.0	5.0	底部完存し高台状に立ち上がる 遺存状態不良 内外面赤色だが残り悪い (特に外面はごく一部のみ)
13	W10	3	Ｂ区包含層	赤塗椀	-	7.0	(6.0)	底部完存 遺存状態不良 口縁1箇所と底部中央に穿孔　内外面赤色(内外とも剥落著しい)
13	W11	3	Ａ区包含層	赤塗椀	-	7.5	5.4	残存率70％(底部) 遺存状態不良 高台は高く断面逆台形 内外面赤色 (内外とも剥落著しい)
13	W12	3	Ａ区包含層	赤塗椀	(14.0)	4.2	(7.0)	残存率40％ 遺存状態良 内面に赤色がわずかに残る
13	W13	14	Ａ区包含層	曲物の底板	(12.5)	-	1.0	側面釘穴あり
13	W14	14	Ａ区包含層	不明	12.8	6.5	0.7	針葉樹か？遺存状態良
13	W101	17	Ｂ区包含層	一木製の連歯下駄	台長(17.6)	台幅8.7 前歯高4.2	台厚1.3 後歯高4.5	木目が明瞭 遺存状態良 指の部分が凹む 前歯の前方磨り減っている
13	W102	17	Ａ区包含層	差歯下駄	台長(15.3)	台幅(7.9)	台厚2.3	前歯ほぞのみ残存 指の部分が凹む 前歯1.2cm×0.9cm後歯1.4cm×0.8cmのほぞ穴が開けられている
13	W103	17	Ｂ区包含層	差歯下駄	台長(20.1)	台幅(7.0)	台厚3.0	前歯 (1.5cm×0.7cm) 後歯1.3cm×1.2cmのほぞ穴が開けられている

表4-2　出土遺物観察表（木製品）

※口径、底径の（ ）は復元の値
※器高の（　）は現存の高さの値
※残存率は特筆したもの以外は口縁部での値を示す
※色調は『標準土色帳』による

				A区	B区	SD01	SD02	不明	合計
弥生土器	後期	甕			1	1			2
		鼓形器台		1					1
古式土師器	壺	口縁部短い		1	1		2		4
	甕								
		口縁部	丸くおさめる				7		7
			角張る	1	2		1		4
			肥厚する	1			6		7
		口縁端部のみ	丸くおさめる	1	2	2	9		14
			角張る				7		7
			肥厚する	1	1	1	7		10
			その他				1		1
	大形の甕	口縁部	外反する				3		3
			屈曲する				1		1
			直線的で薄い				4		4
	鉢						1		1
	高坏	脚端部			1		1		2
			長脚高坏	1			2		3
	低脚坏						3		3
土師器	甕				1				1
	高坏			1					1
	移動式竈			1					1
	鞴の羽口			1					1
須恵器	坏身				1				1
	短脚高坏			1					1
	大甕	口縁		1	1				2
	鉢？			1					1
赤塗土師器	高坏				1				1
中世土師器	坏	底部		12	3	9		1	25
	皿	柱状高台付皿			1				1
		底部		14	5	2			21
陶磁器	青磁	（破片）		(5)	(2)				(7)
合計				39	21	15	55	1	131

表5　古志本郷遺跡遺物数量表

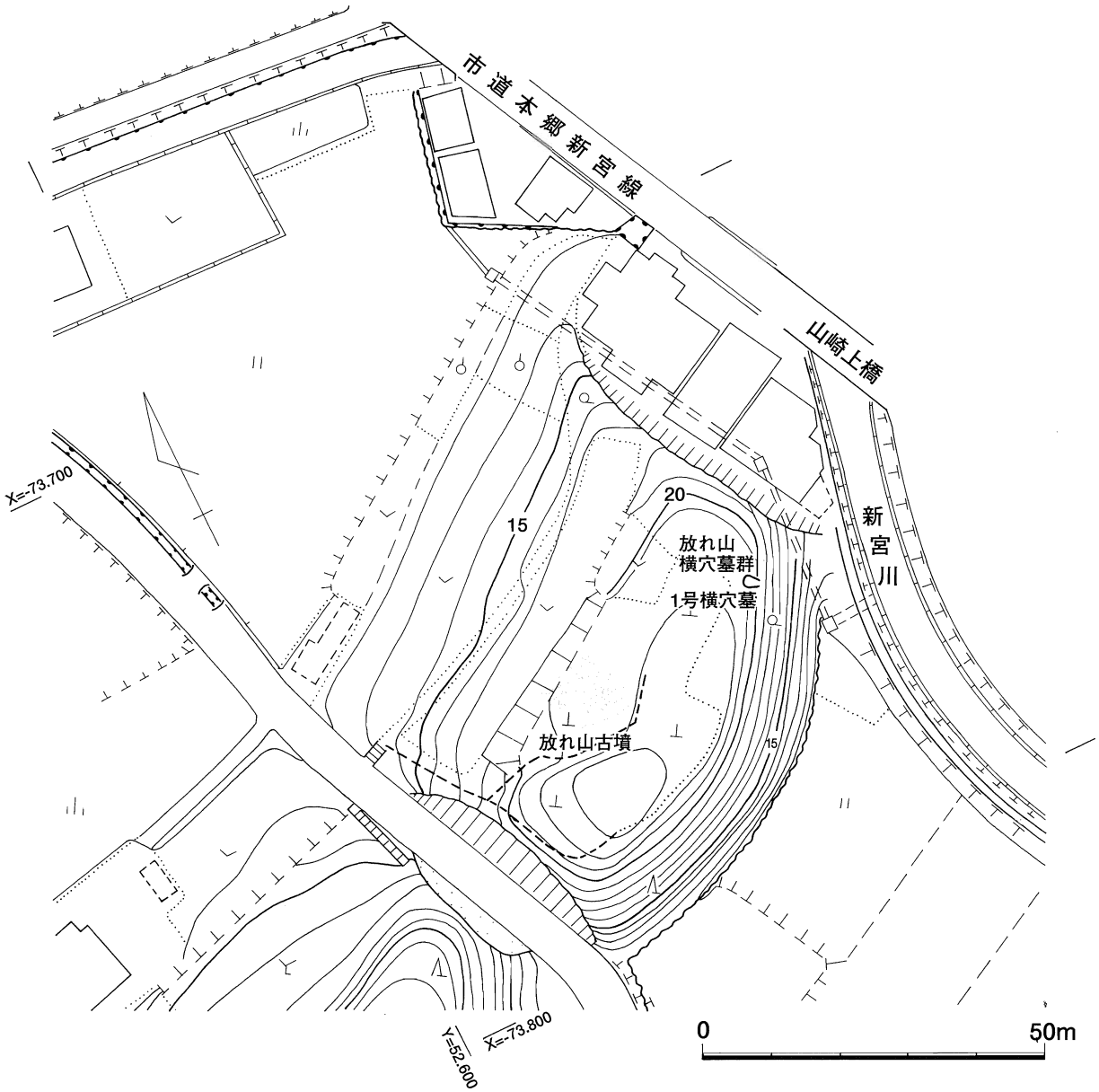
（Ⅱ）放れ山横穴墓群

１.調査の概要

放れ山横穴墓群は、出雲市字放山の放れ山古墳下の位置する丘陵崖下に開口する横穴墓群で、『島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐）』（島根県教育委員会1993）によれば3基が確認されている。なお、丘陵の先端は既に民家によって削られていた。

建設省中国地方建設局(当時)による斐伊川放水路建設事業の新宮川拡幅に併せて、平成8年度に市道本郷新宮線の山崎上橋が掛け替えとなり、放れ山の丘陵も一部削平され、丘陵の残っている部分の約15mにもコンクリートによる護岸が施されることとなった。その削平工事中に、横穴墓1穴が発見され、出雲工事事務所との協議の結果、遺跡を記録保存することとして急遽発掘調査を行うこととなった。

調査は、平成9年2月7日～9日の3日間で実施した。2月7日には発見時すでに開口していた横穴墓の



第15図　放れ山横穴墓群と調査前の周辺地形（S＝1/1,000）

北側を重機によって表土掘削し、他の横穴墓の有無を確認したが、存在は確認できなかった。また、横穴内の半截も行った。翌8日には、横穴を完掘し、図面・写真を撮影し、現場での作業を終了した。9日には、現場で採取した横穴内の堆積土をふるいにかけ、鉄釘片多数を発見した。

2.調査の結果

発掘調査のために現地に到着した時には、現地は雑木が伐開された状況で、1基の横穴が開口していた。また、工事範囲外の南側斜面には別な横穴が隣接して開口していることから、横穴の有無を確認すべく、工事予定範囲の開口している横穴とほぼ同レベルの表土幅約15mを重機によってはぎ取った。結果として横穴墓は確認できなかったが、次に述べる1号横穴墓の羨道部が削り取られているように、ある程度の地形の変容が確認された。ただし、横穴の残存部分も確認されなかったので、今回調査した1号横穴墓の北側には、横穴墓がなかった可能性が強い。

1号横穴墓(第15、16図)　横穴墓群の中での横穴の名称については確定していないことから、今回報告する横穴墓を、放れ山横穴墓群1号横穴墓とする。

規模と構造　1号横穴墓は、標高18.85m程度を床面のレベルとして、ほぼ真北を向いた状況で開口していた。地山は凝灰岩とみられる。羨道の前部は既に存在せず、羨門等の構造は不明である。玄室は、平面縦長の長方形で、羨道部と玄室の区分は不明瞭であるが、若干両袖式に広がりを持ち、床面も不十分ながら段状を呈している。規模は、長さ1.8m、奥壁の幅1.6m、前壁の幅1.3m、天井高は奥壁で1.1m、前壁で1.3mである。天井部の形態は、大谷晃二・松山智弘氏のいういわゆる「アーチ形」を呈し[註1]、特に奥壁については、直線を指向して立ち上がっており、明瞭な界線を確認することができた。また、断面で確認できるように玄門部は天井高が低くなっており、明確な前壁は形成しないものの玄室と羨道の別はあり、いわゆる徳利状の「アーチ形」横穴ではない。横穴の加工痕跡については、ほぼ全面にわたって幅5cm程度の平刃刺突痕が確認されるが、大変荒く掘り崩された状況で、平滑な仕上には至っていない。

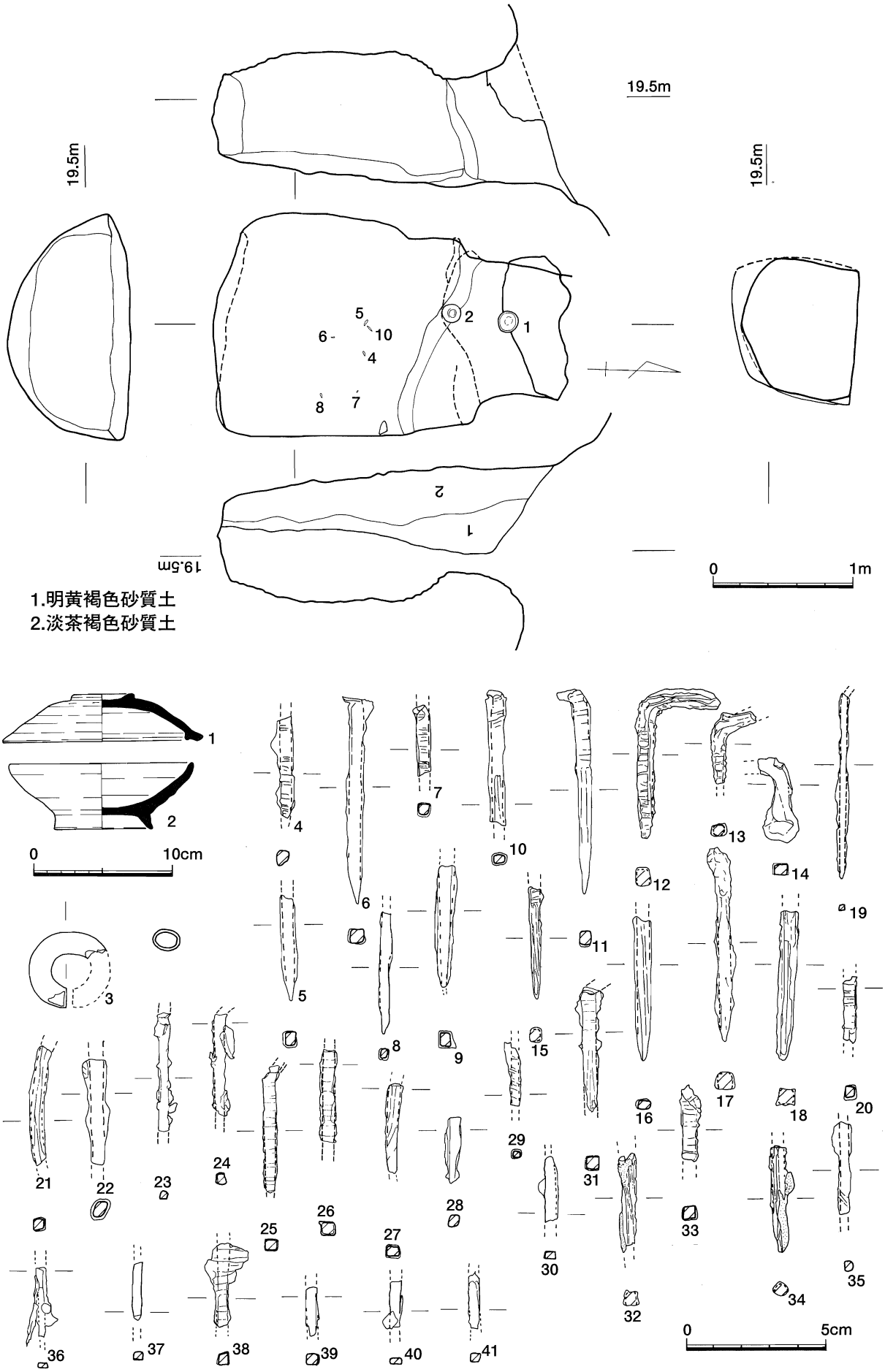
土層堆積状況　堆積土は明黄褐色砂質土と淡茶褐色砂質土からなり、特に上層を構成する前者には風化した凝灰岩が多く含まれている。いずれも横穴開口後の堆積土と考えられ、横穴閉塞の様子などは確認できなかった。

出土遺物（第16図）遺物は須恵器蓋坏1点・坏身1点・甕片1点（図化せず）、中空耳環1点、鉄釘41点が出土した。1は蓋坏で羨道部中央の第2層に浮いた形で出土した。坏身の返りの逆転したもので、低い輪状つまみを持つ。頂部には回転ヘラ削りが施されている。2は高台のある坏身で、羨道と玄室の境部分のほぼ床面から天地逆の形で出土した。全体に肉厚で、浅い坏部に高くしっかりとした高台を持ち、底部はナデ消しが行われているが、静止糸切りの痕跡が確認できる。いずれも大谷晃二氏の坏B1類に当たり、同編年の6期の中でも終わりに近い、7世紀後半の年代観が与えられる。[註2]

3は中空耳環である。大きさは長径30mm・短径27mmで、直径は長径10mm・短径7mm程度である。玄室堆積土中から出土した。

4～41は鉄釘である。このうち4・5・10は玄室中央部、7・8は玄室左側中央部、6は玄室中央部奥側から出土した。それ以外は玄室堆積土調査中、あるいは堆積土をふるいにかける段階で検出した。いずれも保存は良好で安定しており、開口後の攪乱などは少なかったことが予想される。

註1　大谷晃二・松山智弘「横穴墓の形式とその評価」『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』1999年
註2　大谷晃二「出雲地域須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11 1994年



第16図　放れ山横穴墓群1号横穴墓実測図および出土遺物実測図
（1・2：須恵器、3：銀環、4～41：鉄釘）（横穴墓S＝1/40、1・2：1/4　3～41：S＝1/2）

鉄釘は、大きく3類型に分けることができる。第1類は一辺4～5mmの断面長方形を呈するもので、大部分がこれに属する。多くは断片であるが、完形で残る6や11等からすると、長さ7.5cm程度の釘が使用された可能性が高い。これらのうち11・16は縦横両方向の木質の付着する釘で、釘と直交する方向の木目の幅から、3cm程度の板が使用されたことがわかる。29は斜めの木目を持つ木質が残り、釘自体が斜めに打ち込まれたと推測させる。第2類は、第1類がL字に屈曲したもので12·13·14がこれに相当する。釘あるいは鎹のようなものと推測され、L字の長い部分に木質が釘と直交する方向に付着している。第3類は19・23・36がこれに当たり、やや細身の釘である。断面一辺2mm程度で、19から長さもほぼ第1類と同様と考えられる。

鉄釘は篩かけで検出したものが多く出土状況が明らかではないが、横穴墓の規模が必ずしも大きくないものの41点を確認した。これは、先にも述べたように、横穴自体が開口していたにもかかわらず、あまり中が攪乱されていないか、あるいは木棺を利用した埋葬が何度か行われたことを示すものと考えられる。

3.まとめ

今回の放れ山横穴墓群の調査では1基(1号横穴墓)の横穴墓を確認し、調査を行った。また、表土剥ぎの結果、1号横穴墓の北側には横穴が存在しないこともほぼ明らかになった。

調査を行った1号横穴墓は、天井部をアーチ形とし玄室と羨道を区分するタイプである。このタイプは大谷・松山両氏の研究によると出雲地域西部の横穴墓の中では比較的古い形態で、出雲大谷4期に出雲地域西部独自の横穴の形態として出現するとされるものである。一方出土遺物の須恵器は出雲大谷6期に相当する。須恵器は追葬による遺物である可能性があるが、横穴墓が小規模であること、屍床・石棺などはなく、木棺が利用されていることなどから、必ずしも出雲大谷4期に築造された横穴墓とみる必要はないのではないだろうか。いずれにせよ、横穴墓群を形成する他の横穴墓の検討を待って考察する必要のある事柄である。

また、横穴墓の所在する丘陵の上には、出雲大谷4期の放れ山古墳が存在する。神戸川を隔てた上塩冶横穴墓群では、時期は下るが古墳と横穴墓が近接して存在することが確認されるようになってきており、古墳との関係も考えていく必要があろう[註1]。

註1　出雲市教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅰ上塩冶横穴墓群第17·18·19·38支群 大井谷Ⅲ遺跡 石切場跡1·2 三田谷3号墳』　2000

（Ⅲ）只谷間府

１．調査の経緯と経過

只谷間府は、間府川の中途、出雲市大津町上来原の池ノ内から馬ノ背山の下を通り上塩冶町菅沢の只谷の間に築かれた隧道で、現在も用水路として使用されている。

出雲平野は現在では肥沃な農耕地帯を形成しているが、江戸初期までは斐伊川と神戸川下流域に形成された砂地の三角州および沼地などの低湿地であったようである。このような地域では、斐伊川の水を如何に利用するかが課題であるが、斐伊川左岸では上流から来原岩樋・畑田樋・大津町上樋・武志大樋・登立樋の5か所に取水用の樋が設けられ、これらの樋から高瀬川・畑田樋川・枝大津川・竿井出川が流れ出て出雲平野に用水を供給していた。出雲市塩冶地域では神戸川より水田面が高く、農業用水が不足していたので用水を確保する必要があった。

出雲市の東部を流れる斐伊川と出雲平野を結ぶ幹線の用水路としては、来原岩樋から取水して大社町荒木方面へ送水する高瀬川と塩冶方面へ送水する間府川がある。出雲市大津町の来原岩樋から斐伊川の流水を取り入れこれを農業用水として塩冶地域へ送水するために間府川が開削され、大津と塩冶を結ぶ間府川の中途の山稜部分に築かれた隧道が只谷間府である。

江戸時代に築かれた只谷間府も放水路開削工事により消滅することとなったため、記録を残すべく調査を実施することになった。

平成9年度に現地の地形測量と写真撮影を実施した。常時用水が流れているため建設省（現国土交通省）出雲工事事務所・出雲市役所と協議し、水田耕作が終了した後に2週間程度来原岩樋付近にある間府川止水堰を閉めて調査に入ることとなった。その後の出雲市と地元との調整の結果、平成9年11月10日から2週間にわたり閉堰できることとなった。同日現地で測量業者と測量方法について打ち合わせを実施し、測量に着手した。測量は、平面図と縦断図は坑道全線を対象とし、断面図は坑道断面が相違する地点を任意に選んで実施した。

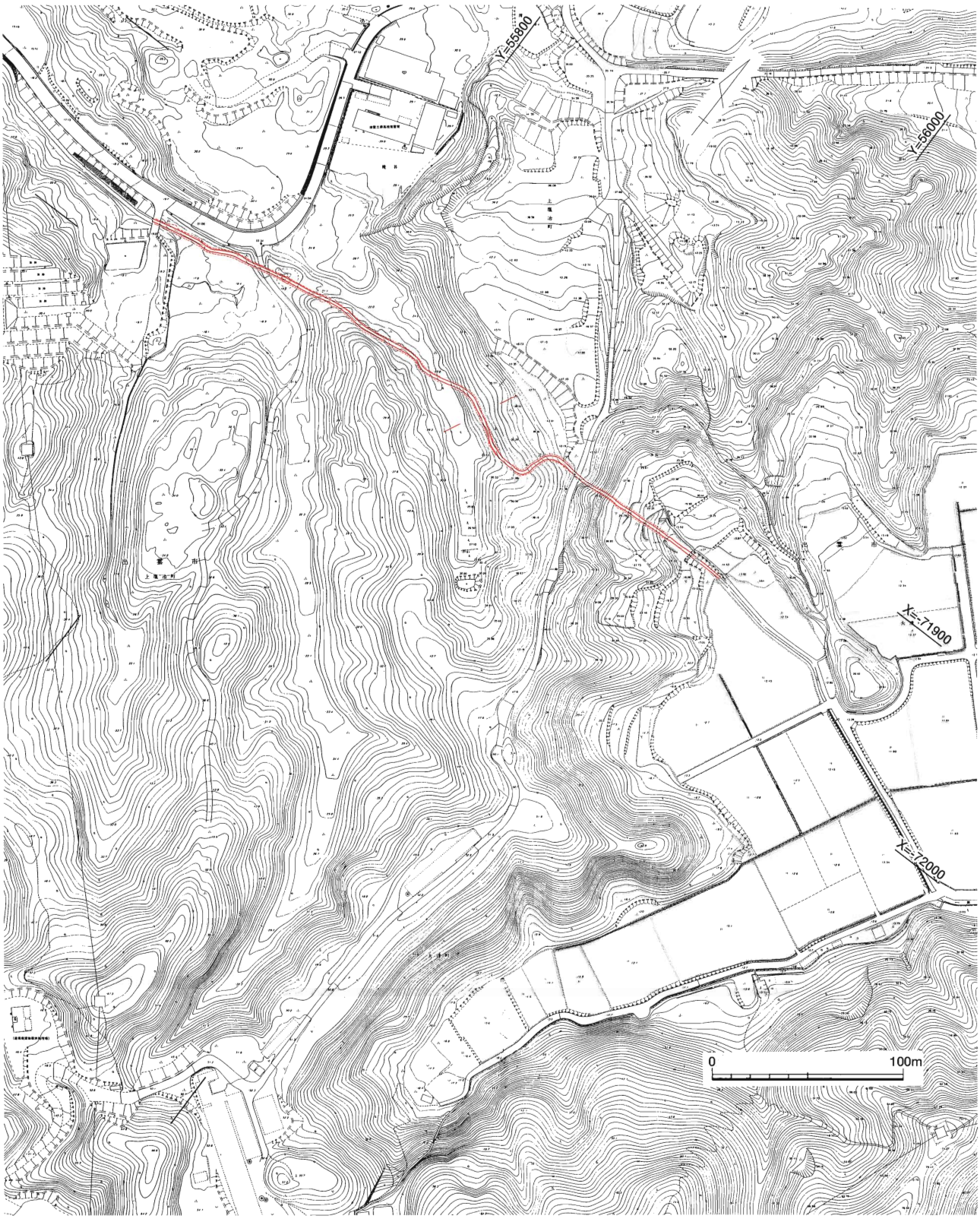
『島根県史蹟名勝天然記念物調査報告10』[註1]や『大梶七兵衛と高瀬川』[註2]、『出雲市大津町史』[註3]に間府川が開削され只谷間府が築かれた経緯や概要が記載されており、これらの内容を参考にしながら測量や写真撮影の計画を立案した。測量はまず間府の平面図と縦断図、断面図を作成し、この図面を基に文献や古文書の記述との照合を行った。

記述によれば3か所に明かり取りと砂取りを兼ねた穴が天井部に設けられたとあるが、現状では１か所に残存しているのみで他の２か所については確認できなかった。

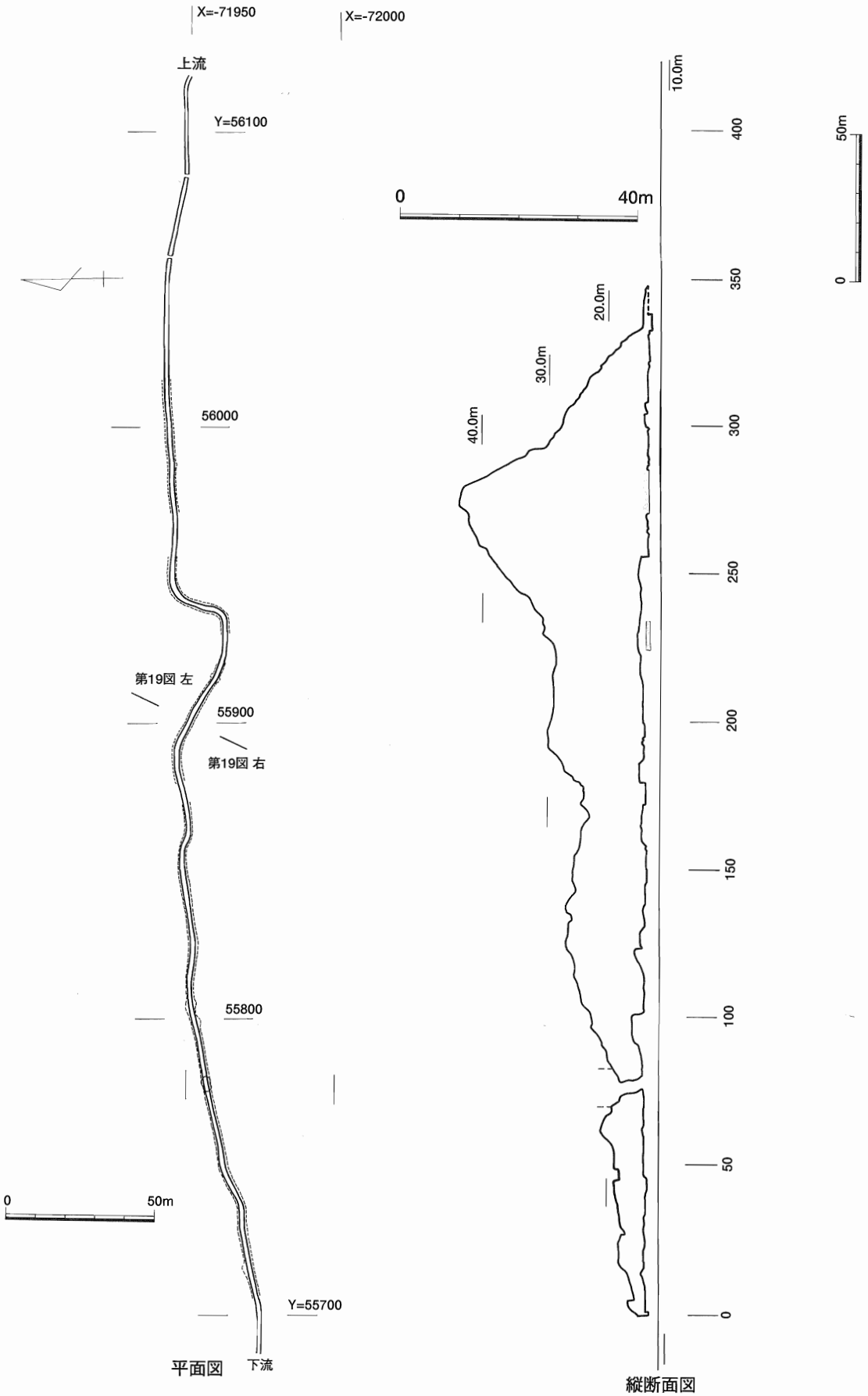
11月17日には島根大学教育学部林正久教授から現地指導を受け、19日には井上治夫氏により写真撮影を実施した。しかし、高瀬川改修工事施工部分から間府川へのポンプ排水は継続されており、かなりの流水がある中での作業となった。

また、只谷間府の下流側坑口の周辺で土層確認のためのトレンチ調査を12月12日に実施した。3m四方の調査区を２か所設定して行ったが、何れの調査区も現地表面から2.5mと3.5mで黄褐色砂岩に達した。砂岩の上には砂岩の風化層があり、その上は地表面までシルト質の土層で、遺構も遺物も確認されなかった。その後文献資料の調査などを行った。

註1　後藤蔵四郎「来原の岩樋」『島根県史蹟名勝天然記念物調査報告』10 1935
註2　石塚尊俊「大梶七兵衛と高瀬川」『出雲市民文庫1』出雲市教育委員会　1987
註3　石塚尊俊編『出雲市大津町史』大津町史刊行委員会　1993



第17図　只谷間府と周辺の地形（S＝1/3,000）



第18図　平面図（S=1/2,000）・縦断面図（平面：S=1/2,000・断面：S=1/1,000）

２．遺構

第１節　間府(坑道)

間府川は、現状では何度かの改修工事により三面コンクリート張りの水路となっており、間府坑道内も全域にわたって床と両側面の三面がコンクリート面に改修されていた。また、部分的には天井部まで四面全面がコンクリートで覆われている区間もあり全線にわたって観察することはできなかった。よって坑道内の川幅は、全区間同規格で改修されており現状では1.3mである。地点の数字は測量図の地点を表しており下流側坑口からの距離を表している。

№１地点（下流側坑口）

下流側坑口から1mほどの間は、コンクリートで全面被覆されており、坑（天井）高は1.5mである。坑口から1mほどすぎると坑高は2.2mとなる。なお、No.10地点付近では北側壁の上半部が外側へ1mほど膨らんでいる。下半部はコンクリート壁に覆われているため本来の壁を確認することはできないが、下流側坑口としての幅は本来2mほどあったのではないかと考えられる。

№75地点

№80地点までの間の天井部に径5mほどの穴が地表面まで穿かれている。天井面から約4mで地表面に達している。明かり取りのための穴と考えられる。(第19図QR)

№82地点

坑高2.6mほどの天井が№100地点に向かって徐々に高くなっている。（第19図OP）

№100地点

坑高が4.5mまで高くなっていた天井は、この地点で2.3mまでほぼ垂直に下がっている。掘削の誤りを修正したためと考えられる。

№115地点

坑高2.5mほどの天井が№122地点に向かって徐々に高くなっている。

№122地点

坑高が4.0mまで高くなっていた天井は、この地点で2.5mまでほぼ垂直に湾曲しながら下がっている。№100地点と同様に掘削の誤りが修正されたためと考えられる。

№140地点

この区間あたりは、坑高が2.0mで平均している。

№160地点

№157地点で坑高が2.0mあった天井は、徐々に高くなり№159地点では2.8mほどになる。

№171地点

№179地点までの8mほどの区間は坑高2.6mほどのコンクリート天井となっている。

№200地点

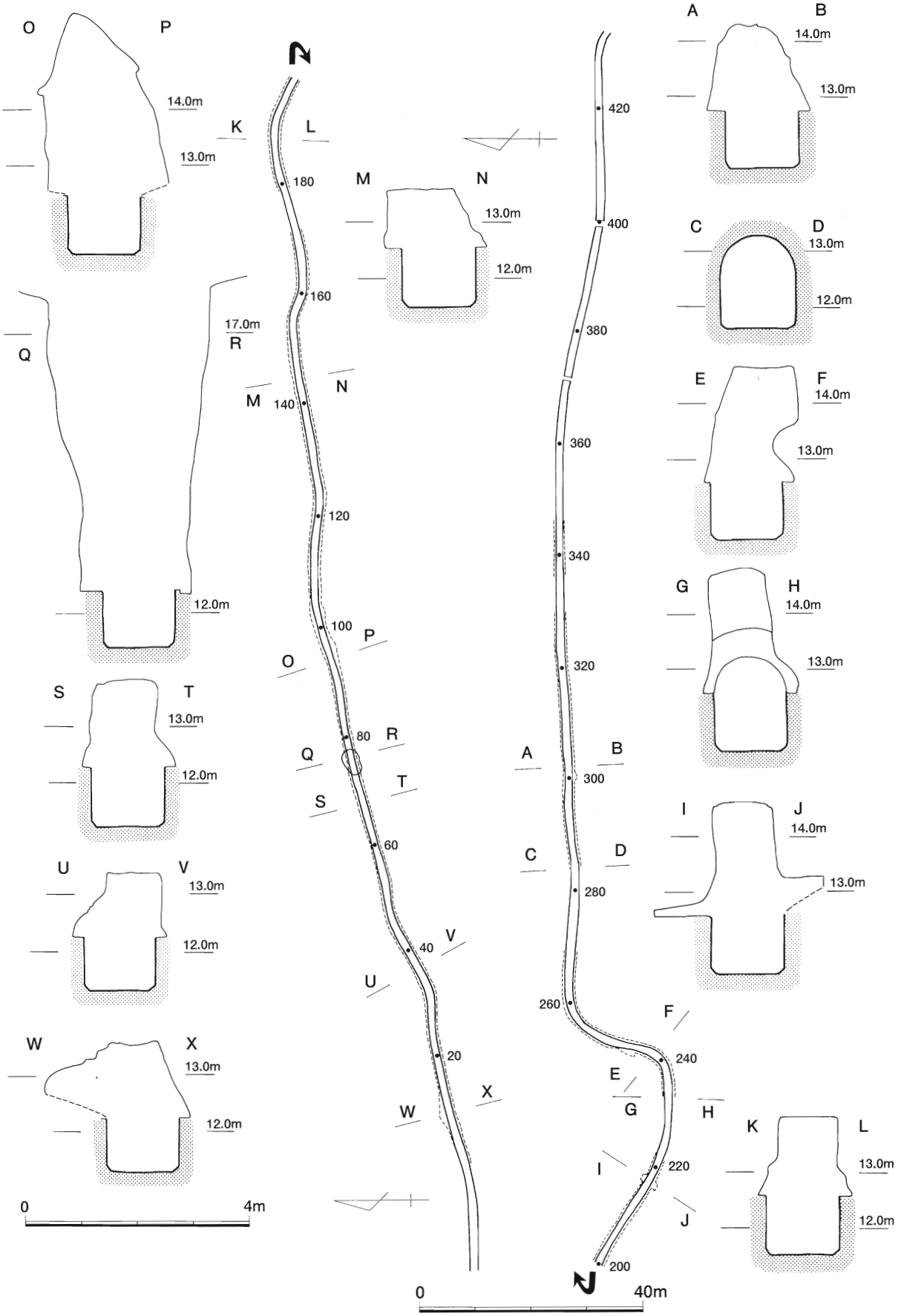
坑高は2.4mある。この付近から№260地点の間は坑道が南側に向かって大きく湾曲している。約60mの区間で最大で18mほど本来の流れからそれている。

№223地点

坑高は3.4mあるが№233地点までの区間は、床面から1.5mほどの高さにコンクリート天井が設けられている。

№245地点

坑高が3.0mあった天井は、この地点で1.7mまでほぼ垂直に湾曲しながら下がっている。掘削によ



第19図　平面図（S＝1/1,000）・横断面図（S＝1/100）　※数字は下流側坑口からの距離（m）

る誤りの修正が行われたものと考えられる。

№260地点

坑高は1.8mある。

№269地点

坑高は2.0mあるが、1.5mのところに№284地点までコンクリート天井が続いている。

№284地点

コンクリート天井が終わり坑高は1.9mある。

№331地点

坑高は1.0mあるが№337地点までコンクリート天井が続いている。

№337地点

坑高は1.9mあるが、№347地点まで天井は板材やトタン板で被覆されており、№337地点付近が実質的には坑口と考えられる。

№347地点(上流側坑口)

坑口で坑高は1.8mあるが、ここまでの10mほどの区間は崩壊防止のために後日覆われたものと考えられる。

なお、№200地点で坑道が大きく湾曲しているのは、林正久島根大学教授によればこの地点の岩質が他区間に比して硬いために迂回したのではないかとの指導を承けた。これに関して後藤蔵四郎氏は、上流側からの掘削と下流側からの掘削がズレたため上流側から135間のところで「五尺許の食ひ違が出来て居る。」と報告しておられるが、今回の測量図(平面図)を見ればズレというよりは人為的に迂回したとする林氏の見解が妥当のようである。

また、上流側と下流側との坑口での川床のレベル差は25cmほどである。しかし、№100地点と№122地点、№245地点では坑高（天井高）がほぼ垂直にズレを生じており掘削の際に生じた水平方向の誤りの修正が行われたものと考えられる。もし両方向からの掘削にズレが生じたとすれば少なくともこの3地点が掲げられる。

第２節　明かり取り坑

後藤蔵四郎氏の報文によれば、「下口は唯谷にあって、それより間府内へ進むこと四十間にして一番明かり取り穴あり、又進むこと四十間にして二番明かり取り穴あり、又進むこと十五間にして三番明かり取り穴あり、……」とある。

しかし、間府が走る山陵の地表面も既に改変を受けており、現状では砂取りと明かり取りを兼ねた穴は、坑内及び地表面の観察でも1か所でしか確認できなかった。

残存している1か所は「一番明かり取り穴」で下流側坑口から75mほどのところにあり直径5mほどの穴が地表面まで貫通している。床面から坑道の天井面までの高さが2.6mほどあり、そこからさらに地表面までは4mほどある。坑径は坑道天井部で2×5m、地表部で3×5mほどであったが、雨天時には周囲から雨水が流れ込み滝壺の状況を呈していた。

報文の記述と地形とを照合すると「三番明かり取り穴」は、おおよその位置を推定することができた。やはり地表面までの土の被りが少ない場所を選地しているようである。坑内では天井部にコンクリート製土止めが施工されているため確認が不可能であったが№175地点付近と推定される。

しかし、「二番明かり取り穴」については、報文の記述地点付近では天井にコンクリート製土止めが施工されていないにもかかわらず穴の痕跡を確認することはできなかった。

３．文献資料

（１）　寸法について

『土工記』[註1]に「長百九十八間、高八尺、横四尺」と記されいる。横幅の記述については、現状では壁下半部にコンクリート擁壁が施工されているが上半部の幅とほぼ一致している。高さについては、部分的に誤掘削によると思われる高い天井部分があるが平均的には記述に合致している。

長さについては、後藤蔵四郎氏の報文に「正保三年調査の時には間府の長二百三十間であったが、其の後下口の方が崩れて今は長百九十八間許となった」とある。今回の地形測量より長いが、前述の「一番明かり取り穴」までの距離の記述が今回の測量結果がほぼ一致することからすれば、下流側坑口付近が崩壊したためではなく、上流側の坑口付近の崩落と測量誤差によるものと考えられる。

（２）　時期について

掘削の時期について記述されている文献としては、後世に記されたものではあるが

①『雲陽郷方古今覚書』[註2]

「神門郡上塩冶村唯谷分、并半分と申所、用水払抵、毎年旱損大分ニ付、石塚村あせりが池之内唯谷迄山之間、百三年以前慶安二丑ノ年、間歩御掘貫」

②『土工記』

「唯谷間府、上塩冶村、慶安三、石州金掘夫ヲ以別之、長百九十八間、高八尺、横四尺」

③『出雲私史』[註3]

「是歳、石見の鉱夫を募り、山を穿ち、石閾を上塩冶村に作り、水を引き、田に漑ぎ、慶安三年に至って成る」

等がある。

間府は慶安三年（1650）ごろに完成したもので、石見銀山から鉱夫を連れてきて掘らせたとある。

これに対し、「大梶家伝記録控」[註4]によれば、正徳二年（1712）に大梶七兵衛の孫の忠左衛門朝則が掘削したとあるが、記載内容の正確性等を考えると疑問が残る。

４．まとめ

来原岩樋の開削について『出雲私史』の元禄十三年（1700）の条には、

「十三年、大梶七兵衛に命じ、石閾を神門郡石塚村に作らしむ。広さ八尺余、長さ十八間、出雲川を引いて以て高瀬川に注ぐなり。七兵衛は同郡上古志村の人なり。川及び閾を処々に作れる功を賞し、新墾の田一町二段を荒木村に賜ひ、税を免す。」

とあり、来原岩樋は元禄13年に掘削されたことがわかる。

また、「池の内」と呼ばれている一帯は、ボーリング調査の結果でもかなりの深さまでほとんどが川砂の堆積層であることから、斐伊川からの流水がかなり直接的に流れ込んでいた場所と考えられる。

時系列的に整理してみると、

①「池の内」に斐伊川から直接的に川水が流入し滞留。

②只谷間府を築き間府川を開削。

註1　『土工記』島根県立図書館蔵（筆者不詳、刊行年不明）

註2　『新修島根県史・史料篇2』　島根県　1965　p.503

註3　『和訳　出雲私史』復刻　島根郷土資料刊行会　1972

註4　石塚尊俊『大梶七兵衛朝泰伝』　大梶七兵衛翁奉賛会　1958

③斐伊川に本格的な堤防を築き、来原岩樋を築く。
という順序によって作業が進められ、塩冶地区に用水がもたらされたと考えられる。

間府川は、現在も用水路として日常的に利用されている河川であり、また同時期に高瀬川において改修工事が施工中であったため、流水を長期間にわたって遮断して作業するのは困難な状況であった。工具の痕跡など詳細な調査を実施することはできなかったが、これまで文献によってのみ検討されてきた間府について詳細な測量図が作成できたのは大きな成果であった。

（Ⅳ）上沢Ⅲ遺跡出土鋳造・鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ･TACセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

１　いきさつ

上沢Ⅲ遺跡は出雲市上塩冶町菅沢に所在する。奈良平安時代の掘立柱建物跡、中世の土壙、近世遺構の墓地が検出された。

掘立柱建物跡のうち、SB01の一角から小規模の鍛冶炉が確認された。それに伴い鍛冶滓、羽口片、鉄製品等の鍛冶関連遺物が出土しているため、当遺跡内での鉄器生産の実態を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

２　調査方法

２－１　供試材

Table.1に示す。出土遺物計9点の調査を行なった。

２－２　調査項目

(1)　肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2)　マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍もしくは20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3)　顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3μと1μで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄は5%ナイタル（硝酸アルコール液）で、腐食（Etching）している。

(4)　ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5)　CMA（Computer Aided X-Ray Micro Analyzer）調査

EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名Ｘ線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

(6)　化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）、：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(7)　耐火度

耐火度の加熱に耐える温度とは、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態度の温度で表示することを定め、これを耐火度と呼んでいる。試験には三角コーン、つまりゼーゲルコーンが溶倒する温度と比較する方法を用いている。

3　調査結果

AGE－1　炉壁炉底（溶解炉）

①　肉眼観察：溶解炉の炉底部破片である。補修痕が少なくとも3枚確認される。各補修面表層は発泡、ガラス質化する。炉壁胎土は各面とも砂質土と粘質土を合せたもので、多量の籾殻と僅かに石英粒を混和している。

②　顕微鏡組織：Photo.1①～⑤に示す。①～③はガラス質部分である。①は針状の微小析出物及び微細な金属鉄粒が晶出する。鉱物相についてはCMA調査の項で詳述する。⑤⑥は炉壁内に貫入した銹化鉄部である。フェライト素地に少量パーライトが晶出する、亜共析組織痕跡が残存する。溶融銑鉄が炉内に貫入して酸化脱炭したものであろう。金属鉄粒の晶出や銹化鉄部の存在から、当試料は鉄の鋳造に用いられた溶解炉の炉壁片と推定される。

③　CMA調査：Photo.8の第1段に、ガラス質滓中の微小析出物及び金属粒のCOMP（反射電子像）と定量分析値を示す。18の番号をつけたガラス質の素地部分の定量分析値は58.8%SiO_2－12.0%Al_2O_3－13.1%CaO－2.8%MgO－4.2%K_2O－1.2%Na_2Oであった。珪酸塩である。また19の番号をつけた微小金属粒の定量分析値は124.9%FeOであった。酸化物定量での測定のため100%を越える値となったが、金属鉄（Metallic Fe）であった。20の番号をつけた微小析出物の定量分析値は20.6%CaO－9.9%MgO－53.9%SiO_2組成で透輝石（Diopside：CaO・MgO・2SiO_2）系の鉱物相が同定される。

④　化学組成分析：Table.2に示す。胎土分析である。強熱減量（Ig loss）は1.97%と低く、熱影響を受けて結晶構造水の多くが飛散した状態での分析である。鉄分（Fe_2O_3）は6.47%と高値であった。また酸化アルミニウム（Al_2O_3）は14.23%と低く、更に塩基性成分（CaO＋MgO）3.69%と高めで、耐火性には不利に働くであろう。

銅（Cu）は0.01%とごく微量の値に留まった。更に硫黄（S）も0.02%低値で、不純物の含有は少ない。

⑤　耐火度：胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当り10℃の速度で1000℃まで温度上昇させ、以降は4℃に昇温速度をおとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度が1050℃であった。成分系を反映して耐火性の低い性状を呈する。

AGE－2　ガラス質滓

①　肉眼観察：炉壁溶融からの偏平なガラス質滓である。表面には上下に細い筋の垂下痕跡が残る。

②　顕微鏡組織：Photo.1⑥～⑧に示す。鉱物組成は粘土鉱物主体の暗黒色ガラス質で、上面側表層に沿って白色多角形結晶マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が晶出する。粘土高温溶融物である。

④　化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分（Total Fe）8.80%に対して、金属鉄（Metallic Fe）＜0.01%、酸化第1鉄（FeO）3.45%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）8.75%の割合で鉄分は少ない。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は逆に多くて85.09%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）は4.32%であった。胎土は砂鉄を僅かに含み砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）1.10%、バナジウム（V）は0.01%、また酸化マンガン（MnO）0.09%、銅（Cu）0.01%であった。

AGE－3　椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：鍛冶炉の炉底に堆積形成されたほぼ完形の椀形鍛冶滓である。やや偏平で平面不整楕円形を呈する。上面はほぼ平坦で僅かに木炭痕が残る流動状である。また中央部に灰白色の滓を付着し、羽口の溶融物と考えられる。側面から下面は全面細かい木炭痕が残る。

②　顕微鏡組織：Photo.2①～⑤に示す。素地の暗黒色ガラス質滓中に白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）が晶出する。また④は微細な銹化鉄部分で未凝集の状態で散在する。パーライト痕跡は不明瞭で炭素量は判らない。

③　ビッカース断面硬度：Photo.2⑤に淡灰色木ずれ状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は621Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値[注1]の範囲内であり、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）に同定される。

④　化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分（Total Fe）45.87%に対して、金属鉄（Metallic Fe）＜0.01%、酸化第1鉄（FeO）40.22%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）20.88%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）32.26%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）1.80%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.79%、バナジウム（V）0.03%と低く、酸化マンガン（MnO）も0.09%と低値であった。銅（Cu）は0.01%である。脈石成分（Ti、V、Mn）の低減した値から、砂鉄系鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出した鍛錬鍛冶工程での派生物に分類される。

AGE－4　椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：平面は不整楕円状、小型で偏平なほぼ完形の椀形鍛冶滓である。上下面とも木炭痕が僅かに残り、細かい波状を呈する。破面の気孔は微細でやや光沢を持つ。

②　顕微鏡組織：Photo.2⑥～⑧に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鉄器製作時の鍛錬鍛冶に際して排出された滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo.2⑥に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は419Hvであった。ヴスタイト（Wüstite：FeO）の文献硬度値の下限を僅かに下回る値となったが、測定時の亀裂の影響などによる誤差と考えられる。

④　化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分（Total Fe）56.55%に対して、金属鉄（Metallic

Fe）＜0.01%、酸化第1鉄（FeO）36.70%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）40.07%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は19.98%と少なく、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）2.82%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.17%、バナジウム（V）0.01%と低く、酸化マンガン（MnO）も0.05%と低値であった。銅（Cu）は0.01%である。鉄分高く、脈石成分の低減傾向が著しい特徴から、鍛錬鍛冶滓に分類される。半製品（例えば鉄てい状）もしくは廃鉄器を原料鉄とした可能性も指摘できよう。

AGE－5　鍛冶滓（含鉄）

①　肉眼観察：平面不整三角形気味の、小型でやや偏平な鍛冶滓である。側面1面は破面で、椀形鍛冶滓の側部破片のような外観を呈する。磁着はやや強いが、放射割れは起こしていない。ごく小さな銹化した鉄部が存在する。

②　顕微鏡組織：Photo.3に示す。①は表面に付着した鍛造剥片で、鉄酸化膜の3層構造が明瞭で内蔵ヴスタイトは非晶質である。鍛打作業の仕上げ段階時の派生物。また②～⑦は滓部である。②③は粒内に微小析出物が存在する白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）の晶出する個所。④～⑦は淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO\cdot TiO_2$）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）が晶出する個所である。精錬鍛冶滓末期頃の晶癖であろう。また⑥⑦では微細な金属鉄粒も僅かに散在する。⑧は銹化鉄部分である。ここでも鉄中炭素量の推定は難しい。

③　ビッカース断面硬度：Photo.3⑧に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は740Hvであった。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO\cdot TiO_2$）とヘーシナイト（Hercynite：$FeO\cdot Al_2O_3$）の混合組成の可能性をもつ。

④　CMA調査：Photo.8の第2段に滓部鉱物相のCOMP（反射電子像）と定量分析値を示す。COMPに9の番号をつけた範囲の定量分析値は38.6%SiO_2－13.7%Al_2O_3－10.0%CaO－3.8%K_2O－4.5%Na_2O－27.1%FeOである。素地のガラス質滓と微細なファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）結晶の混合組成であった。また10の番号をつけた白色粒状結晶内で10μ平方エリアの範囲の定量分析値は89.0%FeO－6.3%TiO_2－1.8%Al_2O_3であった。ヴスタイト（Wüstite：FeO）に同定される。なお僅かにチタン（Ti）、アルミニウム（Al）が検出された。11の番号をつけた淡茶褐色多角形結晶の定量分析値は67.2%FeO－21.0%TiO_2（3.1%V_2O_3－5.6%Al_2O_3）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO\cdot TiO_2$）に同定される。他にバナジウム（V）、アルミニウム（Al）を僅かに固溶する。12の番号をつけた淡灰色木ずれ状結晶の定量分析値は63.8%FeO－30.6%SiO_2であり、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）に同定される。砂鉄特有元素のチタン（Ti）が明瞭に検出された。

⑤　化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分（Total Fe）47.96%に対して、金属鉄（Metallic Fe）＜0.01%、酸化第1鉄（FeO）18.99%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）47.47%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）22.24%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）1.46%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）1.44%、バナジウム（V）0.09%、また酸化マンガン（MnO）は0.15%、銅（Cu）0.01%であった。AGE－3・4と比較して脈石成分が高値傾向を示す。

鉱物組成・化学組成双方の特徴から、鍛冶原料として搬入された製錬生成鉄の不純物除去及び成分調整の精錬鍛冶工程末期頃もしくは若干の不純物をもつ鉄素材の鍛錬鍛冶での派生物と推定

される。

AGE－6　製錬滓（含鉄）

①　肉眼観察：平面は不整台形をした、小型で偏平な鉄滓である。表面には酸化土砂が点在し、地の状態が分かりづらい。また僅かに黒錆が滲んでいる。上面は平坦で、側面から下面はやや凹凸があり、一部は木炭片を噛みこんでいる。

②　顕微鏡組織：Photo.4①～⑤に示す。①の鉱物組成は発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、及び微細な淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する個所である。また②③は暗黒色ガラス質の素地中に白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）やルチル系鉱物の析出する個所である。砂鉄製錬滓の晶癖である。いずれも周囲に微細な銹化鉄部分を多く残す。

③　ビッカース断面硬度：Photo.4④⑤に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は④が700Hv、⑤が716Hvであった。共にウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）に同定される。

④　CMA調査：Photo.8の第3・4段に滓部鉱物相のCOMP（反射電子像）と定量分析値を示す。3段目の13の番号をつけた素地部分の定量分析値は、41.2%SiO_2－11.5%Al_2O_3－11.2%CaO－2.7%MgO－3.0%K_2Oの珪酸塩である。これに11.9%FeO－11.4%TiO_2を固溶する。また14の番号をつけた片状結晶の定量分析値は62.4%TiO_2－14.8%FeO（3.5%V_2O_3－1.7%MnO－4.9%MgO－2.7%Al_2O_3）であった。ルチル系に近づいたチタン鉄化合物である。

更に4段目の15の番号をつけた淡茶褐色多角形結晶の定量分析値は56.9%FeO－28.0%TiO_2（4.4%V_2O_3－1.6%MnO－1.1%Cr_2O_3－6.1Al_2O_3－2.3%MgO）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）に同定される。17の番号をつけた淡灰色木ずれ状結晶の定量分析値は56.0%FeO－31.2%SiO_2で、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）に同定される。16の番号をつけた素地部分の定量分析値は42.1%SiO_2－16.1%Al_2O_3－12.4%CaO－5.4%K_2O－1.6%Na_2O－14.5%FeOであった。珪酸塩に鉄（Fe）を僅かに固溶する。砂鉄製錬滓の鉱物組成である。

AGE－7　粒状滓(注2)

AGE－7－1　4.3mm径

①　肉眼観察：黒灰色でやや歪な球状を呈する。 粒状滓である。

②　マクロ組織：Photo.4⑦に示す。表面はやや凹凸がみられる。また断面には0.05～1mm大の気孔が散在する。

③　顕微鏡組織：Photo.4⑧～⑩に示す。赤熱鉄素材に表面酸化防止のための粘土汁を塗布した溶融物から派生した粒状滓である。全体がガラス質で、熱影響を受けた砂鉄粒子、及び微細な白色多角形結晶マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が僅かに晶出する。砂鉄粒子は羽口ないしは炉壁胎土中に混在したものと推定される。周囲のマグネタイトもこの混入砂鉄粒子が熱影響を受けた結果、晶出したものであろう。

AGE－7－2　2.3mm径

①　肉眼観察：黒灰色で歪な球状を呈する。表面には凹凸があり、僅かに茶褐色の銹化物が固着す

る

② マクロ組織：Photo.5①に示す。断面は不整円形状で、内部には0.05～0.5mm大の気孔が散在し、中に幾つか気孔が集まった歪な形状のものも存在する。

③ 顕微鏡組織：Photo.5②に示す。鉱物組成は微細な樹枝状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。粒状滓に分類される。

AGE－7－3　3.1mm径

① 肉眼観察：黒灰色で、歪な球状を呈し、表面にはごく小さな突起が複数みられる。

② マクロ組織：Photo.5③に示す。内部は大きく空洞化し、円周部を薄く白色鉱物相が巡る。

③ 顕微鏡組織：Photo.5④に示す。鉱物組成は微細な粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が凝集晶出する。これも典型的な粒状滓組織である。

AGE－7－4　1.4mm径

① 肉眼観察：黒灰色で歪な球状を呈する粒状滓である。

② マクロ組織：Photo.5⑤に示す。内部には複数の気孔が集まって生じた、歪な空洞が存在する。該品も円周肉厚は薄く不均等である。

③ 顕微鏡組織：Photo.5⑥に示す。鉱物相がやや厚みをもつ個所の組織である。微細な樹枝状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。

AGE－7－5　1.0mm径

① 肉眼観察：黒灰色で小粒のやや歪な球状を呈する粒状滓である。

② マクロ組織：Photo.5⑦に示す。写真下半分に複数の気孔が集まって生じた、大きな空洞が存在する。

③ 顕微鏡組織：Photo.5⑧～⑩に示す。鉱物組成は一部風化を受けるがごく微細な樹枝状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が晶出する。

AGE－8　鍛造剥片 (注3)

AGE－8－1　0.24mm厚み

① 肉眼観察：色調は黒灰色。厚手の剥片で、表裏面共やや凹凸をもち、平坦性に欠ける。

② マクロ組織：Photo.6①に示す。断面は僅かに彎曲気味の剥片である。また表裏面の凹凸に伴う厚み変動をもつ。

③ 顕微鏡組織：Photo.6②～④に示す。王水腐食により鉄酸化膜の3層構造が明瞭に現れた。外層微厚ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）は不明瞭で、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）は健全、内層ヴスタイトは非晶質化が進行しているが、腐食後は僅かに結晶粒界の痕跡が確認できる。鍛打作業の後半段階での派生品である。

AGE－8－2　0.16mm厚み

① 肉眼観察：色調は黒灰色。表面はやや凹凸があり、裏面側で顕著である。

② マクロ組織：Photo.6⑤に示す。断面は全体に平坦気味で、表裏面の凹凸に伴う厚み変動が認

められる。

③　顕微鏡組織：Photo.6⑥～⑧に示す。風化の影響が大きくて王水腐食の効果は現われず、鉄酸化膜の層構造は不明瞭である。剥片は3層分離型の可能性をもち、内層ヴスタイトは非晶質であろう。AGE－8－1に準ずる組織とみなされる。

AGE－8－3　0.18mm厚み

①　肉眼観察：色調は青灰色。平坦気味の鍛造剥片である。

②　マクロ組織：Photo.6⑨に示す。表裏面は凹凸を伴う厚み変動が僅かにあるが、ほぼ均等性を保つ。

③　顕微鏡組織：Photo.6⑩に示す。3層の鉄酸化膜が確認された。外層ヘマタイトは一部連続性に欠けるが中間層マグネタイトは健全で、内層ヴスタイトは非晶質である。ただし風化のためにetch効果はなかった。これも鍛打作業の後半以降の派生物である。

AGE－8－4　0.08mm厚み

①　肉眼観察：色調は黒灰色。薄手の剥片で、表裏面共凹凸が著しい。

②　マクロ組織：Photo.7①に示す。断面は僅かに外弯し表裏面の凹凸に伴う厚み変動が顕著である。

③　顕微鏡組織：Photo.7②に示す。粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が凝集気味に晶出し、粒間には僅かに淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。3層分離の酸化膜の形態が不鮮明で鍛冶滓片の可能性が高い。

AGE－8－5　0.10mm厚み

①　肉眼観察：色調は黒灰色。薄手で、平坦性を保つ鍛造剥片である。

②　マクロ組織：Photo.7③に示す。断面は表裏面の凹凸に伴う厚み変動が僅かにみられるが、ほぼ平坦な鍛造剥片である。片面に酸化土砂が固着する。

③　顕微鏡組織：Photo.7④～⑥に示す。表裏両面から中央間隙部にかけてヘマタイト膜が形成され、中間層マグネタイトは不鮮明である。鍛打により飛散した鍛造剥片が鍛冶炉内で再加熱された痕跡がある。

AGE－9　羽口

①　肉眼観察：外面が黒色ガラス質化した羽口先端部破片。内径は推定で2.2cmの小口径羽口である。胎土は砂質で僅かに白色の骨針様の微細粉を含んでいる。

②　顕微鏡組織：Photo.7⑦～⑨に示す。ガラス質滓中に熱影響を受けた砂鉄粒子が混在する。これらは羽口胎土中に含まれていた砂鉄粒子と推定される。周囲の微小析出物もこうした羽口胎土由来の砂鉄の成分とガラス質分が反応して生じた派生物である。

③　化学組成分析：Table.2に示す。鉄分（Fe_2O_3）と6.02%高く、また酸化アルミニウム（Al_2O_3）は15.07%と低めで、更には塩基性成分（CaO＋MgO）も3.88%と高く、耐火性には不利な成分系である。

溶解炉炉壁（AGE－1）と類似する成分系であるため、耐火性は低い性状であることが予想される。また共に在地の粘土を用いている可能性が高い。

4　まとめ

上沢Ⅲ遺跡出土の古代鍛冶の関連遺物や中世の鋳造関係の遺物を調査した結果のまとめをTable.3に示す。

〈1〉古代（奈良・平安）の鍛冶は鉄器製作を中心とした鍛錬鍛冶作業が想定される。鉄素材は砂鉄系で、一部に脈石成分（Ti、V、Mn）が若干高め傾向の滓（AGE－5）も存在するが、全体的な動向は高純度材の投入といえよう。椀形鍛冶滓の成分は脈石成分が低めで、かつ粒状滓の鉱物相はヴスタイト単独、更に鍛造剥片は比較的平坦度を保ち、内層ヴスタイトは非晶質を呈している。板・棒など半製品的な鍛冶原料の搬入が推定される。

当遺跡は転用硯の出土があって、周辺の寺院や宮衛との関連が指摘され、村方鍛冶とは異なる鍛冶操業を示唆するものである。

〈2〉中世の鋳造作業は銅か鉄の決め手を欠く。ただし、AGE－6製錬滓の存在を関連づけると鉄の鋳造の可能性が高くなる。溶解炉の炉壁に微小金属粒が晶出するが、これは粘土混入砂鉄などから派生する場合もありうる。一方羽口が同時期とすれば溶解炉副産物の脱炭鉄塊を鍛冶原料とした可能性も指摘できる。(注6)

〈3〉炉壁片（AGE－1）、ガラス質滓（AGE－2）、羽口（AGE－9）の化学組成は近似する。このため鋳造・鍛冶用の炉の構築材は、ともに近傍の粘土を原料とした可能性をもつ。また炉壁片（AGE－1）の耐火度は1050℃と低めの性状を示し、全体に耐火性は低いものと推測される。

（注）

（1）　日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』　1968　磁鉄鉱は530～600Hv、ヴスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルは硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。

（2）　粒状滓は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。

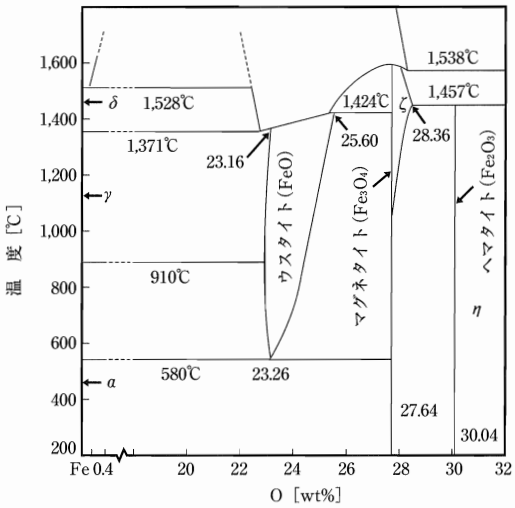
（3）鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。(注4)

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ヴスタイト（Wustite：FeO）の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ヴスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe－O系平衡状態図から説明される。(注5)

鍛造剥片を王水（塩酸3：硝酸1）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）は黄変する。内層のヴスタイト（Wüstite：FeO）は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト（Wüstite：FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

(4)　大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘　年報15』（平成3年度）千葉県房総風土記の丘　1992

(5)　森岡ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11　朝倉書店　1975



Fe-O系平衡状態図

(6)　大澤正己「河俣城跡出土鋳造・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『河股城跡発掘調査報告書』～国道114号川俣バイパス工事関連発掘調査〈第1冊〉～（川俣町文化財調査報告書第19集）福島県県北事務所・福島県伊達郡川俣町教育委員会 2002

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	調査項目									備考
						大きさ(mm)	重量(g)		メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
AGE-1	上沢Ⅲ	No.487	2	炉壁炉底(補修)(溶解炉)	8～13世紀	89*86*70	357.3	2	なし	-	○	-		○	○	○		
AGE-2	上沢Ⅲ	TI-E東側ベルトSK-30	5	ガラス質滓	8～13世紀	27*34*12	10.53	2	なし	-	○	-		-	○	-		
AGE-3	上沢Ⅲ	SD-03 No.3	5	椀形鍛冶滓(中)	8～9世紀	73*92*36	295.0	4	なし	-	○	○		-	○	-		
AGE-4	上沢Ⅲ	TID東 表土	21	椀形鍛冶滓(小)	8～9世紀	47*45*16	46.45	5	なし	-	○	○		-	○	-		
AGE-5	上沢Ⅲ	No.435	27	鍛冶滓(含鉄銹化)	8～9世紀	48*34*19	33.35	6	△	-	○	○		○	○	-		
AGE-6	上沢Ⅲ	TI-ESK-39	30	製錬滓(含鉄銹化)	12～13世紀	34*20*17	19.95	6	△	-	○	○		○	-	-		
AGE-7	上沢Ⅲ	鍛冶炉	41-1	粒状滓(5点)	8～9世紀	-	-	-	なし	○	○	-		-	-	-		
AGE-8	上沢Ⅲ	鍛冶炉	41-2	鍛造剥片(5点)	8～9世紀	-	-	-	なし	○	○	-		-	-	-		
AGE-9	上沢Ⅲ	SK-39	48	羽口	12～13世紀	42*43*22	39.78	2	なし	-	○	-		-	○	-		

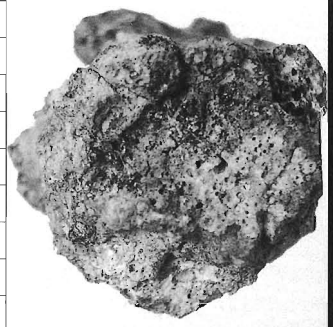
Table. 2 供試材の組成

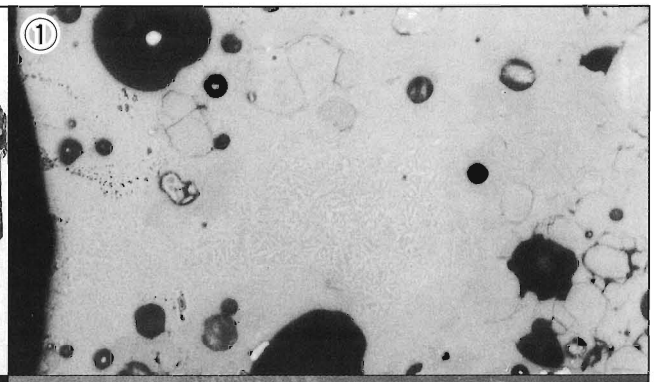
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (TotalFe)	金属鉄 (MetallicFe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	* 二酸化珪素 (SiO_2)	* 酸化アルミニウム (Al_2O_3)	* 酸化カルシウム (CaO)	* 酸化マグネシウム (MgO)	* 酸化カリウム (K_2O)	* 酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	#：Igloss 炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度 ℃	Σ* 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
AGE-1	上沢III	No.487	炉壁炉底(補修)(溶解炉)	8～13世紀	5.52	〈0.01	1.28	6.47	67.35	14.23	2.47	1.22	2.71	1.15	0.08	0.68	0.05	0.02	0.25	#1.97	0.01	0.01	1050	89.13	16.147	0.123	
AGE-2	上沢III	TI-E東側ベルトSK-30	ガラス質滓	8～13世紀	8.80	〈0.01	3.45	8.75	61.14	12.80	2.89	1.43	5.16	1.67	0.09	1.10	0.03	0.01	0.40	0.20	0.01	0.01		85.09	9.669	0.125	
AGE-3	上沢III	SD-03 No.3	椀形鍛冶滓(中)	8～9世紀	45.87	〈0.01	40.22	20.88	24.92	4.31	1.08	0.72	0.88	0.35	0.09	0.79	0.02	0.06	0.28	0.20	0.03	0.01		32.26	0.703	0.017	
AGE-4	上沢III	TID東 表土	椀形鍛冶滓(小)	8～9世紀	56.55	〈0.01	36.70	40.07	13.91	2.35	2.21	0.61	0.68	0.22	0.05	0.17	0.02	0.06	0.20	0.51	0.01	0.01		19.98	0.353	0.003	
AGE-5	上沢III	No.435	鍛冶滓(含鉄銹化)	8～9世紀	47.96	〈0.01	18.99	47.47	16.16	3.85	0.85	0.61	0.54	0.23	0.15	1.44	0.07	0.06	0.27	0.47	0.09	0.01		22.24	0.464	0.030	
AGE-9	上沢III	SK-39	羽口	12～13世紀	5.03	〈0.01	1.05	6.02	67.28	15.07	2.65	1.23	3.25	1.22	0.07	0.80	0.04	0.01	0.20	0.12	0.01	0.01		90.70	18.032	0.159	

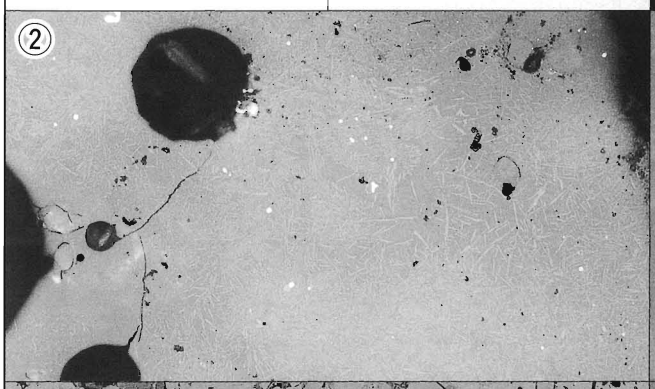
Table. 3 出土遺物の調査結果のまとめ

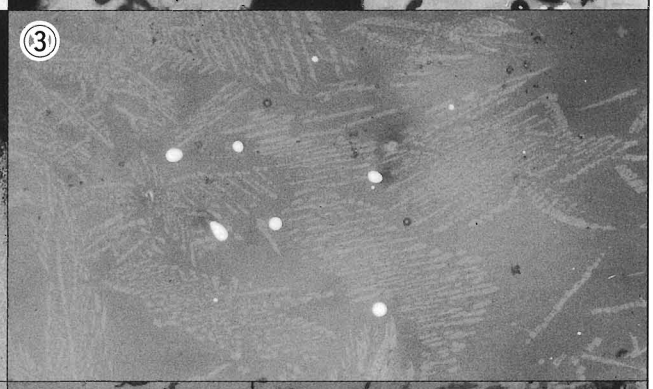
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目								所見
						TotalFe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
AGE-1	上沢Ⅲ	No.487	炉壁炉底(補修)(溶解炉)	8～13世紀	ガラス質滓、微小析出物、微小金属鉄粒、銹化鉄部	5.52	6.47	3.69	0.68	0.01	0.08	89.13	0.01	鉄や銅の鋳造に用いられた溶解炉炉壁片 耐火度:1050℃、やや耐火性の低い成分系
AGE-2	上沢Ⅲ	TI-E東側ベルトSK-30	ガラス質滓	8～13世紀	ガラス質滓中に一部マグネタイト晶出	8.80	8.75	4.32	1.10	0.01	0.09	85.09	0.01	化学組成(高Fe、高塩基性、低Al)はAGE-1・9と近似する
AGE-3	上沢Ⅲ	SD-03 No.3	椀形鍛冶滓(中)	8～9世紀	ヴスタイト+ファイヤライト	45.87	20.88	1.80	0.79	0.03	0.09	32.26	0.01	鍛錬鍛冶滓(原料:砂鉄)
AGE-4	上沢Ⅲ	TID東 表土	椀形鍛冶滓(小)	8～9世紀	ヴスタイト+ファイヤライト	56.55	40.07	2.80	0.17	0.01	0.05	19.98	0.01	鍛錬鍛冶滓(原料:半製品もしくは廃鉄器の可能性あり)
AGE-5	上沢Ⅲ	No.435	鍛冶滓(含鉄銹化)	8～9世紀	ウルボスピネル+ヴスタイト+ファイヤライト、付着鍛造剥片	47.96	47.47	1.46	1.44	0.09	0.15	22.24	0.01	精錬鍛冶末期もしくは鍛錬鍛冶初期排出物(原料:塩基性砂鉄)
AGE-6	上沢Ⅲ	TI-E SK-39	製錬滓(含鉄銹化)	12～13世紀	イルミナイト・ルチル化進行過程 ウルボスピネル+ファイヤライト	-	-	-	-	-	-	-	-	製錬滓(原料塩基性砂鉄)、鍛冶原料に固着した不純物か
AGE-7	上沢Ⅲ	鍛冶炉	粒状滓(5点)	8～9世紀	1:ガラス質、混入砂鉄、マグネタイト晶出 2・4・5:ヴスタイト+ファイヤライト、3:ヴスタイト凝集	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打工程の前半段階の派生物
AGE-8	上沢Ⅲ	鍛冶炉	鍛造剥片(5点)	8～9世紀	1・3・5内層ヴスタイト非晶質	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打工程の中間～後半段階の派生物
AGE-9	上沢Ⅲ	SK-39	羽口	12～13世紀	ガラス質滓、混入砂鉄、微小析出物	5.03	6.02	3.88	0.80	0.01	0.07	90.70	0.01	化学組成はAGE-1・2と近似する

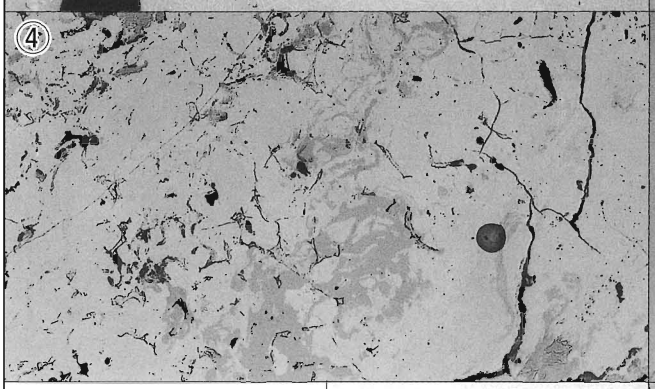
AGE-1
溶解炉炉壁（炉底）
①×100内面：溶融ガラス
質滓中の微小析出物
②×100③×400ガラス質
滓中の微小金属鉄粒
④×100⑤×400銹化鉄・フ
ェライト・少量パーライト
亜共析組織痕跡

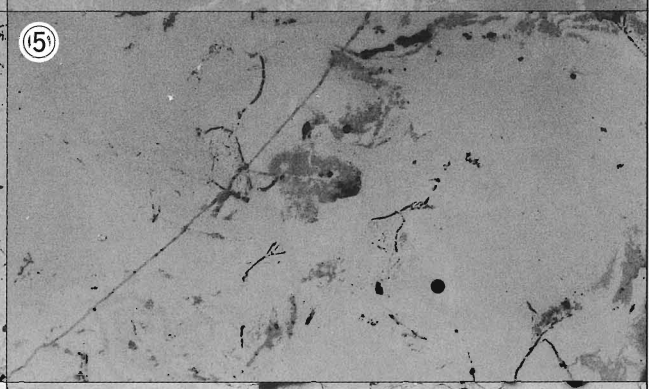




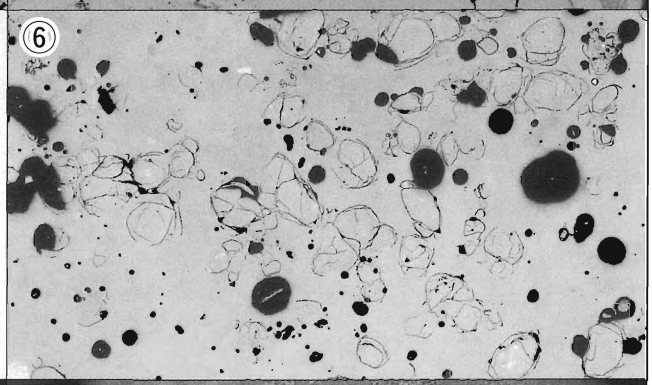


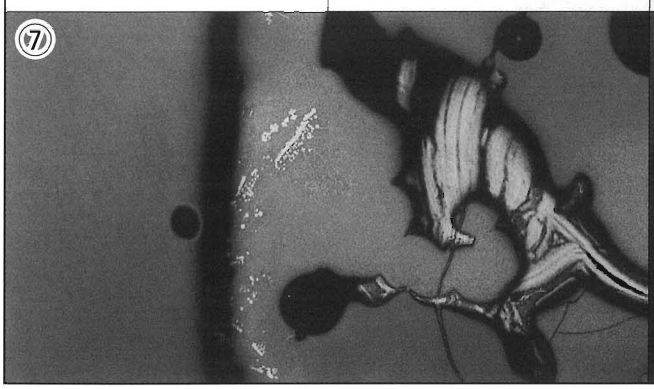






AGE-2
ガラス質滓
⑥×50暗黒色ガラス質滓
⑦×100⑧×400上面側表
層ガラス質滓中にマグネタ
イト晶出





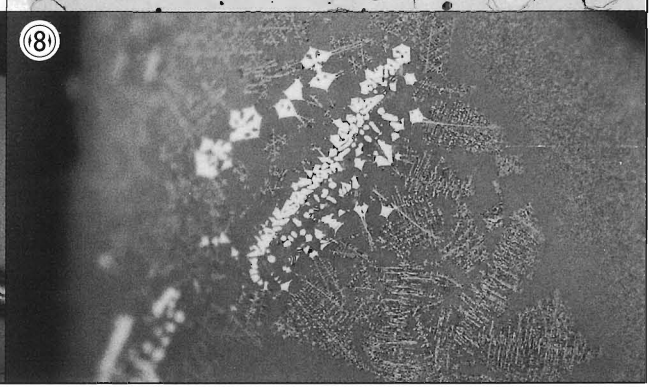
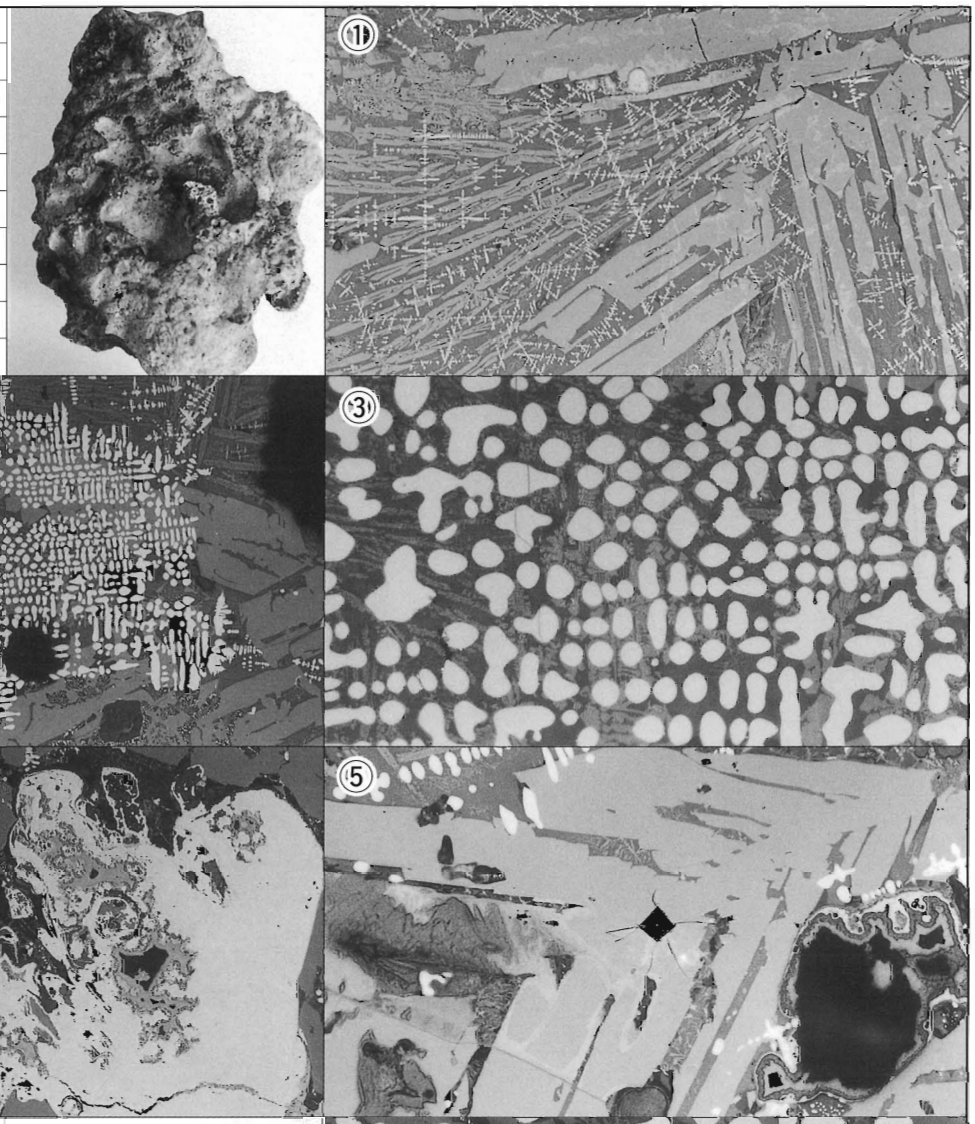


Photo.1　溶解炉炉壁・ガラス質滓の顕微鏡組織

AGE-3
椀形鍛冶滓
①×100ヴスタイト・ファイヤライト
②×100③×400同上
④×100銹化鉄
⑤×200硬度圧痕：621HV
ファイヤライト



AGE-4
椀形鍛冶滓
⑥×200硬度圧痕：419HV
⑦×100⑧×400ヴスタイト・ファイヤライト

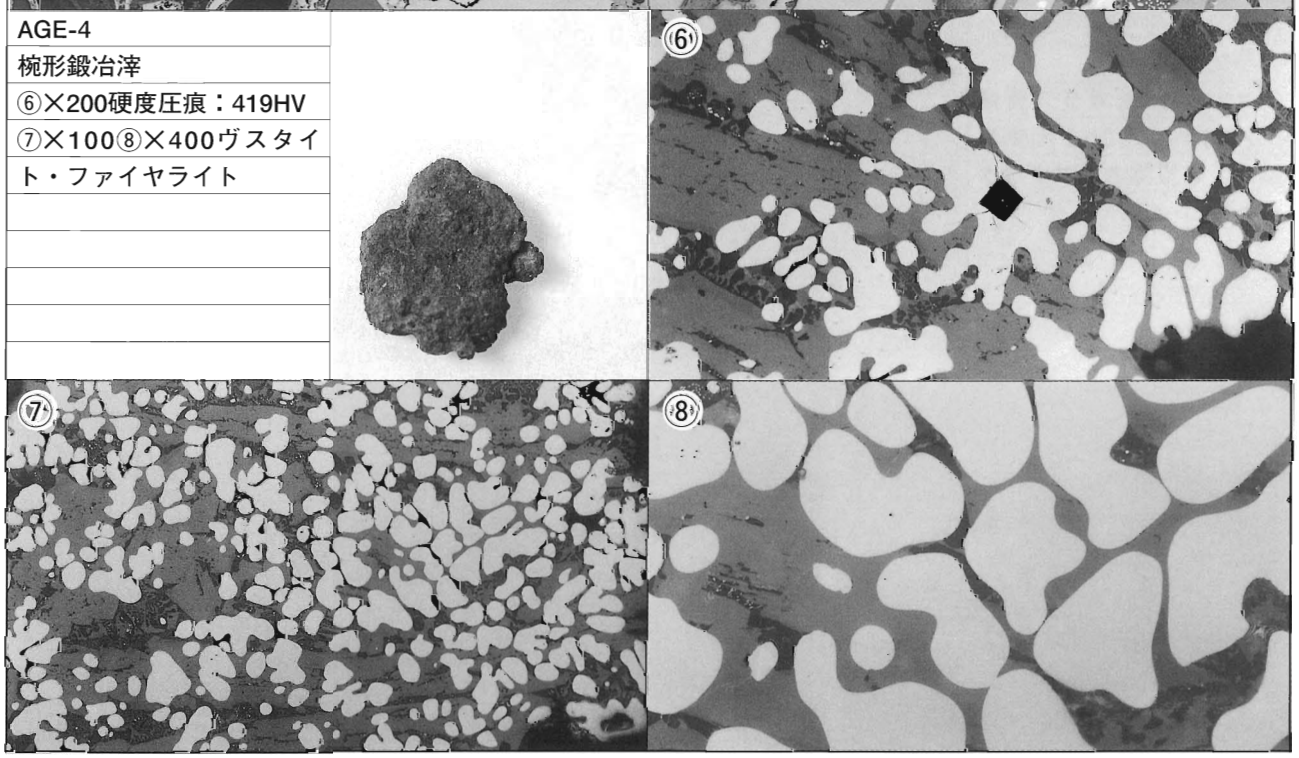
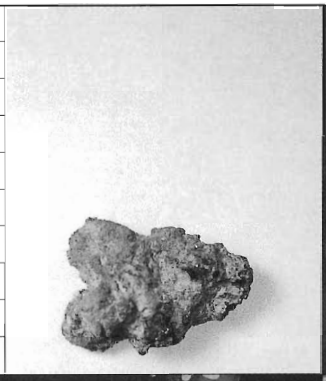


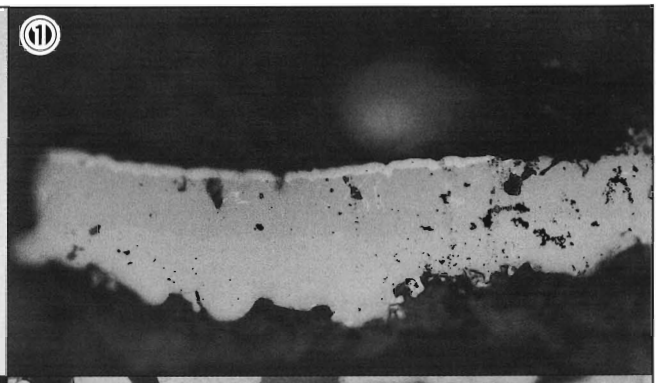
Photo.2　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

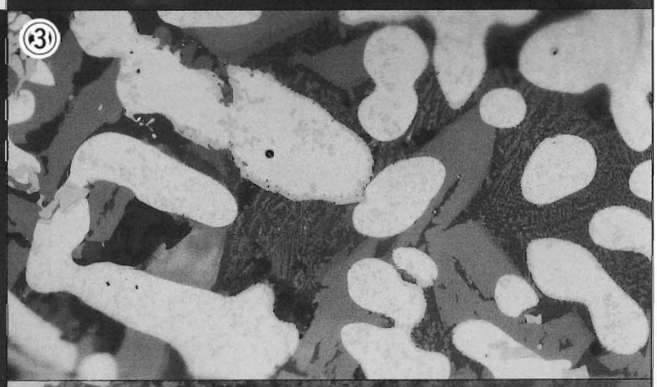
AGE-5

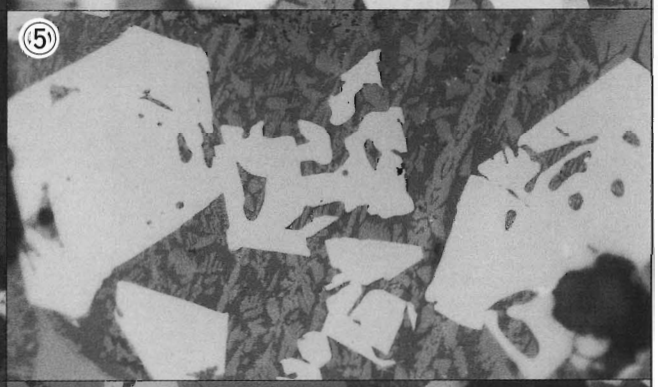
鍛冶滓（含鉄）

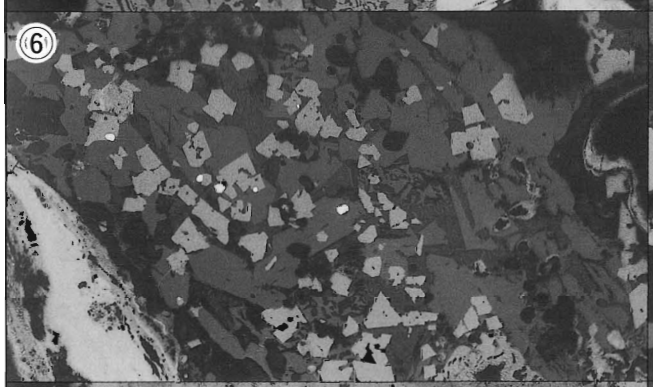
①×400付着鍛造剥片②×100③×400ヴスタイト（粒内析出物あり）・ファイヤライト④×100⑤×400ウルボスピネル・ファイヤライト⑥×100⑦×400同上⑧×100銹化鉄⑨×200硬度圧痕：740HV

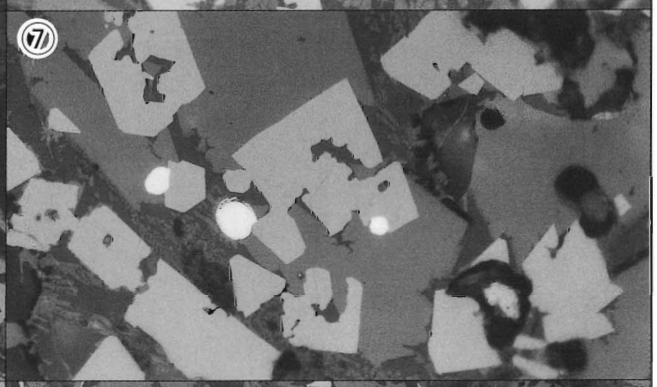


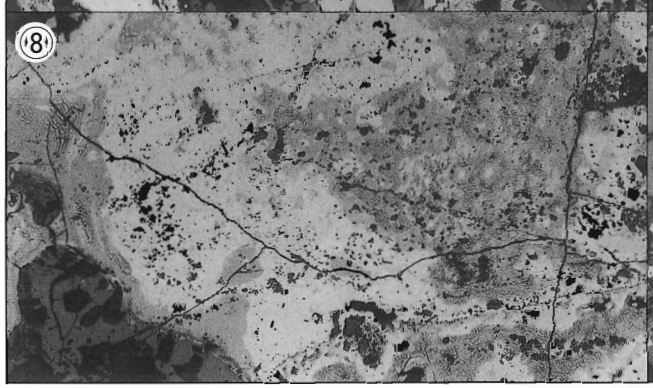












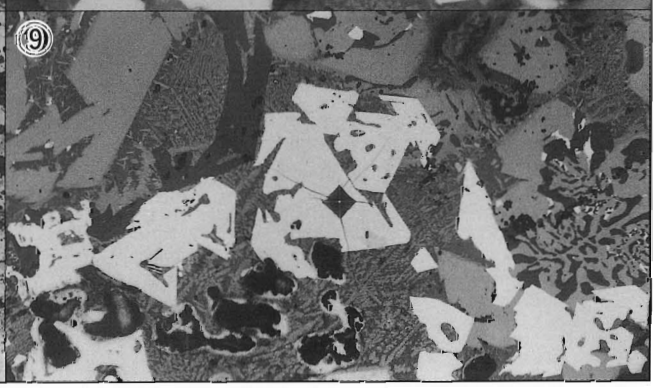


Photo.3　鍛冶滓（含鉄）の顕微鏡組織

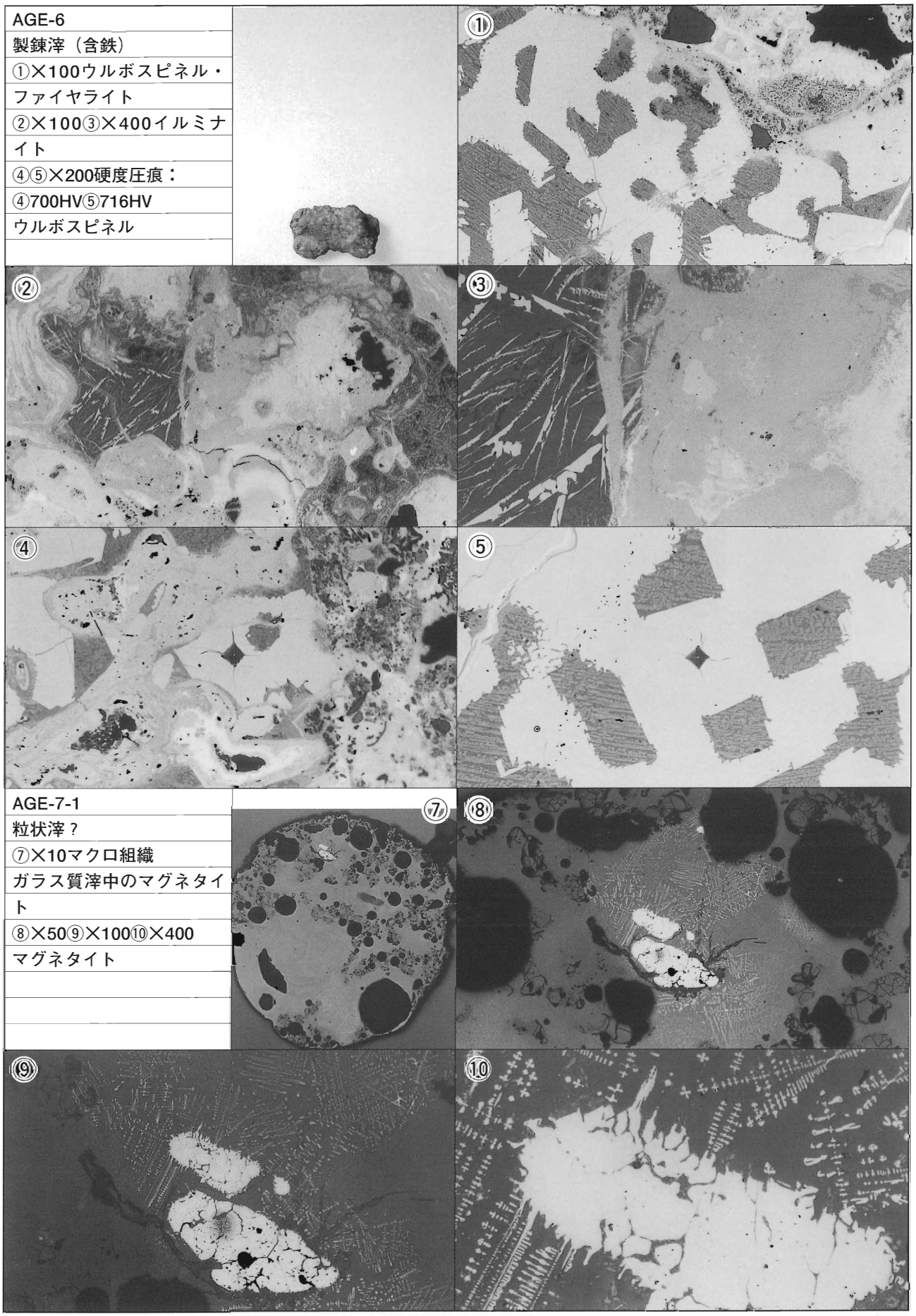
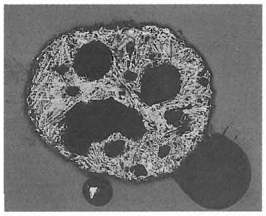
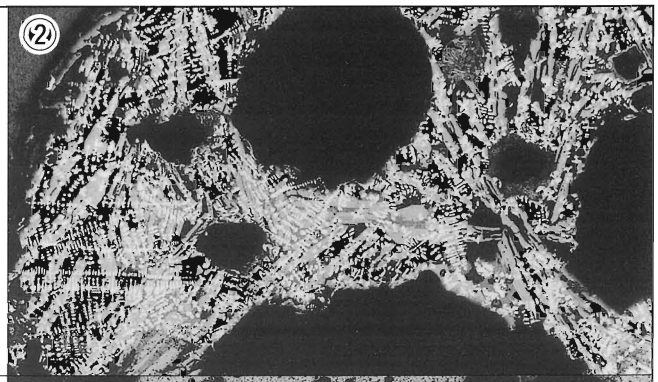


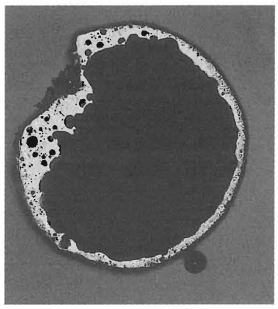
Photo.4　製錬滓（含鉄）・粒状滓の顕微鏡組織

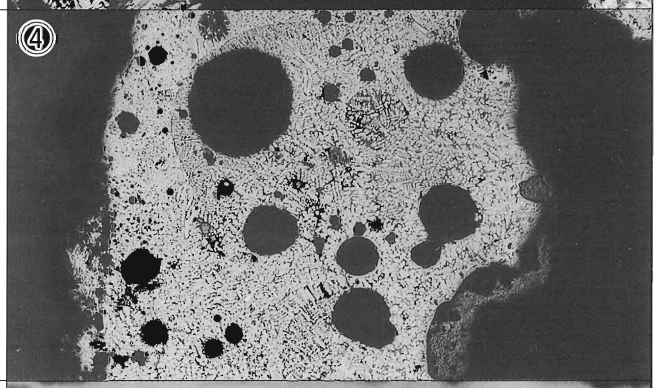
AGE-7-2
粒状滓
①×10マクロ組織
②×50ヴスタイト・ファイヤライト



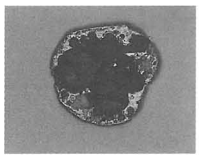


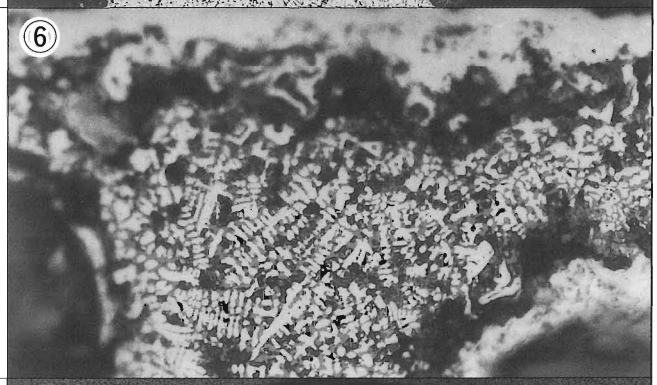
AGE-7-3
粒状滓
③×10マクロ組織
④×100ヴスタイト凝集



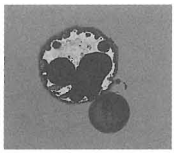


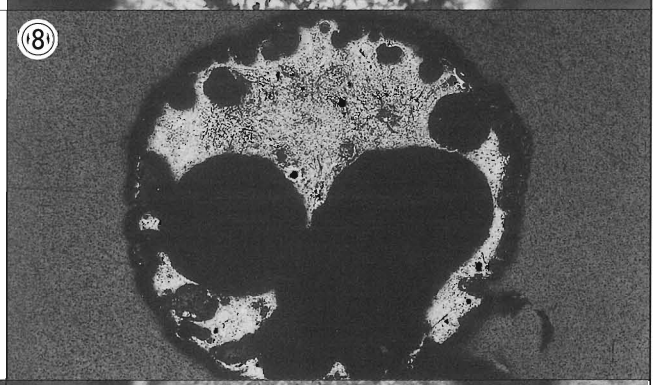
AGE-7-4
粒状滓
⑤×10マクロ組織
⑥×400ヴスタイト・ファイヤライト

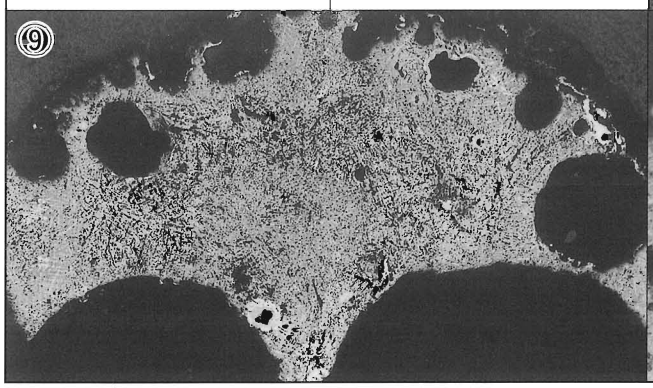




AGE-7-5
粒状滓
⑦×10マクロ組織
⑧×50⑨×100⑩×400
微小ヴスタイト・ファイヤライト







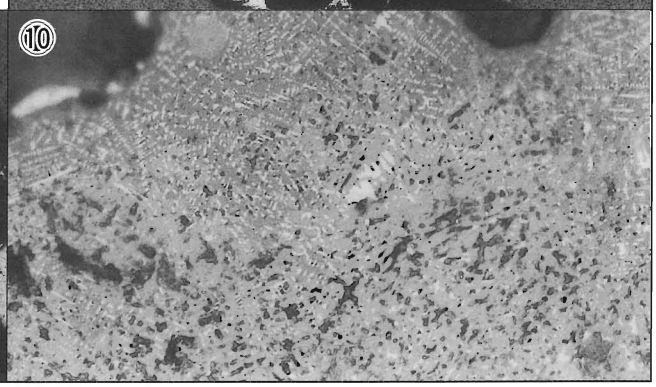
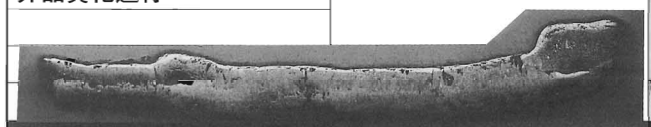
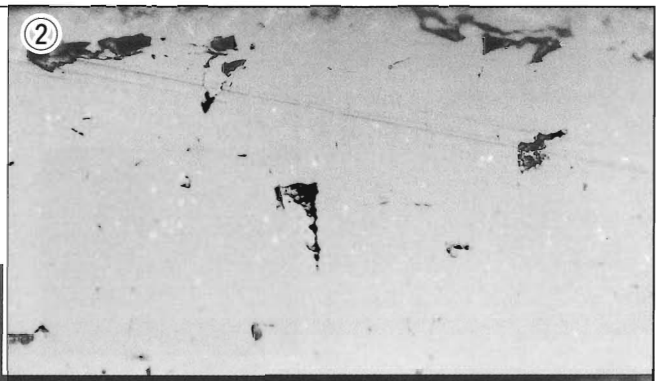


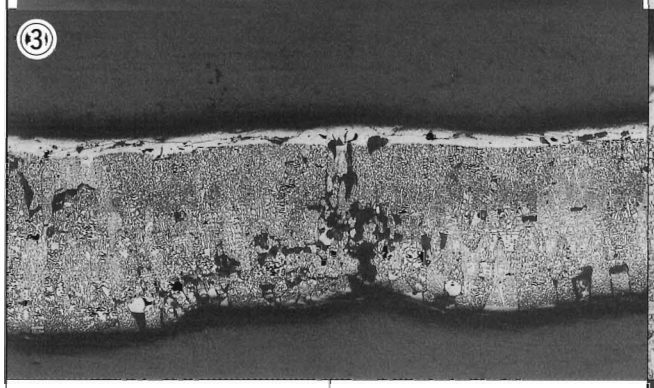
Photo.5　粒状滓の顕微鏡組織

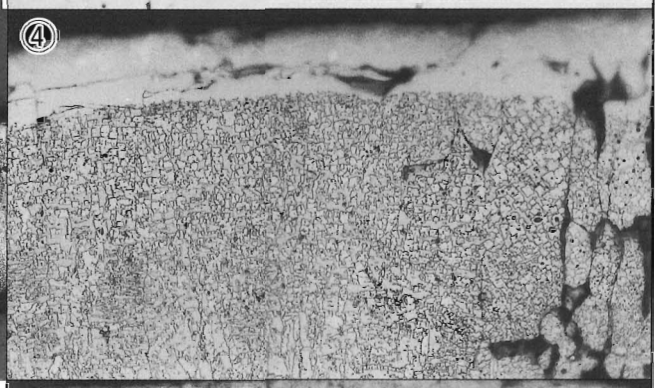
AGE-8-1
鍛造剥片
①×25王水etchマクロ組織
②×400　no　etch
③×100④×400王水etch
3層分離型・内層ヴスタイト
非晶質化進行



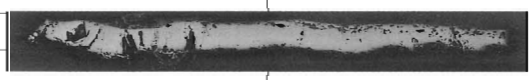
①



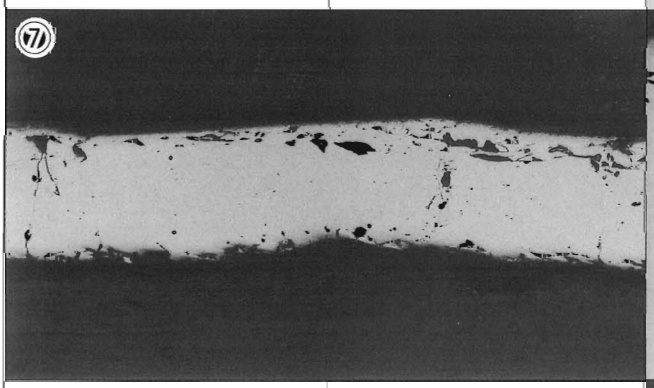




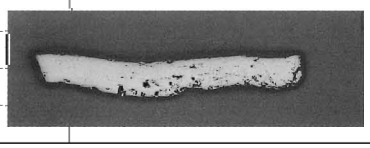
AGE-8-2
鍛造剥片？
⑤×25王水etchマクロ組織
⑥×100　no　etch
⑦×100⑧×400王水etch
腐食後変化なし
3層横造不明瞭



⑤



AGE-8-3
鍛造剥片
⑨⑩王水etch
⑨×25マクロ組織
⑩×400　3層分離型
内層ヴスタイト非晶質



⑨

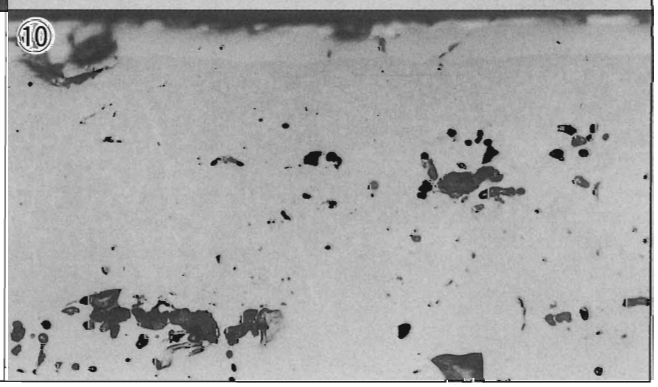
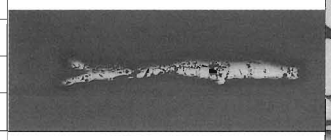
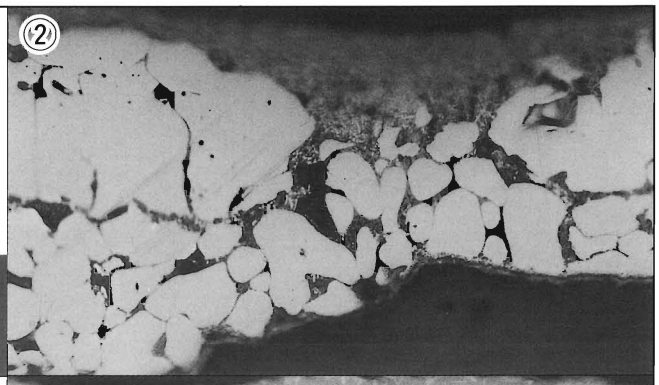


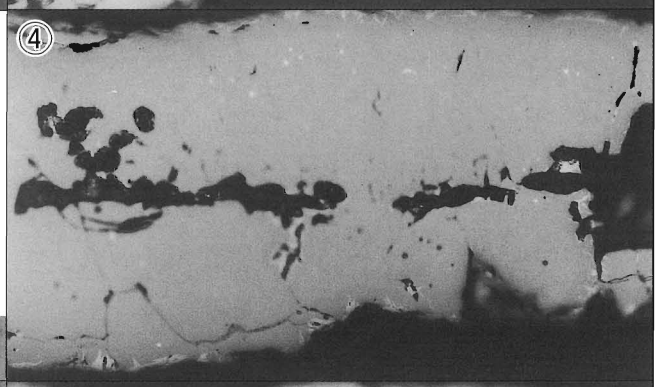
Photo.6　鍛造剥片の顕微鏡組織

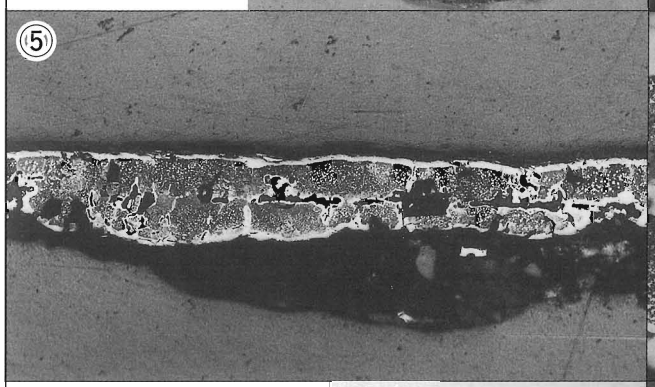
AGE-8-4
鍛冶滓片？
①②王水etch
①×25マクロ組織
②×400ヴスタイト・ファイヤライト

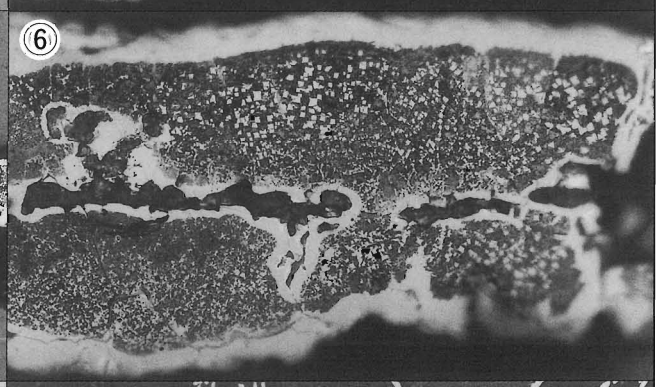




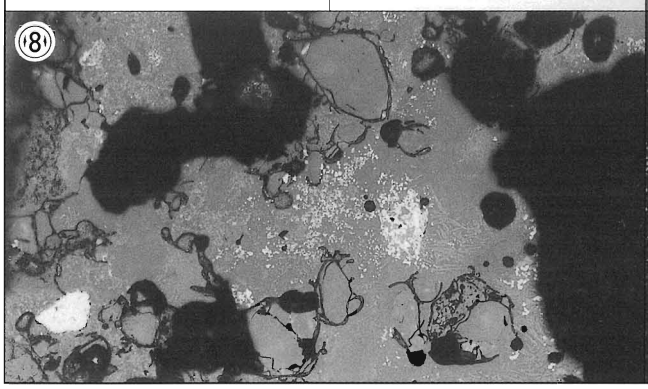
AGE-8-5
鍛造剥片
③×25王水etchマクロ組織
④×400　no　etch
⑤×100⑥×400王水etch
表裏両面に外層ヘマタイト・中間層マグネタイト
内層ヴスタイト非晶質







AGE-9
羽口
⑦×400ガラス質滓中の微小析出物
⑧×100⑨×400ガラス質滓中に羽口胎土への混入砂鉄散在



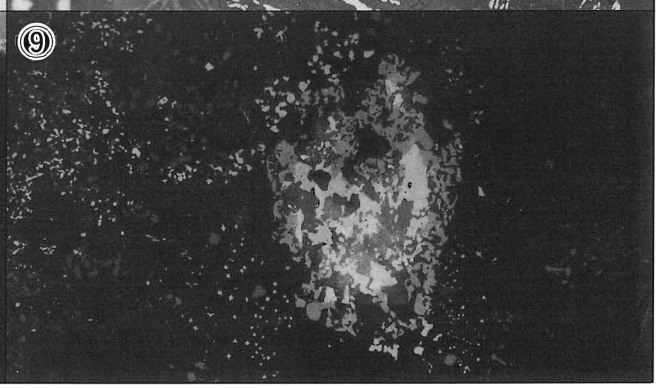
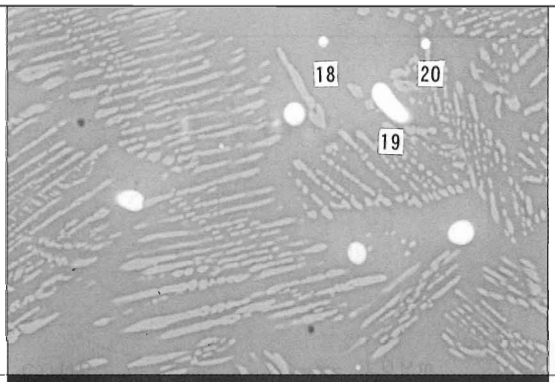


Photo.7　鍛造剥片・羽口の顕微鏡組織

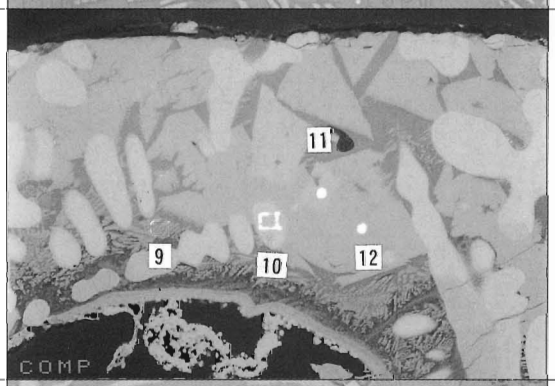
COMP
×1000



Element	18	19	20
F	-	-	-
Na2O	1.183	0.227	0.369
MgO	2.777	0.042	9.925
Al2O3	12.006	0.946	5.950
SiO2	58.788	3.874	53.851
P2O5	0.089	0.096	0.060
S	0.001	-	0.006
K2O	4.162	0.089	1.035
CaO	13.109	1.063	20.566
TiO2	0.556	0.053	0.904
Cr2O3	-	-	-
MnO	0.198	-	0.351
FeO	4.462	124.865	7.289
SrO	0.318	0.059	0.215
ZrO2	-	0.020	-
V2O3	-	-	0.053
Total	97.649	131.334	100.573

(AGE-1)

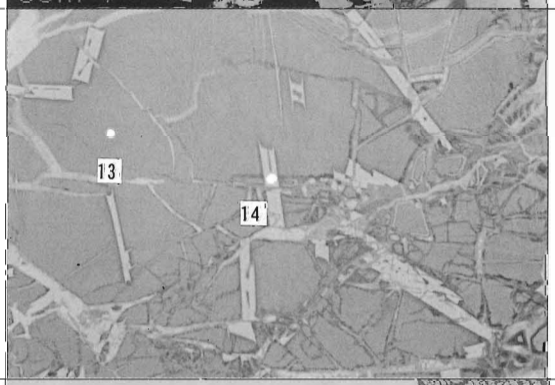
COMP
×400



Element	9	10	11	12
F	-	-	-	-
Na2O	4.460	0.044	-	0.026
MgO	0.254	0.238	0.524	3.400
Al2O3	13.685	1.796	5.635	0.162
SiO2	38.556	0.399	0.199	30.636
P2O5	0.216	0.007	-	0.044
S	0.003	-	0.001	-
K2O	3.804	-	-	-
CaO	9.957	-	-	1.457
TiO2	0.906	6.294	20.971	0.356
Cr2O3	0.061	0.107	0.982	-
MnO	0.260	0.273	0.293	0.627
FeO	27.114	89.009	67.203	63.785
SrO	0.286	0.026	0.004	0.144
ZrO2	0.073	0.003	0.042	-
V2O3	-	0.974	3.084	0.068
Total	99.634	99.170	98.938	100.705

(AGE-5)

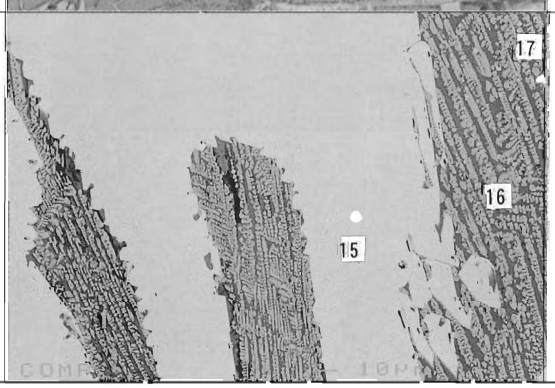
COMP
×1000



Element	13	14
F	-	-
Na2O	0.732	0.018
MgO	2.714	4.896
Al2O3	11.539	2.717
SiO2	41.219	0.805
P2O5	0.061	-
S	-	-
K2O	3.021	0.034
CaO	11.216	0.092
TiO2	11.400	62.359
Cr2O3	-	0.335
MnO	2.936	1.680
FeO	11.858	14.793
SrO	0.249	0.057
ZrO2	0.106	0.077
V2O3	0.083	3.498
Total	97.134	91.361

(AGE-6-①)

COMP
×400



Element	15	16	17
F	-	-	-
Na2O	-	1.572	0.110
MgO	2.254	0.246	3.735
Al2O3	6.070	16.091	0.627
SiO2	0.092	42.090	31.258
P2O5	-	0.469	0.115
S	0.002	0.026	0.002
K2O	-	5.412	0.072
CaO	-	12.419	5.510
TiO2	28.009	1.712	0.954
Cr2O3	1.131	-	0.073
MnO	1.579	0.588	2.680
FeO	56.892	14.467	55.990
SrO	0.052	0.318	0.115
ZrO2	0.072	0.389	0.033
V2O3	4.383	0.097	0.058
Total	100.536	95.890	101.332

(AGE-6-②)

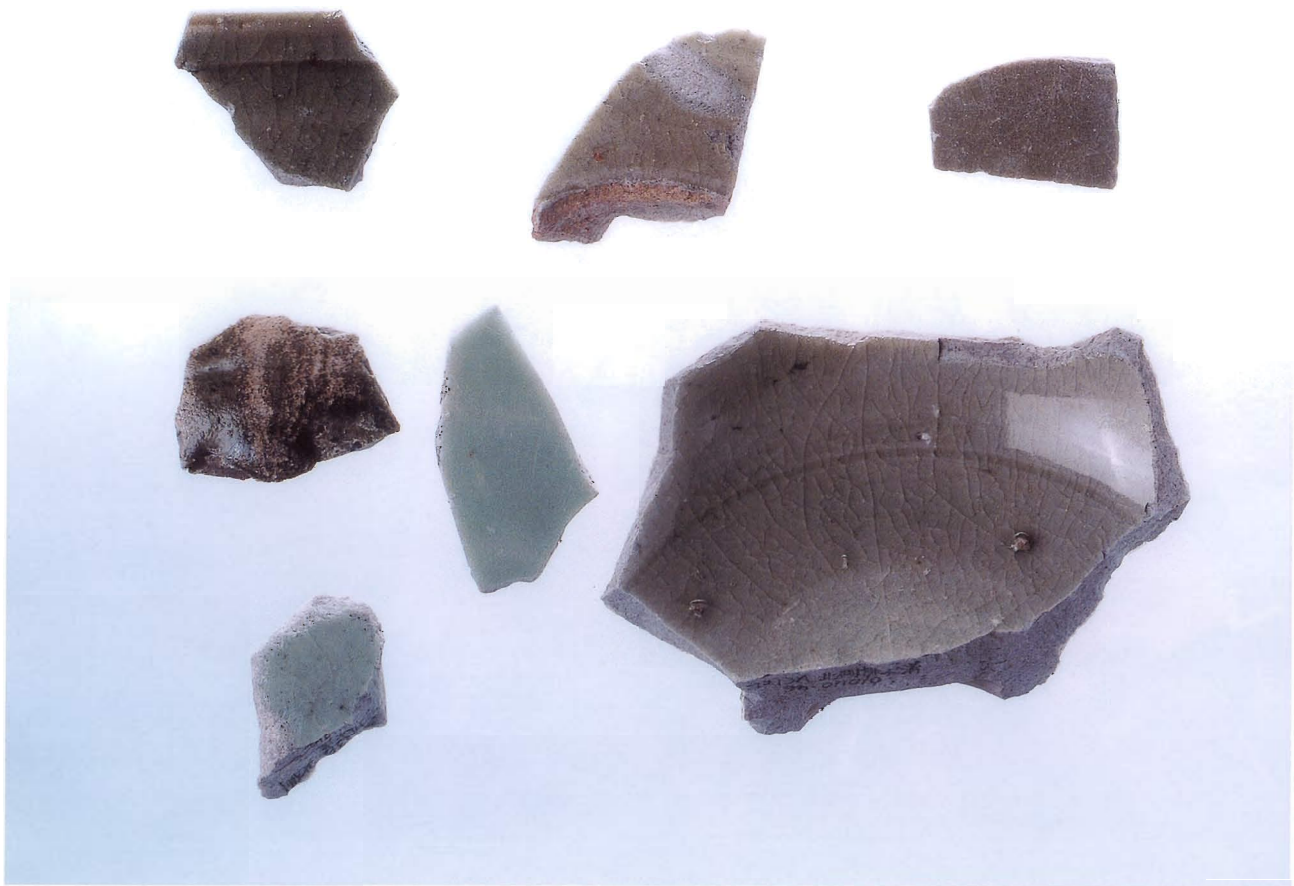
Photo.8　滓部鉱物相の反射電子像と定量分析値

写真図版

調査区空撮写真

図版2（古志本郷遺跡）

1.SD02出土古式土師器



2.青磁

13-W6

13-W7

13-W8

13-W9

13-W11

13-W10

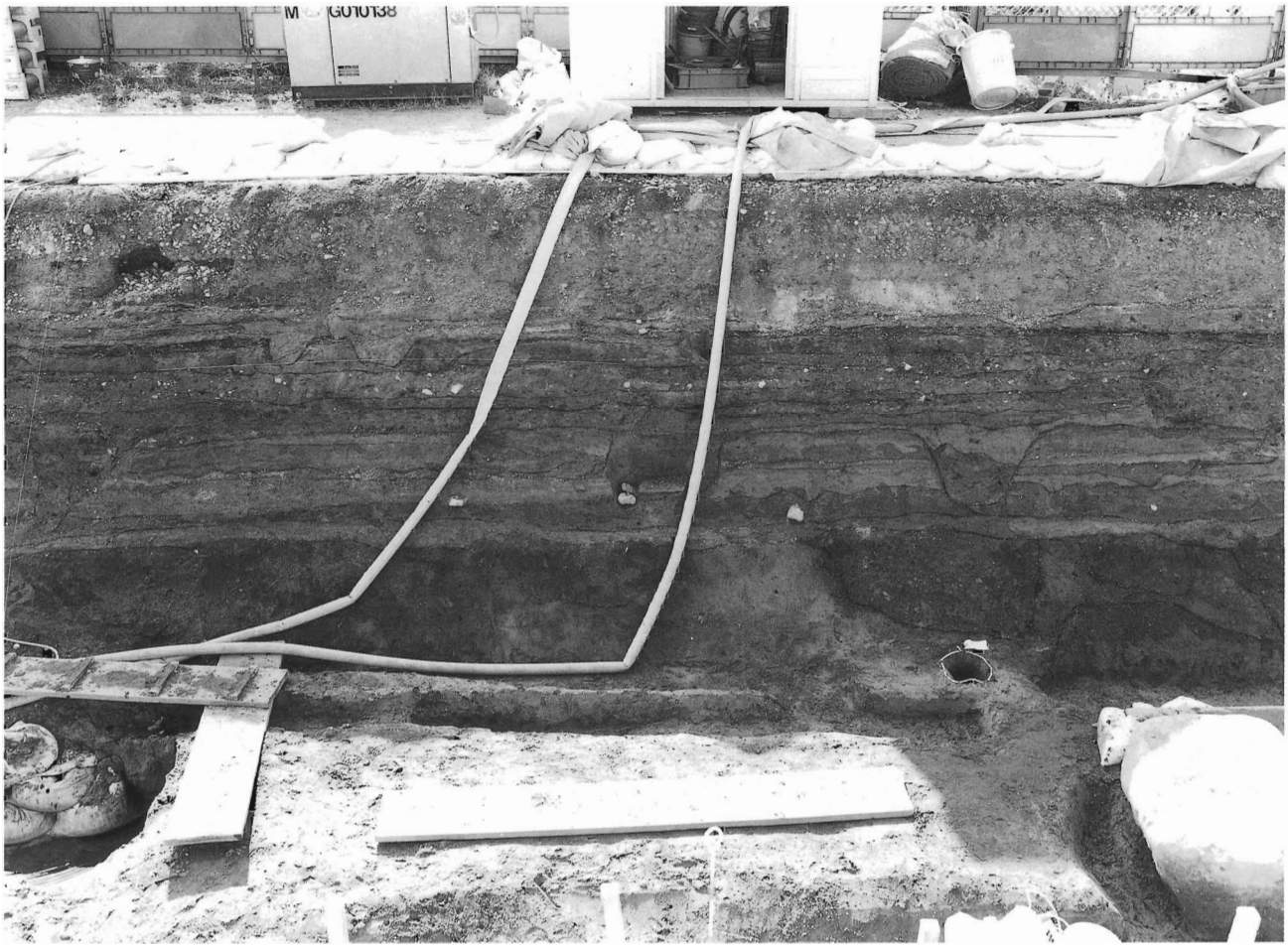
13-W12

木製の容器

図版4（古志本郷遺跡）

1. 調査前風景

2. 西壁



1. 南壁（東側）

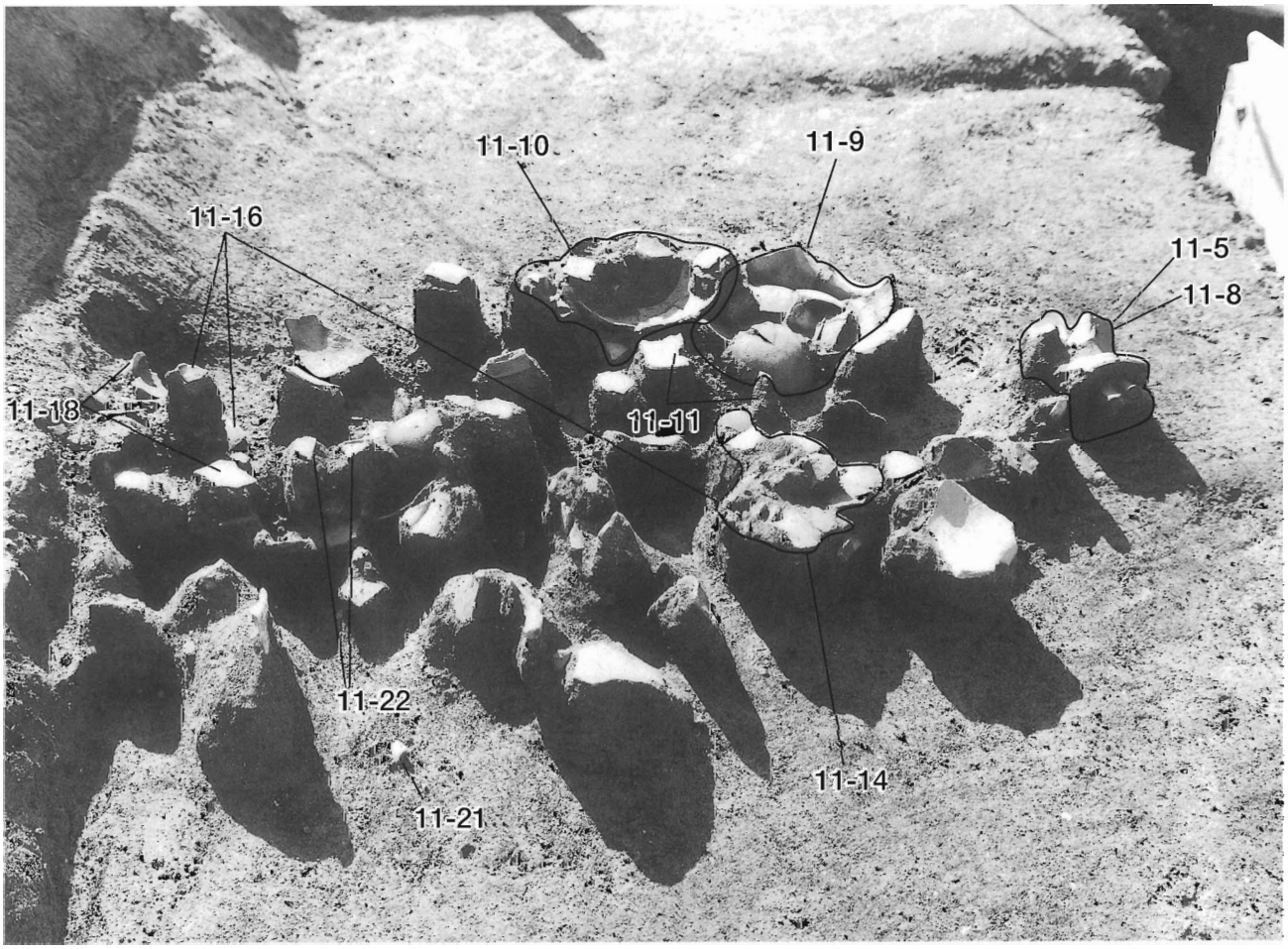
2. 南壁（中央）

図版6（古志本郷遺跡）

1. 南壁（西側）

2. 北壁

1. SD01・SD02　検出（西から）



2. SD02　土器検出（東から）

図版8（古志本郷遺跡）

1. SD02　完掘（北西から）

2. 完掘（西から）

11-9

11-9（底部）

11-10

11-10

11-9（文様）

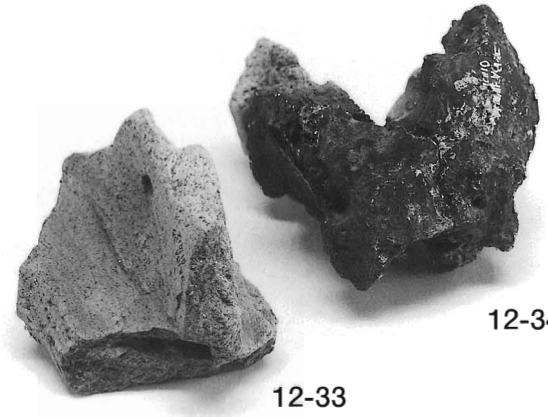
古式土師器（1）

図版10（古志本郷遺跡）

11-8

11-16

11-12



12-34

12-33

11-24

12-31

12-32

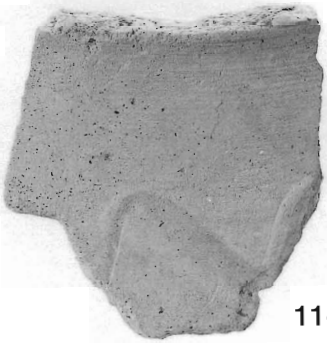
11-5（文様）

12-30

古式土師器（2）・土製品・土師器（1）・中世土師器（1）

11-2

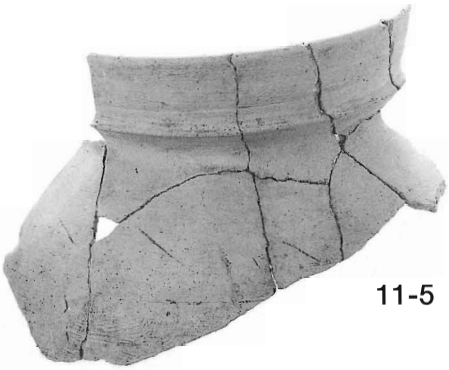
11-1



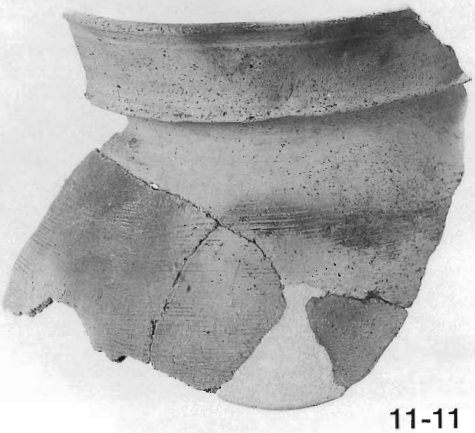
11-4

11-3

11-6



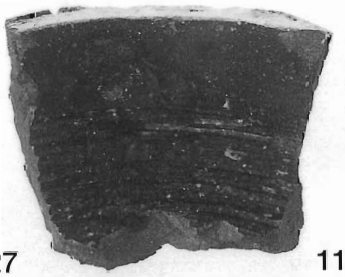
11-5



11-11

11-7

12-27

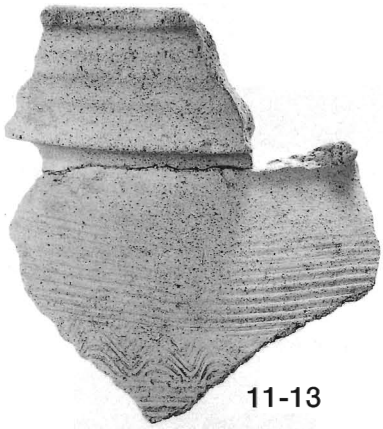


11-26

11-25

弥生土器（1）・古式土師器（3）・須恵器（1）

図版12（古志本郷遺跡）

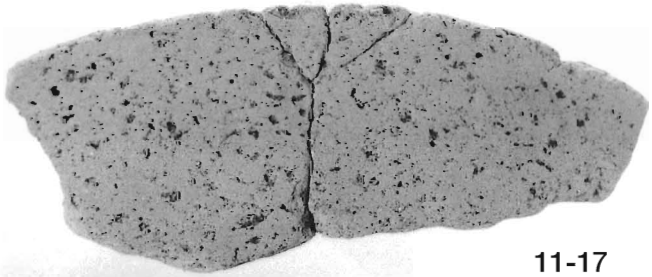

11-13

11-14

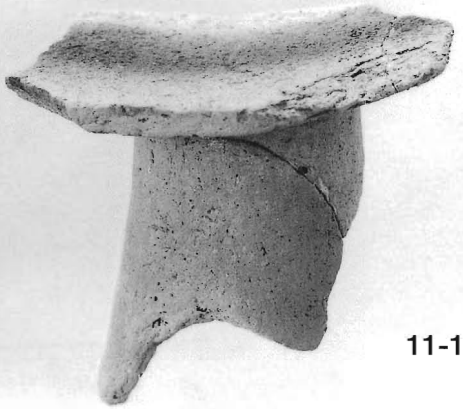
11-15

11-21

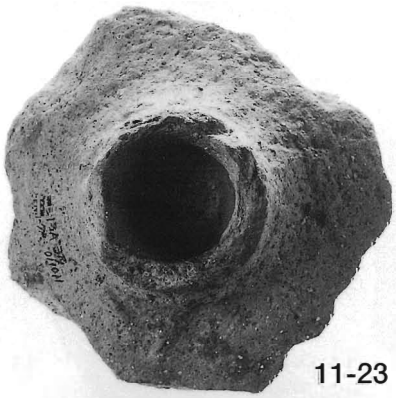
11-22

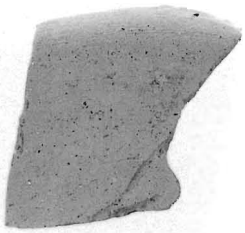

11-17

11-19


11-18

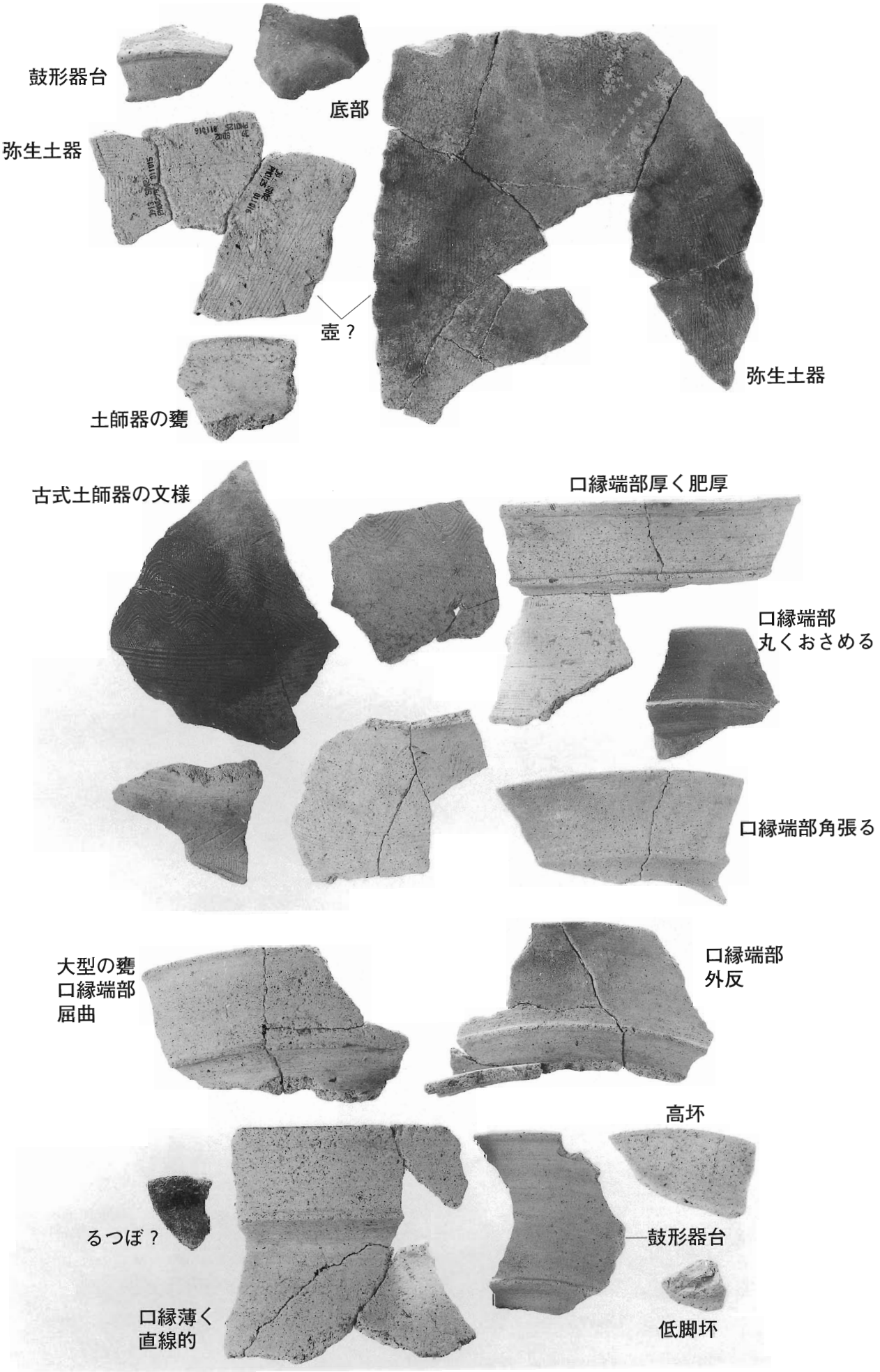
11-20


11-23


12-28

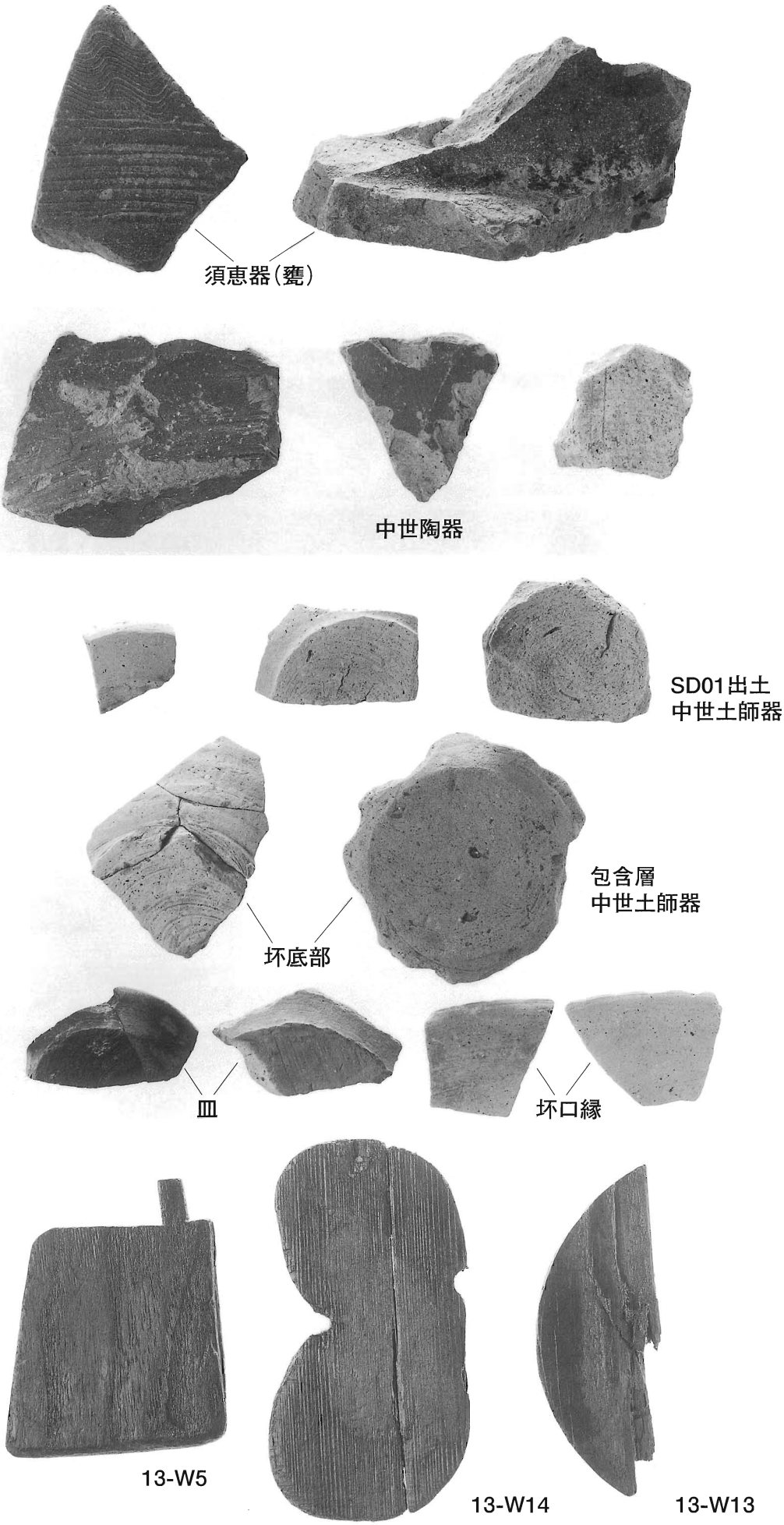
12-29

古式土師器（4）・土師器（2）・中世土師器（2）



弥生土器（2）・古式土師器（5）

図版14（古志本郷遺跡）



須恵器（2）・中世陶器・中世土師器（3）・木製品（1）

13-W2

13-W1

13-W2

13-W1

木製品（2）

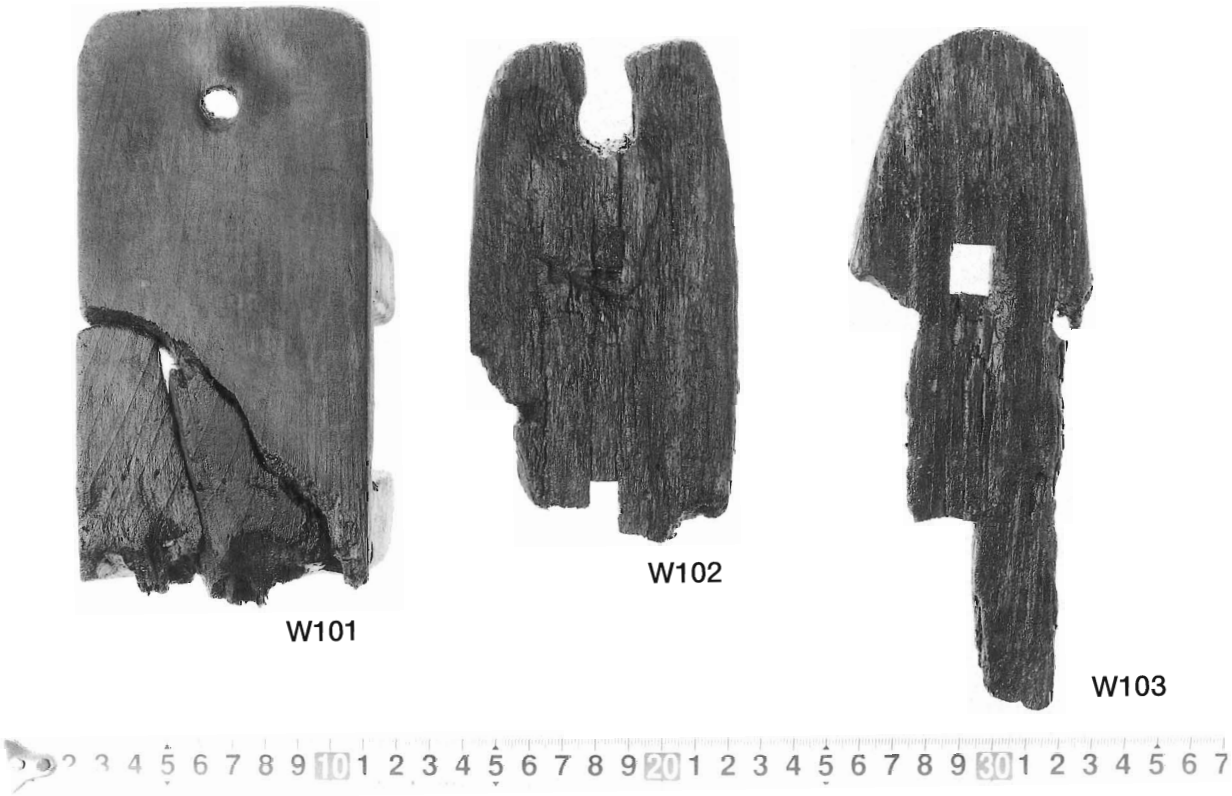
13-W4

13-W3

13-W4

13-W3

木製品（3）

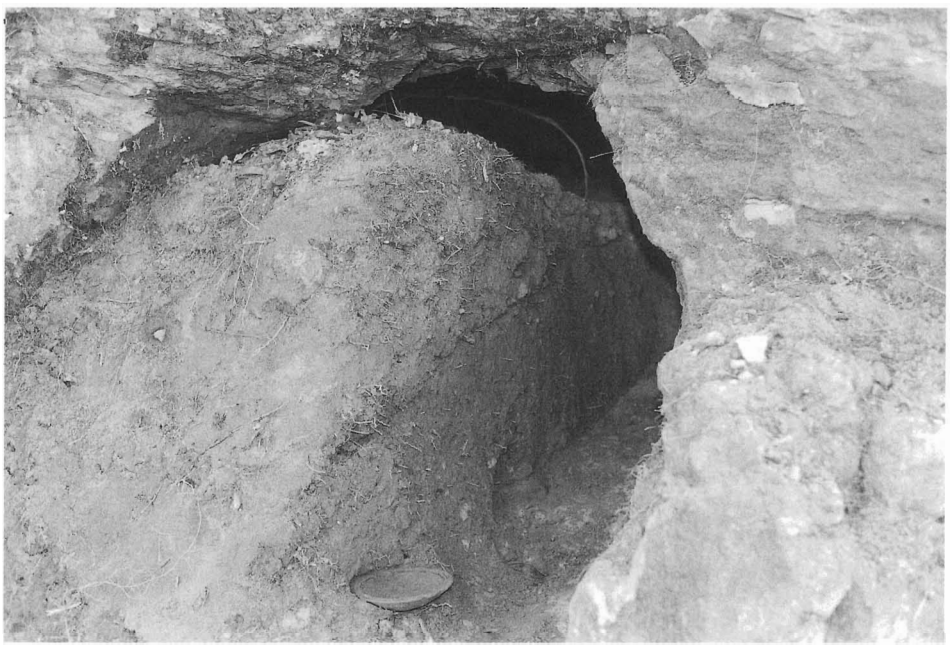


木製品（4）

図版18（放れ山横穴墓群）

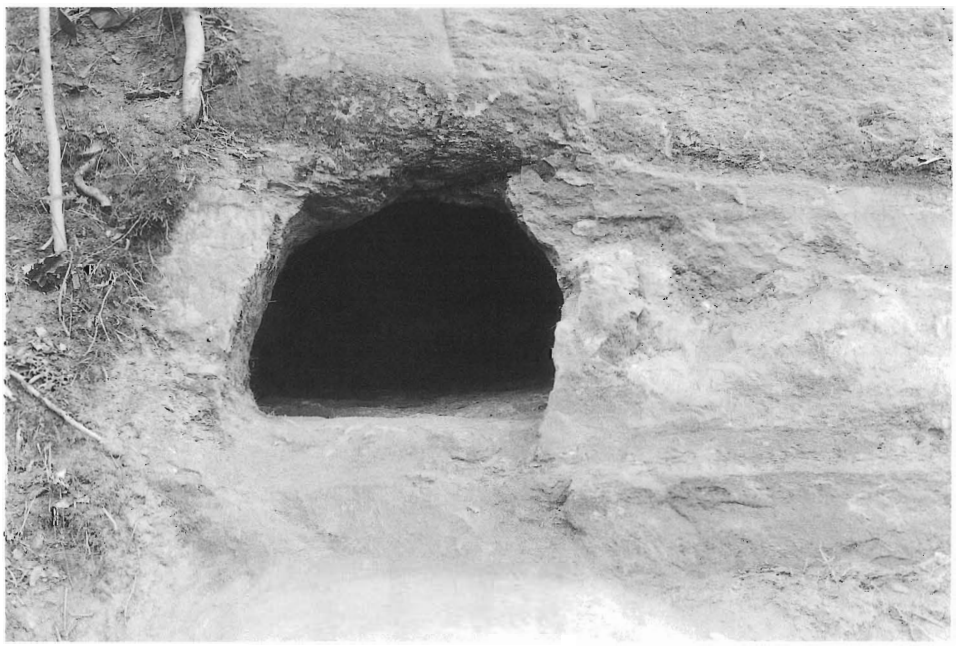
調査前風景

表土剥ぎ取り状況



土層堆積状況

遺物出土状況



完掘状況（1）

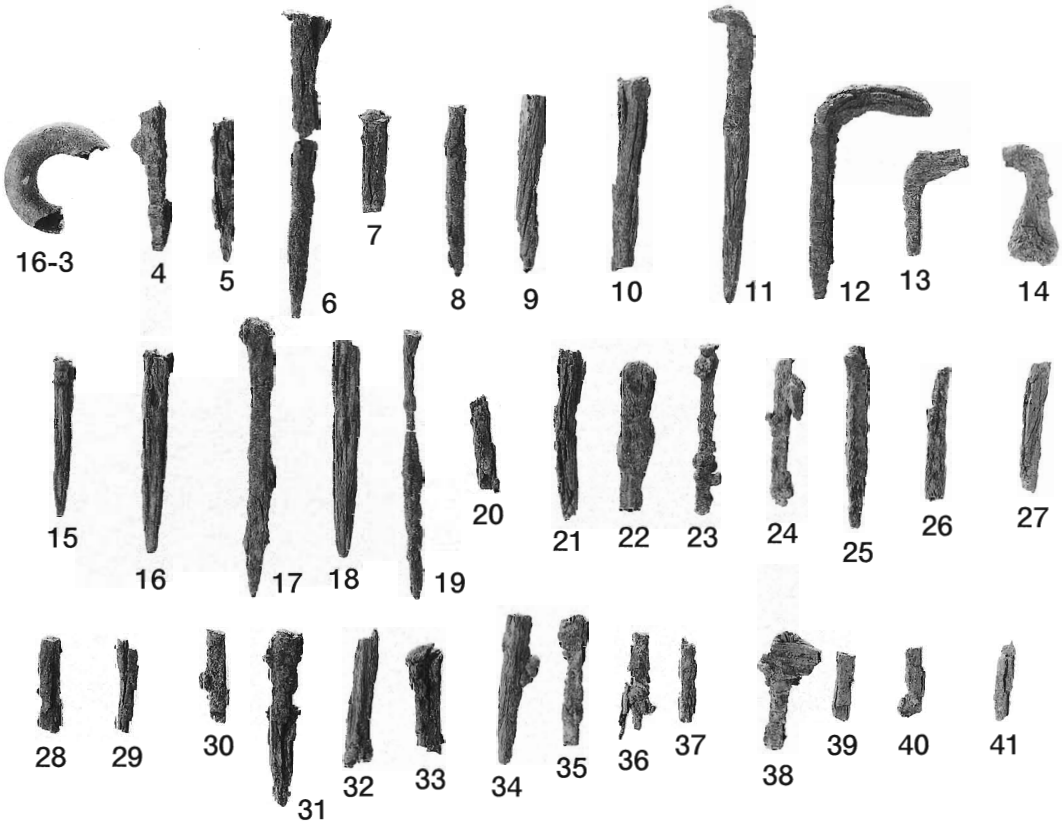
完掘状況（2）

図版20（放れ山横穴墓群）

1.
玄室壁の
工具痕

16-1

16-2



2.出土遺物

10m付近（下流から）

70m付近（上流から）

図版22（只谷間府）

明かり取り穴（75m付近、上流から）

94m付近（下流から）

150m付近（下流から）

180m付近（下流から）

図版24（只谷間府）

湾曲状況（200m付近、下流から）

段違いの天井（245m付近、下流から）

コンクリート天井（269m付近、下流から）

290m付近（下流から）

報　告　書　抄　録

フリガナ	コシホンゴウイセキ・ヨン、ハナレヤマヨコアナボグン、タダタニマブ、アゲサワサンイセキ
書名	古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡（分析編）
副書名	
巻次	
シリーズ名	斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	14
執筆者名	中川　寧・平石　充・宮澤明久・大澤正巳・鈴木瑞穂
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒690-0131　島根県松江市打出町33番地 TEL0852-36-8608㈹ E-mail:maibun@pref.shimane.jp
発行年月日	西暦2002年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
古志本郷（コシホンゴウ）	島根県出雲市（シマネケンイズモシ） 古志町（コシチョウ）	33203	W1	35度 20分 34秒	132度 44分 37秒	20011001 ～ 20011031	130㎡	斐伊川放水路建設
放れ山横穴墓群（ハナレヤマヨコアナボグン）	古志町（コシチョウ）	33203	W136	35度 20分 01秒	132度 44分 46秒	19970207 ～ 19970209	70㎡	
只谷間府（タダタニマブ）	上塩冶町（カミエンヤチョウ）	33203	W104	35度 20分 59秒	132度 46分 54秒	19971110 ～ 19971212	3,200㎡	
上沢Ⅲ（アゲサワサン）	上塩冶町（カミエンヤチョウ）	33203		35度 20分 49秒	132度 46分 38秒	19980420 ～ 19980918	2,752㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古志本郷	集落	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	溝　4条	弥生土器　木製品 土師器　移動式竈 須恵器 中世土師器 輸入陶磁器	H区やI区で見つかった溝と同一の古墳時代初頭の溝 中世の溝 近世以降の整地土または道路と思われる面を複数確認
放れ山横穴墓群	横穴	古墳時代	横穴墓　1基	須恵器　銀環 鉄釘	
只谷間府	間府	江戸時代	用水路		
上沢Ⅲ	集落 墳墓	奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	掘立柱建物 墳墓	土師器　製塩土器 須恵器　土錘 中世土師器 輸入陶磁器	今回は分析編のみ

島根県出雲市
古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群
只谷間府・上沢Ⅲ遺跡（分析編）
斐伊川放水路予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14

2002（平成14）年3月29日　発行

発行　国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
　　島根県教育委員会
編集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
　　〒690-0131　島根県松江市打出町33
　　TEL 0852-36-8608
　　http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/
印刷　柏村印刷株式会社